

## 再び屋代本平家物語について

高 橋 貞 一

### 一

昭和十八年八月、拙著、「平家物語諸本の研究」中に、屋代本平家物語について論及する所があつたが、屋代本が四十一年三月角川書店より出版され、その解説中に、筆者の見解を紹介されてゐる。略その主旨に相違はないが、他の平家物語研究者と意見を異にする點が十分に盡されてゐないので、再びここに詳細にわたつて私見を述べてみようと思ふ。

他の研究者達の意見は、この屋代本平家物語を平家物語の古い形態、古い詞章を示すものと認めるのであるが、これは山田孝雄博士が「平家物語考」で灌頂卷の成立は後のもので、現在の平家物語一方流の諸本は灌頂卷が最後にあり、灌頂卷のない八坂流本が古い形態であるといふ推論を基とする見解である。しかし、山田博士も認める如く、本文詞章は一方流本がむしろ八坂流本よりは古き形態を保持してゐると認むべき點が多いのである。

又最近の渥美かをる博士、富倉徳次郎博士の考察は、屋代本を研究の基礎として、覺一本を屋代本よりの發展として把握してをられ、屋

再び屋代本平家物語について

代本の本文上の性格や他の八坂流本との關連を殆ど無視せられてゐる點は、筆者の研究を理解されてゐないとも推測せられる。筆者の見解は、一方流本の最古の傳本は覺一本である。（又は覺一本系統本といつてもよい）。八坂流本はこの一方流本が平曲によつて次第に變化して、詞章の上に増補改訂が加はつて成立したものと推定するのである。一方流本と組織においては同一である諸本、謂はば八坂流の初期のものは、大山寺藏本（卷一より卷四まで）、龍門文庫藏本（覺一本に混合、卷一のみ）、筆者藏本（卷六）、高倉寺舊藏本（天理大学藏本、卷一より卷六まで）、川瀬一馬氏藏本（卷八・卷九、覺一本系統に混合）などの諸本が存在する。そして組織にも詞章にも變化が生じて、八坂流諸本が成立して、甲類、乙類、丙類（傍系）、丁類と流動して行つたものと推測せられるのである。そしてこの八坂流甲類本の中に、百二十句本（京都府総合資料館藏等）、鎌倉本（彰考館文庫藏）、佐々木信綱博士舊藏本（天理大學藏）、平松家眞字本（京都大學藏）、屋代本（高野辰之博士舊藏、國學院大學現藏、卷二は京都総合資料館藏、卷四、卷九欠）がある。これらは極めて近い性格を有するものであるが、筆者の特に注目すべき點としてあげる組織についていへば、卷二、卷三の分割が、次の如くである。

卷二 (覺一本)	(大山寺本)	(中院本)
阿古屋松	同上	同上
三人被流	同上	同上
大納言死去	同上	同上
德大寺嚴島詣	○ (後出)	卷三
山門滅亡	同上	朝覬行幸
善光寺炎上	○ (後出)	山門滅亡
熊野崇敬	同上	善光寺炎上
康賴祝詞	同上	熊野崇敬
龍女出現	同上	康賴祝詞
卒都婆流	同上	龍女出現
蘇武	同上	卒都婆流
卷三	大納言死去	蘇武
朝覬行幸	同上	德大寺嚴島詣
中宮御産	同上	中宮御産

朝覬行幸  
山門滅亡  
中宮御産

この中、百二十句本の分割が、この八坂流甲類本の分割の特質であり、乙類本の中院本に至れば卷三は巻頭が同じく朝覬行幸であつても、その次には他本の卷二の諸記述が含まれてゐて、やや一方流本に近くなつた組織順序になるのである。次に卷十二の巻頭が、一方流覺一本は、大地震事であるが、八坂流甲類本は、大臣父子關東下向事が

巻頭であり、乙類本に下ると、重衡斬られの事となり、一方流の覺一本より後の諸本と同じくなつてゐる。これは恐らく一方流の覺一本より流布本へと下る流動中に、八坂流本の影響によつてこの様な分割が行はれるに至つたものと思はれるし、又その詞章の變化についても、一方流布本が八坂流の詞章の影響をうけたと認むべき現象がいくらかも看取せられるのである。以上の組織からも屋代本の考察にはもつと廣い觀點から考察すべきものがある。にもかかわらず、多くの平家物語研究者はこれを吟味しないのである。又卷々の詞章についていへば、筆者が、甲類とか乙類とかいつた意味を十分に理解されてゐない。それは、現存の平家物語の異本はその一部であつて、多くの傳本は消滅してしまつたと思はれるし、甲類本の中でも、それぞれ特質があり、同性格といつても詞章には差異があつて、系統的に何れを基として何れの本が成立したという結論が成立し難いという點も他の人の理解してゐない所である。近時岩波古典大系の平家物語に、渥美かをる博士の解説ならびに校異があるが、その中にも屋代本を古い詞章として引用して居て、一般の平家物語の讀者にも誤りを傳へる所が甚だ多いので、敢へて比較検討すべく、以下の論考を述べるのである。これによつて屋代本の性格詞章を推斷すべきであらう。屋代本はたまたま殘存した一傳本であつて、これを基にして他の本が成立したといふことは平家物語においては正確ではない。もつと他の多くの傳本との交流において詞章が流傳して行つたのである。屋代本の本文も、八坂流甲類本として共通な特質と、屋代本のみを考察して、如何に他の諸本と關連するかを見究めなければならない。と同時に、一章のみの比

較では不備である。今までの多くの研究者はわづかの章段を對象として考察せられたが、これは一方では原平家といった假想的な世界に問題を持ち込むもので、屋代本の現實の本文の一語一句も見逃さない立場に立つて結論を出し、その上に在つて次の原平家を考究すべきである。盲目の琵琶法師が平家の作者になることはないであらう。平曲は平家の享受の一方法にすぎない。この點も又筆者と他の研究者との見解の一致しない所である。次に各巻について述べて行かう。屋代本の體裁等については前述角川書店刊行の解説にゆづつておく。比較の平家物語としては岩波古典大系の平家物語（覺一本）を用ひて説明することにする。百二十句本は京都府立總合資料館藏本による（佛教大學紀要に翻印中）。

## 二

卷一について云へば、殿上關打の章に、

如何ナル人の漆塗ケムトソハヤサレケル、上古ニハ加様ニ有シカ共、事不出來末代如何ニアランスラン、無覺束トソ人申ケル。

とあり、花山院太政大臣忠雅の事がない。百二十句本、平松家本にはある。鱸の章では、

一天四海ヲ掌ノ内ニ拳リ給フ上ハ子細ニヤ及フ。角テ仁安三年二月廿一日歳五十一ト申スニ病ニ侵サレテ、存命ノタメニ忽ニ出家入道ス。……皆人非人ナルヘシトソ宣ケル。何ナル賢王聖主ノ御政モ……。

とあり、清盛の熊野參詣、鱸の事がなく、又衣紋の書き様云々の事も

再び屋代本平家物語について

ない。鱸の事のないのは、他に鎌倉本、佐々木信綱博士舊藏本、平松家藏本等に共通してゐるので、八坂流甲類本の一特質とも云へよう。二月廿一日は他の記録によりて屋代本が訂正したのであらう。十一日が正しい（玉葉、公卿補任）。吾身榮花の章では、一方流本、百二十句本には、

昔奈良御門の御時、神龜五年朝家に中衛の大將をはじめおかれ、大同四年中衛を近衛と改められてしより以降、兄弟左右に相並ぶ事わづかに三四度なり。

とある。傍線を付した所は、百二十句本にはなく、大山寺本にもない所である。平松家本にはある。然るに屋代本には、

昔奈良ノ御門ノ御時、天平二年庚午ノ歳、朝家ニ大將ヲ被置始、參議民部卿藤原房前ヲ以テ中衛ノ大將トス。稱徳天皇天平神護元年乙巳ノ歳非參議從三位藤原藏下丸ヲ以テ近衛ノ大將トス。中衛近衛ニテ有シヲ、平城天皇大同二年丁亥ノ歳四月廿二日近衛ヲ改テ左近衛トス。中衛ヲ改テ右近衛トス。右大臣藤原ノ内麻呂ヲ以テ左近衛ノ大將トス。元ハ近衛ノ大將也。中納言坂上ノ田村丸ヲ以テ右近衛ノ大將トス。元ハ中衛大將ナリ。サレトモ兄弟左右ニ相並フ事ハ僅ニ三四度也。

とある。鎌倉本も佐々木信綱博士舊藏本も屋代本に同じ。これは恐らく源平盛衰記が基となつて増補せられたものであらうか。盛衰記には、天平十二年正月始めて參議兵部卿藤原豊成卿を以て中衛大將を置かる。寶龜四年、大納言中務卿藤原魚丸始めて近衛大將を兼ね。大同二年四月、近衛府を改め左近府とし、中衛府をもて右近府とせしよ

り以來、兄弟左右に相並ぶ例、僅に四箇度なり。

とある。長門本、延慶本は一方流本に同じ。二代後の章では、一方流本では、

異朝の先蹤をとぶらふに、震旦の則天皇后は唐の太宗の後、高宗皇帝の繼母なり。太宗崩御の後、高宗の后にたち給へる事あり。これは異朝の先規たる上、別段の事なり。

とあるが、屋代本には、

先尋異朝ノ先蹤ヲ、則天皇后ハ唐ノ太宗高宗兩帝ノ后ニ立給ヘル事有り。彼皇后ト申ハ唐ノ太宗ノ后、高宗皇帝ノ繼母也。太宗崩御ノ後、尼ニ成テ、感興寺ト云寺ニ籠給ヘリ。高宗願クハ空室ニ歸テ、政ヲ助給ヘト御使重テ五度來ルトイエトモ、皇后敢テ不隨給。爰ニ

高宗自感興寺ニ臨幸成テ、朕全ク私ノ志ヲ遂ントニハ非ス、先帝太宗ノ代ヲ長カラシメ給ト也。皇后答テ宣ク、我爲訪太宗菩提適既釋門ニ入レリ。二度不可歸塵屋トテ確然トシテ不翻。爰ニ高宗ノ近臣達横様ニ取り奉ルカ如クニシテ、皇后ヲ内裏ヘ奉入。皇后與高宗二人シテ、政ヲ目出クシ給シカハ、其御代ヲハ二化ノ御宇トソ申ケル。角テ御門代ヲ治給事三十三年、國富民豊カ成キ。高宗崩御之後、皇后女帝トシテ代ヲ請取位ニ付給ヘリ。代ヲ改テ年號ヲ神功元年ト號ス。此人ハ周王ノ孫成ル故ニ、大周則天大上皇帝ト稱ス。在位廿年トソ聞ヘシ。其後中宗皇帝ニ讓奉給ケリ。中宗代ヲ改テ年號ヲ神龍元年ト號ス。在位七年是ハ吾朝ノ文武天皇ニ當給ヘリ。是ハ異國ノ先規タル上別段之事也。

とある。この記事も、大山寺本以下、八坂類甲類本すべてに存するも

ので、甲類本の特質としてあぐべき異文である。これも、盛衰記によりて増補せられたものと推定せられる。額打論の章では、二條院崩御に際して、百二十句本、龍門文庫藏本は、澄憲の歌として、

つねにみし君がみゆきをけふとへばかへらぬたびときくぞかなしきの歌があるが、一方流本は、卷六の高倉院崩御に載せてゐる。屋代本は、いづれにも載せない。次に清水炎上の章で一方流本、百二十句本にありて屋代本になき語は、一方流本などに、

御門かくれさせ給ひては、心なき草木までも愁たる色にてこそあるべきに、この騒動のあさましさに、高きも賤しきも、肝魂を失つて四方へ皆退散す。(一方流本)

とあり、落書について、

清水寺焼けたりける朝、や歡音火坑變成池はいかにと札を書きて、大門の前にたてたりければ、次の日、歷劫不思議力及ばずとかへしの札をぞうたりける(一方流本)

とあるが、いづれもなく、東宮立の最後も、百二十句本などに、

玄宗皇帝に楊貴妃が幸ひせし時、楊國忠が榮えしが如し。世のおぼえ、時の聞え、めでたかりき。入道相國、天下の大小事をの給ひ合せられければ、時の人平闕白とぞ申ける。

とある語も屋代本にはない。殿下乗合の章では、屋代本に、

殿下ヲウラミ奉ハヤト宣ケルヲ、小松殿其比大納言ニテ御坐シケルカ聞之テ、入道相國ニ參テ申サレケルハ、重盛カ子ナント、申ンスル者カ殿下ノ御出ニ參合テ、乗物ヨリ下リ候ハサリケルコソ尾籠ノ次第ニ候へ、賴政ナント、申ス源氏共ニ欺レテ候ハンハ、誠ニ一門

之恥辱成ヘシ。是ハ少シモ苦シウ候マシトテ、剩ヘ召具シタリケル侍共皆召寄給テ……（平松家本同じ）

とあるが、これは一方流本、百二十句本と叙述の順序が異なる。これは琵琶法師の記憶や語りでかうした叙述の前後する現象は平家物語には甚だ多い。傍線の處は平松家本には、「其比大納言左大將ニテ御在ケカ此事ヲ聞、父入道相國ニ參テ」とあるのがよい。次に、清盛の命で武士が殿下に恥辱を與へる條に、

恥ス、ケトソ宣ケル。宗トノ者ニハ伊勢守景綱ヲ始トシテ、六十餘人、都合其勢三百餘騎廿一日ニ成シカハ、中御門猪熊堀川ノ邊ニ引ヘテ殿下ノ御出ヲイマヤ……ト奉待。殿下ハ此事夢ニモ不被知召。

とあるが、傍線のある所は一方流本、百二十句本にはなく、平松家本と略同文である。鹿谷の章では、

攝政殿サテ渡サセ給フヘキニアラネハ、同十一月十四日御參内有シカトモ、世ノ中ニ憚リ給テソ見ケル。同三年正月五日、主上御元服有。同十三日朝謁ノ爲ニ法住寺殿行幸成ル。其比妙音院大政大臣内大臣左大將ニテ御坐シケルカ、大將ヲ辭申サセ給ケリ。時ニ徳大寺大納言實定卿、其巡ニ當リ給ヘル由聞ユ。

とあるが、これも一方流本、百二十句本、平松家本に比して脱文があるといふべきである。又次に、成親の上賀茂社への祈願があつて、雷火の事がある。

氏人共集テ是ヲ打消ス、神ハ非例ヲ不請ト申スニ、此大納言非分ノ大將ヲ祈申サレケレハ……。

これも同じく屋代本のみの脱文と認むべきであらう。成親の經歷の

再び屋代本平家物語について

條、百二十句本に、

いかにも平家をほろぼし、ほんまうをとげんとの給ひけるこそおそろしけれ、平治にもあちこの中じやうとて、のぶよりのきやうに、どうしんのあひだ……。

とあるが、屋代本には、

サレハ何ニモシテ滅平家遂本望ハヤトソ宣ケル。父ノ卿モ僅ニ中納言マテコソ至ラレシカ。其末子ニテ位正二位大納言ニ至テ、大國アマタ給テ、子息所從朝恩ニ誇、何ノ不足ニカ、ル心ツカレケム、只天魔ノ所爲トソ見ヘシ。平治ニモ越後ノ中將トテ信賴卿ニ同心之間……（一方流本、平松家本略同じ）

とある如く、百二十本になくして屋代本等にはある所もある。一方流本に、

瓶子のくびをとてぞ入にける。淨憲法師あまりのあさましさに……とあるが、百二十句本には、

へいじのくびをとてぞいりにける。かへすぐもおそろしかりし事どもなり。じやうけんほういんは、あまりのあさましに。

とあり。屋代本には、

瓶子ノ頸ヲ取テソ入ニケル。土ノ穴ヲ掘テ、云事タニモ漏聞ユ也、返々モ淺猿カリシ事共也、靜憲法印アマリノ淺猿サニ。（平松家本同じ）とある。「土ヲ掘テ云事タニモ漏聞ユ也」は、大山寺本にもあつて、

大山寺本は、百二十句本のこの語を合せて有する。この差異は注目すべき所である。次に俊寛沙汰の章では、百二十句本に、新大納言成親が、多田藏人行綱を呼んで白布五十端を送る事を先に述べて、俊寛の

素性を述べるが、大山寺本も又これに同じである。屋代本、平松家本、一方流本は、俊寛の事の次に新大納言成親の事を述べてゐる。次に屋代本、平松家本は、妙音院師長の任太政大臣の事を、後述の如く御興振の章の初に述べてゐる。これは屋代本等が年時によつて改訂したのである。願立の章では、

結願導師ニハ忠胤法師、未忠胤供奉ト申ケルカ、高座ニ登テ、表白金打鳴シ理ヲ非ニ成テ、我等ニ讎ヲ成給フ關白殿ニ鎗矢一ツ放當テ給ヘ……（中略）其ヨリ關白殿山王ノ御トカメトテ、重病ヲ請サセ御坐ス。様々ノ御願ヲ立テヨコタリヲ申サセ給シカトモ、御平噲無しシカハ、御母北ノ政所是ヲ御歎キアテ、祈申サセ給シカハ、暫シハ御平愈ト聞ヘサセ給シカ、遂ニ永長二年六月廿六日御病重ラセ給テ、同廿八日御年三十八ト申ニ、薨御成ニケリ。……山王利物方便ニテ御坐セハ、爭カ御トカメナカルヘキ。

とあつて、右の傍線のある所は平松家本と一致する所がある。それにしても北政所の願立がないのは、屋代本の特質といふべきである。かうした記述の屢々ない事は果して屋代本が古い形態を保持してゐるのか、又は後の脱落かは多くの例證によつて推定すべきである。この場合などはむしろ平松家本をこそ誤脱のないものと認むべき例であらう。次に御興振の章では、先づ最初に、前述の如く、

安元三年三月五日妙音院殿内大臣ニテ坐シケルカ、大政大臣ニアカラセ給フ。小松殿左大將ニテ御坐シケルカ、大納言定房卿ヲ越テ、内大臣ニ成給フ。妙音院殿ヲシアケラレ給ヘリ。一ノカミコソ選度ナレトモ父宇治ノ惡左府ノ御靈其憚有リ。同四月十三日卯尅ニ山門

ノ大衆、日吉ノ御祭り打止テ大宮ノ樓門ノ前ニ三塔會合シテソ僉議シケル。國司師高被處流罪、目代師經可被禁獄之由、奏聞ノタメニ八王寺客人十禪師三社ノ神興ヲ捧奉テ、既ニ下洛スト申程コソ有ケレサガリ松、柳原、キレ、ツ、ミ、鴨河原……（平松家本同文）とあつて、最初の傍線を付した所は、一方流本、百二十句本は、俊寛沙汰の章にある語である。次の傍線を付した所は、百二十句本、一方流本にはなく、大山寺本にある語である。この異文も屋代本の本文の性格を知る一つの手がかりであらう。次に注目すべきは、一方流本、百二十句本等には卷四、鸛にある記事、二條院の時の鸛の事が、屋代本には御興振の章にある事である。

此賴政ハ六孫王ヨリ源氏嫡々ノ正統也。弓箭ヲ取テ未聞其不覺ヲ。剩エ歌道ノ達者ニテアンナルソ。二條院ノ御時鴉ト云鳥宮中ニ鳴テ、屢ハ奉惱震標、公卿僉議有テ賴政ヲ召シテ射サセラル。賴政是ヲ射ントスルニ、比ハ五月廿日餘ノ暗ナリケレハ、……大炊御門ノ右大臣公能公給ハリ、ツイテ賴政ニタフトテ、昔ノ養由ハ雲外ノ雁ヲ射キ、今ノ賴政ハ雨ノ中ニ鴉ヲ得タリト仰ラレテ、五月ヤミ名ヲアラハセル今宵カナ、ト仰カケラレタリケレハ、タソカレトキモ過ヌトヲモヘハト仕テ御衣ヲ給テソ出ニケル。又近衛院御在位ノ時当座ノ御會ノ有ケルニ、深山ノ花ト云題ヲ被出タリケルニ。

とある。従つて卷四の鸛の章には、一方流本、百二十句本の如き、二回の鸛退治はなくして、屋代本は一回となる筈である。屋代本は卷四が損欠してゐるが、幸に大山寺本があつて、大山寺本にはこの二條院の時の鸛の記述がない。屋代本はこの大山寺本の性質をうけついても

のと認むべきであらうか。長門本平家物語にも卷二の御興振の條にこの二條院（鳥羽院の時とする）の鶯の事を述べてゐるのと、何らかの關連がありさうである。

次に卷二に入らう。座主流の章では、明雲座主經歷の條に、

我名ノ有所マテハ見テ自其奥ヲハ不見如本卷返テヲカル、習也。サ

レハ仁安元年二月廿日明雲僧正天台座主ニ成セ給テ、件ノ箱ヲ開テ此文ヲ見給ニ、明雲ト云名アリ。サレハ凡夫ノ師態ニアラス、是程

目出キ人ナレ共、前世ノ宿習ニテカカル憂目ヲ見給覽。同廿二日前座主己ニ被流給ヘシト聞ヘケレハ、人々様々ニ傾キ申サレケレ共不叶。（平松家本同文）

とあり、傍線のある所は他本と異なる所で、屋代本、平松家本の特異な語である。一行阿闍梨の章では（岩波古典大系本の分割は適當でない）、阿闍梨祐慶について、

黒革緘鎧着テ白柄大長刀脇挟ミ大衆ノ中ヲ押分々々前座主ノ御前ヘツト参リ……………。

平松家本には、「黒革緘鎧大荒目金交草摺長着成、白柄大長刀脇挟、被開候、大衆中押分々々先座主御前参……………」とあり、屋代本は、百二十句本にある

よろひの大あらめなるを、くさずりながにきなし、かぶとをばぬぎて、

はなく、一方流本では、更に「甲をばぬぎ法師原にもたせつゝ」の語がある。又續いて、屋代本には、

大講堂ノ庭ニ興昇居テ、戒淨坊ノ阿闍梨祐慶、亦如先進出テ申ケ

再び屋代本平家物語について

ルハ、夫當山ハ……………。

とあるが、百二十句本には、

大かうだうのにはにこしかきすゑて、大しゆせんぎしけるは、そも

くちよくかんをかうぶりて、るざいせられ給ふ人をとりかへしたてまつり、わが山のくはんじゆにもちひ申さん事、いかゞあるべし

といひければ、かいじやうばうのあじやり、さきのごとくにすゝみいでゝ、それたうざんは……………（平松家本略同文）。

とあつて、一方流本と殆ど同文である。これは屋代本の誤脱ではなからうか。

小教訓の章では、成親がいましめられる條に、

アノ男取テ庭ヘ引落セ々々ト宣ケレトモ、暫ハ畏テ候ケルカ、此事惡カリナムトヤ大納言ヲ庭ヘ引落シ奉ル。其男取テ伏テヲメカセヨ々々トソ宣ヒケル。二人ノ者共左右ニ立副奉リ、耳ニ口ヲ當テ……………。

とある。この文も一方流本、百二十句本、平松家本等にある語がなく、誤脱とすべきであらうか。然し同じ所に、

六月ニ裝束ヲタニモクツロケス、一間ナル所ニ被押籠テ、汗水ニ成ツ、温サモ難堪ケレハ胸モセキアクル心チシテ、汗水涙モアラソヒテソ流レケル。小松殿ハ善惡ニ騷給ハヌ人ニテ、遙ニアテ、車ニ乗り、嫡子權亮少將ノ尻ニ乗奉リ衛府四五人、隨身二三人召具テ、兵一人モ具セラレス、誠ニ大様ケニテソ御坐タル。（平松家本、汗水ニ成管御在、左有程小松殿……………）

とある。傍線を付した所は、屋代本のみの特異な語であり、傍線を付した所は、百二十句本、平松家本と一致する所で、一方流本とは異なる

所である。烽火之沙汰の章に、

其徳ノ深キ色ヲ案スレハ、一入再入ノ紅ニモ過タル覽。悲哉君ノ御爲ニ奉公ノ忠ヲ至サントスレハ……………。

とあるが、百二十句本、平松家本は一方流本に同じく、屋代本の誤脱と認むべきであらうか。續いて、

御身ニ取テハ悉ク究メサセ給ヌレハ、御運盡サセ給ハン事、今ハ非可難。申請所詮ハ只重盛カ類ヲ可被召候。イツマテカ命生テ加様ニ亂ン世ヲハ可見候。

とある條も、一方流本、百二十句本、平松家本などにある語、

富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ずいたむとみて候。心ぼそうこそ覺え候へ。

がない。傍線を付した所は屋代本のための語である。大納言流罪の章は、百二十句本と殆ど同文であるが、大山寺本のみは、覺一本にある成親の嘉應元年流罪を述べない。(その點大山寺本は流布本と同一である) 卷末の記事は、俊寛康頼、成經等三人の鬼界島流罪の次に、康頼出家の事がある。百二十句本も同様である。この康頼出家の事は、一方流本では、後の康頼祝詞の章の始に來る文である。次に熊野崇敬、龍女出現、康頼祝詞、卒都婆流、蘇武の記事があつて、大納言成親の死去を述べる順序である。これは最初に述べた如く八坂流甲類類本の特色であつて、屋代本がもし古い形態ならば、どうして覺一本がこれを改めたかを説明しなければならぬ。又乙類本、中院本などが一方流本の順になつてゐるのも注目すべきである。更にその詞章を見るに、蘇武の條に、

昔漢王胡國ヲ被攻ケルニ、漢王ノ軍弱ク狄ノ兵強クシテ、御方戰負テ引退ク。先李陵ト云將軍ヲ始トシテ、三十萬騎向フタリケルカ追返サル。次ニ蘇武ト云將軍ヲ始テ五十萬騎被遣。猶戰負テ可然者共千人被囚ケリ。其中ニ蘇武ヲ始テムネトノ者共六十餘人ヲスクリ出シ、片足ヲ切テソ追放ケル。

とあるが、他の諸本と異なる文である。屋代本のための特質といへよう。成親大納言死去の章の最後は、

父ノ後生ヲ訪給ソ哀ナル。時移リ事去テ代ノ替行有様只天人ノ五衰トソ見シ。同十二月廿四日慧星東方ニ出、嗤尤旗トモ申ス。又慧星共申ス。天下大ニ亂テ國ニ大兵亂起ルトモイヘリ。サル程ニ歳暮テ治承モ二年ニ成リケリ。

とあつて、卷二を終つてゐる。他の百二十句本は、

ちゝのごせをとぶらひ給ふぞあはれなる。ときうつりことさりとて、よのかはりゆくありさま、たゞ天人の五すみとぞ見えし。おなしく十二月廿四日、けいせいとうはうにいづ。しゅうきとも申、又けいせいとも申。天が、みだれて、大ひやうらん國におこらんといいり。さるほどにとしくれて、ちしうも二年になりにけり。

そのころとく大じの大なごんさねさだのきやう、平家のじなんむねもりに大しやうをこえて……………(平松家本略同文)。

とあつて、更に最後に徳大寺の嚴島詣がある。屋代本にこれのないのはかつて述べた如く、これを別にしたものと認むべきで、大山寺本もこれを缺き、八坂流平曲との關係がありさうである。又右の慧星の語は、一方流本では、卷三の卷頭に、



同正月七日、彗星東方にいつ、嗤尤旗とも申。又赤氣とも申。十八日光をます。

とある。百二十句本にはこれもあるが、大山寺本、屋代本にはこれはない。これらによつて卷二に於いても、屋代本と百二十句本、平松家本は極めて密接な共通性格を有することが認められよう。

卷三の巻頭には、前述の如く、八坂流甲類諸本は、一方流本の卷二にある、山門滅亡がある。善光寺炎上はない。山門滅亡の章の本文は諸本に異同が殆どない。次に敎文の章では、百二十句本に、

せんみやうをよみけるに、ばうこんいかにうれしとおぼしけん。おんりやうはむかしもかくおそろしき事なり。さればさはらのはいたしをばしゆだうてんわうとがうし、いがみのないしんわうをば、くわうぐうのしよくみにふくす。これみなおんりやうをなだめられしはかりごとぞきこえし。れいぜんみんの御ものぐるはしくましゝゝ、くはざんのほうわうの十ぜんばんじうのていみをすべらせ給ひしは、もとかたのみんなぎやうのれいなり。三でうのみの御めも御らんぜられざりしは、くはんざんぐぶがれいとかや（平松家本略同文）。

とあるのは、殆ど一方流覺一本と同文であるが、屋代本は、讀宣命、亡魂如何思食ケム無覺東。抑冷泉院ノ御物狂ハシク坐々、花山法王ノ御世ヲイトハセ給シハ、元方民部卿ノ靈トカヤ。三條院ノ御目モ御覽セサリシハ、寛算供奉力靈ナリ。昔モ今モ怨靈ハ怖ロシキ事ナレハ、相良太子ヲハ崇道天皇ト號シ、伊上内親王ヲハ皇后職位ニ補ス。是皆被有怨靈謀トソ承ル。

再び屋代本平家物語について

とある。この様に語句の前後する例は、他の古典作品では殆どなく、平家物語が平曲として傳誦せられたために生じたものであらう。ここは屋代本の特異な詞章である。大山寺本も一方流本と異なる所がある。足摺の章では、最後のあたり、屋代本は、

日暮レトモ、アヤシノ伏トヘモ不返、浪ニ足打洗ハセテ、其夜ハソコニソ明サレケル。イツマテノ露ノ命ヲ惜ミツ、其瀬ニ身ヲモ投サリシ心ノ程コソウタテケレ。

少將ハ鬼海嶋ヲ出テ、凌波風、姑平宰相ノ所領肥前國杵ノ庄ニソ着ニケル。湯アミナントシテ身ヲイタハリ杵ニテ身ヲハクラサレケリ。

この文も屋代本のみの特質ともいふべく、他の諸本は殆ど一方流本と差がない。屋代本のみは簡略である。大山寺本に、

二人の人々は鳥をいで、浪を分風をしのひで行ほどにの語があるので、「凌波風」とは、これと關係があらうか。御産の章では、

御産所ハ六波羅ニテ有ケレハ、法王モ御幸ナル、八幡、平野、小原野ナントニ行啓成ヘキ由御願アリ。

とあつて、一方流本、百二十句本、平松家本等に比して簡略である。邦綱卿の御馬を獻る條の前後も、一方流本、百二十句本に比して記事の順序に差がある。公卿揃の章では、掃部頭時晴の事の次に飢の事がある。これは大山寺本と同一で、一方流本、百二十句本、平松家本とは反對である。大塔建立の章では、屋代本、

修理終テ、清盛、彼社ヘ被參タリケルニ、大明神御託宣アテ、汝チ

知レリヤ忘リヤ、弘法ヲ以テ云セシ事ハ、但シ惡行アラハ子孫マテハ叶マシキソヨトテ、明神アカラセ給ケリ(平松家本文)。

とあるが、これには、蛭卷した小長刀の事がない。屋代本、平松家本の特異な所である。頼豪の章では、百二十句本に、

しゆじやうなのめならず御かんありて、なんぢしよまうの事はいか  
にとおほせられば、

とあるが、一方流本では、

君なのめならず御感あて、三井寺の頼豪阿闍梨をめして、汝が所望の事はいかにと仰下されければ(平松家本文)。

とある。然るに屋代本には、

主上御感有テ、頼豪阿闍梨ヲ召レケリ。汝カ高名誠ニ目出思食スナ  
リ。勸賞ハイカニモ所望ニ隨ベシト仰ケレバ、

とある。これも屋代本の特異な詞章の一端である。有王の章では、一方流本と百二十句本との間にも若干差異があるが、屋代本はこれらに對して甚しい差異のある章である。先づ一方流本に對して百二十句本はやゝあつてそうづすこし人ごゝろいできて、たすけおこされ、の給ひけるは、さればとよ、こぞせうしやう、やすよりにう道がむかひのときも、そのせに身をもなぐべかりしを、よしなきせうしやうのいかにもしてみやこのおとづれをまてかしなどなぐさめをきしを。

とある。傍點のある所は一方流本にない語で、全文は大山寺本に一致し、一方流本は右の文中に、俊寛と有王の長文の問答の語がある。屋代本は、

良有テ少シ心付テ、扶起サレ給テ、サテモ汝カ是マテ尋下ケル志コ

ソ難有ケレ。只明テモ暮テモ都ノ事ノミ思居タレハ、戀敷者共ノ面影ハ夢ニ見折モ有、幻ニ立時アリ、身モ痛ク疲レ弱リシ後ハ、ハヤ夢モ現モ思分ス、サレハヨノレカ來ルモ只夢トノミコソ覺レ。若此事ノ夢ナラハ覺テノ後ハ如何ニセン。有王現ニテ候ナリ、此御有様ニテ御命ノ今マテ長ヘサセ給テ候コソ、不思議ニ覺候ヘト申セハ、サレハコソ、カ、ル所ニモ栖ハスマル、習有ケルソ。去年少將ヤ判官入道ニ捨ラレテ後ノ便ナサ、只推量ヘシ。其瀬ニモ臚身ヲモナケムトセシヲ、無由少將ノ都ノ音信ヲ今一度待テカシナムト慰シヲ……(平松家本略同文)。

とあるのは、殆ど一方流本と同文である。但し傍線のある所は平松家本、一方流本にはない。又百二十句本に、

そうづのひめ御ぜんの御もとへ、すぐにまいり、ありしやうをはじめよりこまぐとかりたり、たてまつる。なか／＼に御ふみを御らんじてこそ、御おもひはいとゞまさらせ給ひ候しか。すぐりかみもなければ、御返じにもおよばず(平松家本、これに近し)。

とあるが、屋代本は、

俊寛ノ姫御前ノ御坐ケル奈良ヘスクニソ上リケル。有様ヲ始ヨリ次第第二語奉ル。今ハ生々世々ヲ隔ツトモ爭カ御姿ヲ見進給ヘキ。又曠劫多生ヲ送トモ、御聲ヲ聞進給ハン事難有。硯モ紙モ候ハネハ、不及御返事ニモ。

とあり、百二十句本の傍點のある所は、大山寺本の「ひめ御せんの御もとにまいりて」と關係があるらしく、百二十句本の「すぐに」は、屋代本の「スクニ」と關係がありさうである。生々世々以下の語は一

方流本等にもあるが順序が後出である。醫師問答の章の次に屋代本には、無文、燈爐之沙汰の事がなく、

此大臣ハ文章端クシテ、心ニ忠ヲ存シ才藝正クシテ、詞ニ德ヲ兼タリ。サレハ世ニハ良臣ヲ失エル事ヲ歎キ、家ニハ武略ノスタレン事ヲ悲ム。入道セメテノ思ノ餘リニヤ、福原ニ馳下テ閉門シテコソ御坐ケレ。天性此大臣ハ未來ノ事ヲモ兼テ知給タリケルニヤ、我朝ニハ如何ナル善根シタリト云共、子孫ニ相續テ訪ハレム事難有……  
(平松家本略同文)。

とある。然し他の一方流本や大山寺本、百二十句本には、無紋の太刀の事がある。但し燈爐之沙汰はない。百二十句本を示せば、

ゆめさめぬ。おとゞ、たうけは保元平治よりこのかた、どゞてうてきをたいらげ、けんじやう身にあまり、大じやう大じんにいたり、一ぞくのせうしん六十よ人、廿よねんのこのかたは、たのしみさかへてかたをならぶるものなかりつるに、にう道のあくぎやうによて、

一もんのうんめいすゑになりぬる事よとあんじつゞけて、御なみだにむせばせ給ふ。おりふし、つまどをほとくとうちたゞく。おとゞ、あれきけとの給へば、せのを太郎かねやすがまいりて候。こんやふしぎの事を見候て申あげんがために夜のおくるがをそふおぼえ候てまいりて候。

とある。この傍線を付した所は覺一本と異なる所で、大山寺本と略一致する所である。この點大山寺本と百二十句本とは密接な關係があると認められる。金渡の章と法印問答の章との中間に、小督の章がある。これは他の諸本はすべて卷六にある。この點屋代本は注目すべきであ

るが、百二十句本の卷三の目錄に、二十八句、こがうとあるによつて、八坂流の中には小督を卷三にした組織があつたと認められる。但し百二十句本の本文はこれを卷六に収めてゐる。

平松家本は卷三の最後に小督の章を載せてゐる。これが屋代本よりも一步古い形態で、やはり卷六にあるのが古態と認むべきであらう。小督については卷六で述べることとする。法印問答の章は、百二十句本は一方流本と大いに異り、屋代本は却つて一方流本に近いといふべきで、八坂流甲類本の本文の特種な現象とも認むべきである。この様な本文現象の屢々あるのは、平曲の傳誦が一方流と八坂流とが混合して行はれつつあつたためといふべきであらうか。(拙稿、佛大、人文學論叢刊號參照) 百二十句本を示せば、次の如くである。

ひのもんをみづからかひて、べうにたてゝこそかなしみ給ひけれ。かるがゆへにちゝよりもむつまじく、こよりもしたしきはくんしんのみちなりとこそ申事にて候に、しげもりがちういんのうちに、八はたへの御かうあつて御ゆうある。人めこそはちいり候しか。これ一ツ。たいふはずいぶん君のためにちうこうたにことなるものなり。さればほうげんへいちのかつせんにも、いのちをきみのためにからんじて、かばねをせんちやうにすてんとふるまひ候し事、ひさしからざる事なれば、きみいかでおぼしめしわするべき。これ二ツ。そのゝち大小どゞの御大事にみんぜんといひ、ちよくめいと申、ぐんちうをぬきんづる事どゞにをよべり。しかればゑちぜんの國をしげもりにたまはりしとき、しゝそんゝまでくだされ候ひしが、しげもりが中いんのあひだにめしはなさるゝでう、ざいくはな

に事ぞや、これ三ツ。つぎに中なごんかけ候とき、二の中將どののぞみ申され候しかば、にう道ずいぶんしつし申候ひしを、くはんばく殿の御しそく、三の中しやうどの、ひぶんなし給ひし事、にう道たとひ一どはひきよを申おこなふとも、いかでかきこしめしうれざるべき。いはんやかちやくといひ、めかいといひ、かたぐりうんさうにをよばぬ事なりしを、ひきちがひたてまつらるゝ事、入道めんぼくをうしなふて候ひしか。これ四ツ。つぎにきのふけふみなもつて此一もんほろぼすべきよしけつこうあり。これ又わたくしのけいりやくにあらず候よし、つたへうけ給はるあひだ、せん／＼のちうきん、いまにをいてはいたづら事になりぬ。きやうこうさらにいぜんのぐんちうほどのぐちうあるべきともぞんぜざるあひだ、くげほうこうのたのしみなし。これ五ツ。どゞのちうきんをわすれずんば、いかでかにう道をば七だいまですてらるべき。それににう道すでに七じゆんにをよび、よめいいくばくならず、一ごのあいだにもやゝもすればほろぼすべき御はかりごとあり。申さんやしそんあひつみで一日へんじもてうかにめしつはれん事かたし。これ六ツ。をよそおひてこをうしなふはこぼくのえだなきがごとしどうけ給候。だいふにをくれ、うんめいのすゑにのぞめる事おもひしり候ぬ。てんきのおもむきあらはれたり。たとひいかなるほうこういたすといふ共、ゑいりよにおうずる事あるべからず、これ七ツ。此うへはふちやうの世中に七十にをよんでなほどのたのしみさかへをとして、心くるしくむやくのほうこうをいたしてもせんあるべからず、とてもかくても候なんとぞんち候。おやのこをおもふならひ、

ふかうのこなをわかれのなみだいましめがたしどうけ給候。いはんやしげもりにをひては、ほうこうといひ、しかうといひ、れいはうと申、ゆうかんと申、こながらならびなきしんなり。一どわかれてのち、さいくはいごしがたし。らふふがなげきをば、いかゞとか一どの御あはれみをかけざらん。これ八ツ。とばのみの御とき、あきよりみんぶきやう、させるしんではなかりしかども、しうかのゝち、御りうぐはんの八はた御さんけいゑんいんす。なざけある御事は、かやうにこそ候へ。一どの御はうけんにもあづからず。たとひにう道がちうをおぼしめしわするゝといふとも、いかでかだいふがらうこうをすてらるべき。又しげもりがほうこうをすてらるといふとも、じやうかいがすどのくんこうをおぼしめししらざらん。これ九ツ。此ほかうらみなげきもうきよにいとまあらず。はゞかるところもなくどきたてゝ、かつうはふくりうし、かつうはらくるいし給へば、ほういんは、此でうゝあんのうちの事なり。ことゞくゝみんの御ひが事、ぜんもんがだうりときゝなして、あはれにも又おそろしふもおぼえて、あせ水にぞなられるける。

これは他に見ない異文である。清盛の不滿を九箇條にまとめた點は、史記に、項羽の罪狀を高祖があげ、太平記卷十四、義貞が尊氏の罪狀を數へた所などと關係があらうか。さて屋代本は、

碑ノ文ヲ自ラ書テ、魏徴カ廟ニ立テタニモコソ太宗ハ悲ミ給ケレ。間近クハ吾朝ニモ見候シ事ソカシ。顯頼民部卿逝去シタリシヨハ、故院殊ニ御數アテ、八幡ノ行幸延引シ御遊ナカリキ。惣テ臣下ノ卒スルヲハ代々ノ君皆御數アル事ニテコソ候へ。サレハ親ヨリモナツ

カシク、子ヨリモシタシキハ君ト臣トノ中也トハ、申事ニテ候ラ  
メ。夫ニ内府中陰ニハ幡ノ御幸アテ、御遊アリキ。御歎ノ色一事モ  
是ヲ不奉見。縦ヒ入道カ歎ヲコソ御哀ミナク共、争カ内府カ忠ヲハ  
思食忘ベキ。亦内府カ忠ヲコソ覺召忘ル共、入道ガ悲ヲ御アハレミ  
ナカルヘキ。父子共ニ歎慮ニソムキヌル事、於今ハ失面目候。次  
越前國ヲハ子々孫々マテモ御變改アルマシキ御約束アテ、故内府カ  
給テ候シカ、……老テ子ヲ失ナウハ、枯木ノ枝ナキニ異ナラス、  
内府ニ送候ヌルヲモテ、當家ノ運命末ニ成事ヲハ、兼テ早思知テコ  
ソ候ヘ。此世ハ不幾、サノミ心ヲツイヤシテモ何ニカハセンナレ  
ハ、今ハ只イカニモ有ナント思テコソ候ヘトテ、且ハ腹立シ且ハ落  
涙シ給ヘハ、法印佈シウモ亦哀ニモ覺テ、汗水ニソ成ラレケル。  
とある。平松家本もこれに近い。殆ど一方流本と差がない。傍線を付  
した所が一方流本と異なる所である。行隆之沙汰の章では、江大夫判官  
遠成の事がない。大山寺本、百二十句本、平松家本は一方流本に同じ  
である。

其後能々定ラレテ信濃國ヘソ被流給ケル。此大納言ハ今様朗詠ノ上  
手、當時ノ重臣ニテ、法王諸事無内外仰合ラレケレハ、大政入道殊ニ  
窶ヲ結ハレケルトカヤ。參議皇太后宮權大夫兼右兵衛督藤原光能  
卿、大藏卿右京大夫兼伊與守高階泰經朝臣、藏人左少辨兼中宮權大進  
藤原元親、此人々ハ三官共ニ止ラル。抑大政入道如何ナル心ニテ加  
様ノ惡行ヲハシ給フソト云ニ、人申ケルハ、當時關白ニ成給ヘルニ  
位中將殿、前殿ノ御子三位中將殿ト中納言御相論ノ故ト申ス。  
とあつて、傍線を付した所は他本と異なる所である。又光能、泰經、元

親の三官停止は、他の諸本は少しく前に述べる所で、屋代本のみ順序  
が異なるものである。法皇被流の章では、屋代本に、

堅牢地神ノ驚騒キ給ケンモ理哉トソ人申ケル。法王ハ長日ノ御行法  
不退ノ御勤御心ナラス退轉セサセ坐スソ淺猿キ。大膳大夫信業カ何  
トシテカ紛參タリケル、鳥羽殿ニ候ケルヲ、法王御前ニ召テ、今夜  
已ニ我ハ失ハレナンスト思シ召スソ。如何ニモシテ御行水ヲ召ハヤ  
ト仰ケレハ、信業サラヌタニ朝ヨリ肝神モ身ニソハス歎沈テ候カ、  
仰承カ忝ナサニ、狩衣ノ玉タスキアケ、水酌入レテ如形御湯シ出シ  
テ進セタレハ、御行水召レテ後、御經取出サセ給テアソハサレケル  
モ、只最後ノ後勤トノミソ思食ケル。靜憲法印ハ……。

とある。傍線を付した所は他の十二卷本には見えない語である。唯長  
門本卷七に「たゞ夢の御心地して長日の御修法毎日の御勤め、御心な  
らずたいてんせさせおはしませず（二三三頁下）」とあり、「御行  
水召されて御經とり出させ給ひて、御おこなひぞありける。さいこの  
御つとめと思召されけるこそかなしけれ（二三四頁上）」とあるのがこ  
の屋代本の語の基となつたのではあるまいか。百二十句本では、

けんらう地じんもおどろきさはぎ給ひけんもことほりかなとぞ人申  
ける。さてとぼどのへいらせ給ひたりければ、大ぜんの大夫のぶな  
りが、なにとしてまぎれまいりたりけん、おりふし御ぜんちかふ候  
ひけるをめして、やゝのぶなり、いかさまにもこんやうしなはれな  
んず。御ぎやうずいをめさばやとおほせられければ、さらぬだにの  
ぶなりけさよりきもたましゐも身にそはず、あきれたるさまにてあ  
りけるが、此おほせをうけ給りかたじけなさに、かりぎぬにたまだ

すきあげ、こしばがきこぼし、大とこのつかはしらわりなんどして、かたのごとくの御ゆわかしまいらせけり。こせうな言にうだうのしそく、じやうけんほういん、にうだうしやうこくのにし八でうへゆき……。

とある。傍點のある所は、一方流覺一本と異りて、大山寺本と一致する所である。この詞章は一方流覺一本と、大山寺本、百二十句本との間の相違は極めて少く、殆ど同一であるに、この僅かな差異は、大山寺本、百二十句本の成立を推定する有力なる性格であるといへよう。平松家本は覺一本に近い文である。

屋代本は卷四を缺いてゐる。これを補ふものとしては、平松家眞字本、百二十句本などがある。前述した如く、屋代本の卷一に、二條院の御時の鵠の記事が頼政の高名の事としてあげてあつて、卷四の同記事はないと認められ、大山寺本にもこれがないので、屋代本は大山寺本に類する一性格を有するといへよう。大山寺本に就いては、國語國文（昭和三年六月號）に詳細を述べたが、今ここに若干述べれば、大體は一方流覺一本に近い詞章を有するが、嚴島御幸の章では、辨内侍、備中内侍の事なく、還御の章では、公顯僧正の事、還御途中の記事なく、源氏揃の章では、熊野湛増の事なく、鵠の章で、二條院の御時の事がなく、一方流流布本と共通する性格を有してゐて注目すべきである。平松家本卷四を見ると、嚴島御幸の章では、備中内侍事がなくて流布本に同じく、新院の鳥羽殿御幸には、供奉の人々の名があげられて、大山寺本に同じく、百二十句本は少しく後に載せてゐる。兩院の御對面の記事はなく、

儀式今日只夢耳思食。供奉人々、前右大將宗盛、大納言實房、大藤納言實邦、五條大納言邦綱、土御門宰相中將通親、殿上人高倉中將康通、左少將高元、宮内少將宗範聞。誠宗廟八幡賀茂何土閑安藝國及御幸神明何度御納受無。御願成就無疑見。

又還御の章でも、

九重多神達閣、八重鹽路御幸、何土納受無高申、君臣感涙流御在。神主佐伯景公、座主尊永法眼爲。神慮動、大政入道心搖覽見。同四月五日上皇還御次、入道福原別業入給。入道孫越前少將資盛從四位上聞。同入道養子丹波守清邦正五位下叙。同八日都入給。

とあつて、途中の記事はない。源氏揃の章にも、湛増の事なく、大山寺本に同じく、

木曾冠者甥取山陽道社趣。法皇成親俊寛様遠國遙鳴流遣思食、城南離宮移今年二年成給。

とある。信連の章では、

或宣旨御使何度申内々承置候程、宣旨何斬候。天性日本國既敵受給宮侍。廳下部刃傷殺害殊愚候哉。鎮吉太刀持候士敷者、官人共安穩一人飯候。宮御在所焉不知。縱奉知候。侍品者申思切候事、糺問依只今可申様候。信連宮御故首刎事今生面目冥途思出候。其後物不申。平家侍共老少並居、哀甲者手本哉、新男斬無懣惜逢。

とあるが、傍線のある所は大山寺本に類する所で、一方流本とは異り、百二十句本は又これに一致する。百二十句本を示せば、あるいはせんじの御つかひなんど、申候と、ない／＼うけ給りをよび候ほどに、せんじとはなにぞとてきつて候。てんせい日ほんこく

をてきにひきうけさせ給はんずる官の御さぶらひとして、ちやうのしもべにんじやろせつがいほこともおろかに候や。かねよきたちをだにももちて候しかば、くはんにんどもをあんおんにはよも一人もかへし候はじ。みやの御ざいしよいづくともしりたてまつらず。たとひしりたてまつり候共、さぶらひほどのものが申さじとおもひきりぬる事をば、きうもんによつて申べきやうや候らん、のぶつらみやの御ゆへにかうべをはねられん事は、こんじやうのめんぼく、めいどのおもひでに候と申て、その、ちはものもいはず。平家のらうせうなみみたりけるが、あはれかうのものゝてほんなり。あたらのこのきられんずらんむざんやとておしみあへり。

とある。頼政最後の條に、

#### 埋木花拆事無實成終哀也梟

是最後辭太刀鋒腹突立、俯貫失給。其時歌讀無、若強數奇給道、最後及忘不給。嫡子伊豆守仲綱散々戰自害。頸郎等下河邊藤三郎清親御堂御床下投入。三位入道首唱取敵中紛通、石括合宇治川深處沈。六條藏人仲家申、帶刀先生義方嫡子也。是木曾冠者義仲兄有。然三位入道養子、最惜爲給。頃日變一所死哀。競瀧口平家侍共何爲生虜、右大將見參入。競素思儲、散々戰痛手負後、腹攪剪失。

とあるが、大山寺本にも類し、百二十句本もこれに類する。傍線のある所は一方流本とは記述の順序が異りて、一方流本は「埋木の花さく事は」の歌の前にある。百二十句本を示せば、

むれ木の花さく事もなかりしにみのなるはてぞかなしかりける  
とこれをさいごのことばにて、たちのきつさをはらにつきたてた

ふれかゝり、つらぬかれてぞうせ給ふ。このときうたよむべふはなかつしかども、わかきよりあながちにもてあつかひたるみちなれば、さいごまでもわすれ給はざりけりとあはれなり。くびをばとなふなくく、かきおとし、ひたゝれのそでにつゝみ、てきちんをのがれつゝ人にも見せじとおもひければ、いしにくゝりあはせて、うちがはのふかきところにしづめてけり。いづのかみなかつなは、さんぐにたゝかひいたでをふて、いまはかうとやおもはれけん、じがいしてこそふしにけれ。そのくびをばしもかはべのとう三郎きよちかゝとつて、ほんだうの大ゆかのしたになげいれけり。三なん六でうのくらんど中いゑ、そのこくらんど太郎中みつも、一しよにてはらかききつてぞふしにける。此六でうくらんど、申は、六でうのはんぐはんためよしがじなん、たちはきせんじやうよししかたがこなり。ちゝよししかたは、きうじゆ二年むさしの國大くらにてかまくらのあく源太よしひらがためにうたれぬ。その、ちみなしごにてありしを、源三ぬにう道こにして、くらんどになしたりしほどに、日ごろのちぎりをへんぜず、いまはかやうにうちじにしけるとぞ。ゆみやとりのならひとはいひながら、あはれなりし事共なり。きおうたきぐちをば、平家のつはもの共いかにもしていけどりにせんとて、めんめんを心かけたりけれども、きおうも心ゑて、さんぐにたゝかひじがいしてこそうせにけれ。

とある。百二十句本の方が詳細である。又鴉の章では、平松家本に、東三條杜方黒雲一聚立來御殿上覆必唱悸給。高僧貴僧仰、大法祕法行、無其驗。源平中可然召射手被射由義定有。堀川院御宇寛治比、

主上唱給、其時將軍前陸奥守護家朝臣、香狩衣塗籠藤之弓、山鶏尾羽鏑矢取副、南殿大床參候。

とあるが、これも大山寺本に類し、又百二十句本にも類する。百二十句本を示せば、

三でうのもりよりくろくも一むらたちきたり、御てんにおほへば、そのときかならずおびえさせ給ふと申。こはいかにすべきとて、くぎやうせんぎあり。しよせん源平のつはものゝうちにしかるべきものをめして、けいごさせらるべしとさだめらる。くはんちのころ、ほりかはの天わうかくのごとくおびえさせ給ふ事ありけるに、そのときのしやうぐん、さきのむつのかみみなもとのよいいへをめさる。かういろのかりぎぬにぬりごめどうのゆみもちて、山鳥のおにてはぎたるとがりや二すぢとりそへて、なんでんの大ゆかにしこうす。

とある。傍線のある所は、一方流本にはない語である。以上の如く、平松家本は、一方流本と差がありて、その中には他の八坂流甲類本と相類する性格を有することが明らかである。この平松家本が屋代本に近いと思はれるが、百二十句本は、全般的に一方流本に有する記事をすべて有する點などよりして、八坂流甲類本中ではやや古い形態を保存してゐると認むべきであらうか。勿論、大山寺本、平松家本、百二十句本等も相互に差異がある。一章のみの比較では、例へば橋合戦の章の如く、平松家本が一方流と近い章もある。

巻五について述べるならば、まづ巻頭に、

法承四年六月三日太政入道此日比執シ思テ被通ツル福原へ都遷有へ

シトテヒシメキアヘリ。遷都有ヘシトハ内々サタ有シカトモ、今明ノ程トハ思ハサリツル物ヲ、コハ如何セントテ上下歎アヘリ……二日ノ卯剋ニ主上出御成ル、一院新院中宮攝政以下ノ大臣公卿殿上人我モ々々ト被參ケリ。主上幼主ノ御時ハ母后コソ一御輿ニハメサルハ、ニ今度ハ其儀ナシ。

とある。右の傍線を付した所は屋代本の、百二十句本、平松家本及び覺一本と異なる所である。が傍点を付した所は百二十句本と略一致する所である。

次に、都遷の章に於いて、

高倉ノ宮ノ御頸ヲ切り殘所ハ今都ウツシ斗ナレハ加様ニシ給ニヤトソ人申シケル

の次は、

哀舊都ハ目出カリツル都ソカシ。王城守護ノ鎮守ハ四方ニ光ヲ和ケ、靈驗殊勝ノ寺々ハ上下ニイラカヲ並べ給フ……。

百年ヲ四カヘリマテニ過ニシヲ、タキノ里ノアレヤ終ナム

サキ出ル花ノ都ヲフリステ、風フク原ノ末ソアヤウキ

都遷ハ是非無先蹤神武天皇ト申スハ……御母ハ玉依姫、天神七代神ノ代十二代ノ跡ヲウケ……

とあつて、都遷の先蹤をあげる。これも百二十句本と同じ叙述であつて一方流本と異なる所である。平松家本は一方流本と同じ。又その先蹤の語中にも、

宣化天皇元年猶大和ニカヘテ日隈ヤ入野宮ニ宮居シ給フ。自其欽明敏達用明崇峻推古舒明皇極天皇マテ八代ハ大和國ニ栖給フ



とあつて、傍點を付した所は百二十句に一致し、恐らく長門本卷九（二九五頁下）によつて補つたものと認められる。平松家本は一方流本と同文である。又、

最モ平家ノ崇ヘキ都ソカシ。嵯峨天皇ノ御時已に此京ヲ他國ヘ移トシ給シニ、諸國ノ人民歎申シカハ、遂ニウツサレシテヤミニキ。一天ノ君萬乘ノ主タニ移シ得給ハヌ都ヲ大政入道人臣ノ身トシテ被遷ケルソ怖シキ。是ハ國々ノ異賊政登リ平家都ニ跡ヲトメス可交山林前表カトツ人申ケル。同六月八日福原ニハ新都ノ事始有ヘシトテとあるのも、一方流本に比して簡略であり、傍點を付した所は百二十句本と一致して一方流本にはない語である。これも長門本卷九（二九六頁下）によつて補入した語であらう。平松家本にはなし。月見の章では、かつて述べた如く、

近衛河原ノ大宮斗ソ坐シケル。實定其御所ヘ參テ、待宵小侍從呼出シ、古ヘ今ノ物語シ、サ夜モ漸々深行ハ、ヤウチャウ音取朗詠シテ舊都ノ荒行ヲ今様ニコソウタハレケレ。

とあつて、優婆塞の宮の姫君の事なく、終の方の傍點のある所は百二十句本と一致する所である。平松家本は一方流本に同じ。物怪之沙汰では、

入道目モハナタス守給ヘハ、只消ヘニキエウセヌ。又或朝入道帳臺ヨリ出テ妻戸ヲ推開キ人ヤアルノト召サレケレトモ折節人モ候ハス、……強ウニラマレテ露霜ノ日ニ當テ消様ニ跡形モナク成ニケリ。又後ノ園ニ大木ノ倒ル、音シテ四五十人斗カ聲ニテトツト咲聲シケリ。是ハ天狗ノ所爲ト云沙汰ニテ夜六十人晝四十人ヒキメノ番

再び屋代本平家物語について

ト名付テ墓目ヲ射サセラレケルニ、天狗ノ有方ヘ射タル時ハヲトモセス、無方ヘ射タル時ハトツト咲聲ソシケル。入道ノ宿所近ク誠ニ榮タル五葉ノ松ノ有ケルカ、夜ノ間ニ枯タリケルコソ不思議ナル舍人多タ付テ無隙ナテカハレケル祕藏之馬ノ尾ニネスミ一夜ノ中ニ、とあるのも、傍線を付した所は順序が他本と異り、傍點を付した所は百二十句本と殆ど同文である。一方流本には存しない語である。平松家本は覺一本に略同じ。例の青侍の夢の條は、屬引用せられる所であるが、

今ハ伊豆國流人前右兵衛佐源頼朝ニタハラスル也ト被仰ト夢ニ見テ人ニ語程ニ、太政入道是ヲ聞付給テ攝津判官盛澄ヲ以テ、不思議ノ夢ミタンナル青侍カ御邊ノ許ニ候ナル、急キ是ヘ遣シ給ヘト有ケレハ、件ノ青侍不敢聞モ逐電。

これは他の多くの記事に準じて推測するに脱文とすべきであらう。傍點のある所の所の百二十句本と一致するのはいふまでもない。平松家本は覺一本と同文である。又この章の終は、

嚴島大明神ハ沙竭羅龍王ノ第三姫宮ニテ女神トコソ聞ニ、俗躰ニテ見給ケル事は又不心得トソ宣ケル。家ヲ出テ深キ山ニイル人ハ皆往生極樂ノ營ノ外ハ他事ヤハ有ヘキナレトモ、能政ヲ聞テハ悦ヒ、惡キ事ヲ聞テハ被歎ケリ。

とある。一方流本（平松家本同文）に比して簡略である。この條でも傍點の示す如く百二十句本と一致する語がある。早馬の章では、

若キ公卿殿上人ハ、早サラハ疾シテ事ノ出コヨカシ、對手ニ向ハント云ソ無墓。畠山カ三浦ト軍シタリケル事ハ、父庄司重能、伯父小

山田別當カ折節在京シタリケルヲ、扶カ爲トソ後日ニハ聞シ。畠山庄司重能、弟小山田別當有重、宇津宮左衛門尉朝綱、是三人ハ大番ノタメニ上洛シタリケルヲ、大政入道怒テ、是等三人ヲ召寄給テ、トウ々汝等源氏ニ同心セジト云起請書テ進セヨト宣ヘハ、三人ノ者共七枚ツ、ノ起請書テ奉ル。小山田別當カ申ケルハ僻事ニテソ候覽……。

とある所も、傍點の示す如く又百二十句本に一致する語が多い。前の傍點のある所は長門本の卷九（三〇九頁上）の語によつて補うたものであらうか。一方流本にはない語である。朝敵揃では、朝敵の名と順が他本と異なる他に、

首ヲ獄門ニ懸ラル。東夷西戎南蠻北狄新羅百濟高麗契丹マテモ、我朝ニ肯ク事ナシ。此世ニコソ王位モ無下ニ輕ケレ……。

傍線の如く、他本にない異文がある。これも又長門本卷九（三一〇頁上）の語による補入であらう。咸陽宮の章では、始皇帝が燕丹を歸國せしめた條、

始皇帝綸言不返事ヲ信シツ、燕丹ヲ宥テ本國ヘコソ歸サレケレ。燕丹我國ニ歸テ後怨ヲ含テ、更ニ不隨奉。始皇帝嗔テ是ヲ討ントシ給フニ、燕丹不恐シテ輕軼ト云兵ヲカタラウ。

ここにも一方流本、百二十句本、平松家本などにある語がない。

阿房殿ハ東西ヘ九町、南北ヘ五町、高サ三十丈大床ノ下ハ、五丈ノ幢ヲ立タルカ、猶及ヌ程也。金ヲ以テ日ヲ作り、銀ヲ以テ月ヲ作レリ。瑠璃ノ砂十萬石、眞珠ノ砂三十萬石、金ノ砂十萬石ヲ庭ニハシケリ。

とあつて異文を含む所がある。百二十句本、平松家本にはなし。文覺荒行の章では、

上西門院ノ衆也。盛遠十九ニテ菩薩心ヲ發シ、誓キリ山々寺々修行シテ迷ヒ行キケルカ、近頃ハ高雄邊ニソ住ケル。高雄ニ神護寺ト云寺有。久ク修造ナクシテ、荒廢シタリシカハ、扉ハ風ニ倒テ落葉ノ下ニ朽、軒端ハ雨露ニ浸サレテ、佛壇更ニアラハナリ。文學是ヲ見テ我レ在俗ノ身也シカトモ、適出家遁世ノ身ト成レリ。夫ニ取テハカ、ル無縁ノ堂舎ヲ修造センニ不如トテ、勸進帳ヲ書テ十方檀那ヲ勸アリケルカ、或時院ノ御所法住寺殿ヘソ参リタル。

とあつて、荒行の記述がない。他の諸本にはすべて存する。勸進帳の章では、その勸進帳の文に、

生死流轉衢冥々徒謗人謗法。  
とあつて、一方流本の、

只色に耽リ酒にふける、誰か狂象重淵の迷を謝せん

の語がなく、百二十句本、平松家本に同じく、その他にも百二十句本と一致する所がかなりある。富士川の章では、

九月十八日福原ノ新都ヲ立。二日付タルニ早馬十八日マテ討手ヲ被下サリケルコソ不思議ナレ。十八日ニ新都ヲ立テ、十九日舊都ニツク。同廿日驪東國ヘコソ打立レケレ。

伊土岐嶋御幸事同願文之事有ヘシ

大將軍權亮少將惟盛ハ生年廿三ニソ成レケル。容儀躰拜繪ニ書トモ筆モ難及、馬鞍弓箭ニ至マテ、照耀ク程ニ出立レタリケレハ、目出タカリシ見物ナリ。副將軍薩摩守忠度ハ年來宮原ノ女房ノ本ヘ通ハ

レケルカ、此女房小袖ヲ一重忠度ノ許へ被送ケルニ、千里ノ名殘ヲ惜テ一首ノ歌ヲソ副ラレケル。

東路ノ草葉ヲワケン袖ヨリモタ、又袂ニ露ソコホル、

忠度

別路ヲ何カナケカン越テ行關モ昔ノ跡ト思ヘハ

關モ昔ノ跡ト讀事ハ、此人々ノ先祖平將軍貞盛……。

とあつて、伊土岐嶋御幸事及び同願文は拔書の中にあるが、ここにあつたものを別冊に入れたものである。次に維盛や忠度の旅装については簡略であつて、屋代本のみの特質であるのみならず、又忠度と女房との物語も存しない。

忠清ハニケノ馬ニソ乗ニケルカツサシリカヒ懸テヨシナシ

ナト返タモヲカシカリシ事共也。大政入道大ニ嘖テ、最愛ノ孫ニテ御坐シケレ共、權亮少將ヲハ鬼海嶋へ流サントソ宣ケル。上總守ヲハ臈首ヲ刎ヨト宣ケルヲ、人々様々ニ申有ラレケレハ、思留リ給ケリ。同十一月七日福原ニハ内裏造出テ、主上御還幸有。此京ハ北ハ山聳テ高く南ハ海近クシテ下ケレハ、浪ノ音常ニ喧シク、鹽風ハケシキ處ナリ。但シ内裏ハ山ノ中ナレハ彼木丸殿モ角ヤト覺テ中々優成方モ有ケリ。人々ノ家々ハ野中田中ナリケレハ、麻ノ衣ハ搏ネトモ、トヲチノ里トモ云フツシ。都ニハ大嘗會可被行トテ、御襖ノ行幸ナル。大嘗會ト申ハ……。

とあつて、傍點の示す如く、全く百二十句本と一致するのである。しかもこの前に、將門追討の時の忠文の説話は存しない。これもこの屋代本の特質である。以上の例を觀ても、屋代本の詞章が古態を示すも

再び屋代本平家物語について

のであるとは簡単に推定し難いことが明白になるであらう。前後の詞章が類似し、その中間の一部がなき場合は、脱落又は省略と認むべきが普通であらう。もし屋代本に他の本文が加つて百二十句本などが成立したとすれば、他の本文とは何か。それは所謂覺一本であらう。とすれば覺一本は一體何によりて成立し、又屋代本とは如何なる關係に立つかといふ點で又問題を生ずることになるであらう。

### 三

卷六について云へば、新院崩御の章に、

男女打ヒソメテ禁中サヒシクソ成リニケル。同四日南都ノ僧綱關官シテ被停止公請ヲ上、被沒收所職。岡福寺別當花林院僧正榮圓ハ佛像經卷ノ煙ト上ルヲ見給テ……(中略)

聞タヒニメツラシケレハ時鳥イツモ初音ノコ、チコススレト讀ンタリケルニヨテコソ初音僧正トモイハレ給ケレ。加様之人モ失給シカハ、南都ハ併ラ滅ヒヌルニコソ。衆徒ハ皆若モ老タルモ、或燒殺サレ、或ハ打殺サレテ殘所ハ皆山林ニ交テ留跡者一人モナシ。春日大明神ノ神慮ノ程モ難量リ。佛法王法共ニ盡ヌルコトコソ淺猿ケレ。但形ノ様ニテモ御齋會ハ可被行ニテ……。

とある。一方流本に比して簡略であり傍線のある所は一方流本と記述の順序の異なる所で、傍點のある所は一方流本にはない語である。百二十句本、平松家本は一方流本覺一本と同文である。又同じ章の最後の方は、

治承五年正月十四日、六波羅池殿ニテ、上皇終ニ崩御ナリヌ。臈其夜

東山ノ禁青嚴寺へ渡シ奉ル。御歳僅ニ廿一、内ニハ五戒ヲ持、慈悲ヲ先トシ、外ニハ五常ヲ不亂、禮儀ヲ直シクセサセ給キ。末代ノ賢王ニテ渡ラセ給ツル物ヲトテ、世ノ惜奉ル事不斜。恐ラクハ延喜天曆ノ御門ト申ストモ、爭カ増ラセ給ヘキ。

とあるが、これも一方流本及び百二十句本、平松家本が詳細であるのに極めて簡略である。これは他の多くの例の如く恐らく本書のみが簡略にしたものではなからうか。澄憲の歌も右京の大夫の歌もないのは特異である。葵前の章には、一方流本になき語、

尋常ニ白地ナル御事ニテモナク、夜ナク是ヲ召レケル。

主上何トナキ御手習ノ次ニ、折節思召出ケル間、縁薄業ノ句殊ニ深カリケルニ……。

などがある、これは百二十句本と類する。

小督の章の卷三にあることについては既に述べたが、平松家本も卷三の最後に載せてゐる。その詞章についてみるに、

大政入道ノ御娘中宮トテ内裏ニ渡ラセ給フ。冷泉小將ノ北方同ク御娘也シニ、小督殿ニ一方ナラス加様ニ有シ間、大政入道イヤ々々此小督カアラン程ハ、此世中アシカリナム。小督ヲ禁中ヨ召出サハヤトソ宣ヒケル。

とあるが、傍點を付した所は一方流本になく、八坂流甲類本の百二十句、平松家本に類する所である。同じく、

堂々ヲ見廻レトモ、小督ニ似タル女房タニモ見給ハス。内裏ヲハ憑ケニ申テ出ヌ、此女房ニハ尋モアハス、空ウ歸參リタラムハ中々マイラサラムヨリモアシカルヘシ。

とか、

想夫戀ト云樂也、糸惜ヤ樂コソ多キ中ニ、君ノ御事思出進サセ給テ、此樂ヲ彈シ給フ事ヨト思テ、馬ヨリ飛テ下リ、門ヲホト々々ト敲キケレハ、箏ヲハ、ヤ彈ヤミヌ。

といった如く、百二十句本、平松家本と類する語がある。岩波古典大系本の小督の章の最後にあたる所は、

法皇ハ御歎ノミ打ツ、キ、御悲ノミソ、無隙カリケル。永萬元年七月ニハ、一宮二條院崩御ナリヌ。仁安三年七月ニハ、御孫六條院カクレサセ給ヌ。同八月七日ニハ比翼ノ鳥、連理ノ枝ト星ヲ差テ、御契不淺シ建春門院モ被侵テ秋ノ霧ニ、朝ノ露ト消サセ給ヌ。治承四年五月ニハ第二ノ御子高倉宮ニ討レ給ヌ。……親ニ先立ヨリ恨メシキハナシ。雖知老少不定猶迷前後相違ヘリト書置レタル言端モ思知レテ哀ナリ。

とあるが、これも傍點のある所は一方流本にはなく、百二十句本に類する所である。又一方流本に比して簡略な所がある。平松家本は覺一本に同じ。廻文の章では、木曾に就いて、

人ト成マ、ニハ、武略ノ心猛クシテ、弓馬ノ道世ニ勝タリ。常ニハ如何ニモシテ平家ヲ滅テ世ヲ取ハヤナントソ宣ケル。兼遠大ニ悦、其料ニコソ君ヲハ此廿餘年養育申候ヘ。角被仰候コソ誠ニ八幡殿ノ御末トハ覺ヘサセ給候ヘト申ケレハ、木曾イト、意武フナテ、禰井太郎小野太、滋野行近ヲ始トシテ國中ノ兵ヲ語フニ一人モ背クハ無リケリ。

とある。これは、八坂流甲類本すべてに共通な詞章で、一方流本とは

全く異なる所で、木曾元服の記事がないのである。飛脚到來の章でも、源氏ニ心ヲ通シテ、太宰府ノ下知ニモ不隨トソ申ケル。又伊豫河野ヲ先トシテ、南海道ニハ熊野別當湛増已下皆平家ヲ背テ、源氏ニ心ヲ通シケリ。東國北國既ニ背ヌ。南海西海如此。四夷忽ニ亂ヌ。世ハ只今失ナムスト有心人無不悲。

とあつて、額入道西寂の事がなく、これも八坂類流甲類本の共通の性格である。百二十句本を示せば、

ひたすら源氏に心をつうじて、だざいふの下ちにもしたがはずとぞ申ける。とうごくほつくくすでにそむき、なんかいだうにはくまのべつたうたんそういげみな平家をそむゐて、源氏にどうしんしけり。四いたちまさにもだれぬ。よはだゝいまいせなんずと、心ある人かなしまずといふ事なし（平松家本もこれに近い）。

これよりも、屋代本が百二十本と同類の本文を有することが明らかである。入道死去の章にも、

宗盛被申ケルハ、討手ハ去年モ遣テ候ヘトモ、シ出シタル事モ候ハズ。今度ハ宗盛東國ニ罷向候ハント申サレケレハ、上下式題シテ、最可然候。誰モ左様ニ候ハハ、尻足ヲハヨモ蹈候ハジ。備武官携弓箭人々ハ皆右大將殿ヲ大將トシテ、可發向東國之由被宣下。同廿七日右大將宗盛東國ヘノ門出ト聞シ程ニ、大政入道不例事出來給ヘリトテ、右大將其日ノ門出留リヌ。同廿八日ノ朝ヨリ入道重病受給ヘリトテ、京中六波羅大地ヲ打返シタルカ如クニ騒アヘリ。高キモ賤モ聞之、アハシツルハトソ申ケル。入道病付給日ヨリシテ、水ヲタニモ喉ニモ入給ハズ……。

再び屋代本平家物語について

とある所も、これ又百二十句本、平松家本と同文である。傍點を付した所は一方流本にない語である。入道死去の章より築島にかけての詞章は、

老死ト非可申。七十八マテ治人モ有ソカシ。サレ共是ハ宿運盡給ヌル上、天ノ責難通シテ、祈ル禱モ不叶。千萬ノ兵モ不禦冥途使。又歸コヌ死手山、只獨リコソ御坐ケメ。造置給シ罪業斗ヤ伴ヒケン哀ナリシ事共ナリ。同七日煙ト成奉テ、骨ヲハ圓實法眼頸ニ懸テ福原ニ下テ納テンケリ。

人ノ失タル跡ニハ如何ナルアヤシノ者モ、朝夕ニ鐘打鳴シ、例時懺法讀事ハ常ノ習ナルニ、是ハサコソ入道ノ遺言ナラムカラニ、供佛施僧ノ營ト云事ハナシ。只明テモ暮テモ軍合戰ノ謀ヨリ外ノ營無他事。最後ノ病ノ有様コソ心憂ケレトモ、更只人ニテハ無リケリト覺ル事ノミ多カリケリ。何ヨリモ福原ノ經嶋築テ、今ニ至マテ上下往來ノ船ニ無煩コソ目出ケレ。經ノ嶋ト申ハ石面ニ一切經ヲ書テ被築タリケル故ニコソ經ノ嶋トハ申ケレ。大方敬神祇崇佛法給事、人ニハ勝レ給ヘリ。舊キ人ノ申ケルハ、清盛ハ非忠盛ノ子ニハ、白河院ノ御子成ト云ヘリ。其故ハ去永久ノ比、法王祇園ノ邊ナル或女房ノ本ニ忍ヒノ御幸ナリタリケルニ、比ハ五月廿日餘ノ暗ナリケリ。とある。後に觸れることとする。一方流本に比して極だ簡略であつて、築嶋の大部分や慈心房の事が無い。但し慈心房の事は入道相國爲慈惠大僧正化身事として別冊に收めてある。他の八坂流の諸本は殆ど一方流覺一本と記事の有無からは差がない。覺一本の祇園女御の章の後半に、如無僧都の事があるが、屋代本もその詞章は大略これに同じ

く、一方流流布本より詳細であることはいふまでもない。嘆聲の章では、

同七月十四日ニ改元有テ、養和ト號ス。肥後守貞能、鎮西謀叛平ケンカ爲ニ其日門出ス。同八月七日將門追討ノ例トテ官廳ニテ、大仁王會被行。同九月九日鎮鎧甲ヲ大神宮ヘ進セラル……………。

とあつて、妙音院師長の歸洛の事がない。百二十句本、平松家本は覺一本に略同じ。横田河原合戦の章では、最後は、

既ニ都ニ責入ト云ニ、浪ノ立ヤラム、風ノ吹ヤランモ不知ラ躰ニテ、花ヤカ成シ有様共、云甲斐ナクソ見ラレケル。サル程ニ壽永モ二年ニ成リニケリ。

とある。これには覺一本の卷六の最後にある朝覲行幸の事がない。一方流本と八坂流本との甚しい差異の一である。従つて、八坂流甲類本のすべては、卷七の卷頭は、この朝覲行幸より始まる事となる。即ち卷七の卷頭は次の如くである。

平家卷第七

壽永二年二月廿二日、主上爲朝覲法住寺殿行幸ナル。鳥羽院六歳ニテ朝覲行幸ノ有ケル其例トソ聞ヘシ。同廿三日宗盛從一位シ給フ。同廿七日大臣ヲ辭申サル。是ハ爲兵亂之祈也。南都北嶺ノ大衆熊野金峯山之僧徒、伊勢大神宮ノ神官ニ至ルマテ一向背平家、源氏ニ心ヲ通シケリ。四方ニ成下院宣、諸國ハ宣旨ヲ遣セトモ、院宣モ宣旨モ皆平家ノ下知トノミ心得テ隨付者無リケリ。其比木曾與兵衛佐不快事出來テ、兵衛佐木曾ヲ討ントテ、六萬騎ヲ相具テ發向信濃國ヘ。木曾聞之、乳父子ノ今井四郎兼平ヲ以テ、何ニ依テ義仲ヲハ討ント

ハ候ヤラム。但シ十郎藏人殿コツ、其ヲ恨ル事有トテ、是ニ御坐シタルヲ、義仲サヘ無情ケモテナシ申サン事如何ンソヤ、アレハ當時ハ打連申テコソ候ヘ。此外意趣有ヘシトモ不覺。依何今日明日奉中違合戦シテ、平家ニ咲レントハ可存ト被云遣タリケレハ、兵衛佐、今コソ角ハ宣ヘトモ、頼朝ヲ可討之由、慥ニ被廻謀ケルトコソ聞ケ、夫ニヨルマシトテ、被差向討手一陣。

とある。この詞章を見るに、傍點のある所は、一方流覺一本にはない語で、百二十句本、平松家本とよく一致する所である。

又北國下向の章も、

木曾驍越後ヘ打越テ城四郎ト合戦ス。如何ニモシテ討取ントシケレ共、長持主從五騎ニ打ナサレ、行方不知ソ落テケル。越後國ヲ始テ北陸道ノ兵共皆木曾ニ隨付。東山、北陸兩道ヲ討隨ヘテ、只今都ヘ可攻入トソ聞ヘケル。平家ハ去年ヨリ明年ハ……(中略)遠江ヨリ東コソ參ラサレ、其外ハ皆馳參ル。遠江ヨリ東ニモ相模國住人俣野五郎景久、伊豆國住人伊東九郎祐澄、武藏國住人長井齋藤別當眞盛ハ平家ノ方ニソ候ケル。東山道ニモ近江美濃飛驒者共參リケリ。平家先北國ヘ討手ヲ可遣ト評定有テ北國ヘ討手ヲ遣ハサル。大將軍ニハ……。

とある。この詞章にも傍點を付した所はすべて百二十句本、平松家本と同文である。北國下向の章の次に竹生嶋詣の章はなく、別冊の中に、皇后宮亮經正竹生嶋參詣事として收めてゐる。又平松家本も別紙にありとしてゐる。後に觸れることとする。火打合戦の章でも、

宮崎石黒ヲ前トシテ七千餘騎ヲソ込ケル。サル程ニ平家越前國木邊

山打越、火打城へソ寄タリケル。此城ノ有様ヲミルニ、磐石峙ク廻テ四方ニ峰ヲ連ネタリ。

とか、

齊明威儀師心替シテ消息ヲ書、墓目ノ中ニ込テ、忍ヤカニ山根ヲ傳ヒ、平家陣ヘソ射入タル。此墓目ノ鳴ヌ事コソ恠シケレトテ、是ヲ取テミルニ、中ニ文有、披見之、彼潭トテ非往古淵、一旦シカラミヲ搔テ堰上タル水也。急遣雜人共テ……。

とか、すべて百二十句本、平松家本と略同文である。次に願書の章にも、

木曾宣ケルハ、平家ハ大勢ニテ下也。山打越テ黒坂ノスソ松長野柳原クミノ木ハヤシノ廣ミヘ出ル物ナラハ、馳合ノ軍ニテソアランスラン、馳會ノ合戦ハ如何ニモ勢ノ多少ニヨル事ナリ。大勢カサニ懸ラレテ、叶マシ、搦手ヲ廻セヤトテ、楯六郎親忠七千餘騎ニテ北黒坂ヘ廻ル。仁科高梨山田次郎七千餘騎ニテ南黒坂ヘ向フ。(我身ハ)大手ヨリ一萬餘(騎)、亦一萬餘騎ヲハ松長野ノ柳原ニ引カクシ、今井四郎兼平六千餘騎ニテ鷺嶋ヲ打渡リ、日宮林ニ陣ヲ取。木曾宣ケルハ、此勢ノ黒坂口ヘ向ン事ハ遙ノ事ソ。サラム程ニ平家ノ大勢山ヨリ此方ヘ越ナンス。勢ハ不向トモ、旗ヲ先立物ナラハ、源氏ノ前陣向タリトテ、平家ハ山ヨリアナタニソ引ヘンスラン。幡ヲ先立ヨトテ、勢ハ向ハネトモ、黒坂ノ上ニ白幡三千流計ソ打立タル。如案、平家はヨミテ……。

とある。この詞章は一方流本とは全く異り、百二十句本、平松家本と略同文である。すべてこの章は百二十句本、平松家本と同文といへよ

再び屋代本平家物語について

う。俱利伽羅落の章も、

源氏ハ角アヒシラウテ日ヲ暮シテ、後ノ谷ヘ追落テ亡サントスルヲハ不知、平家共ニアヒシラヒテ日ヲ暮ス事コソ無墓ケレ。次第二閭ウ成シカハ、搦手ノ勢一萬餘騎、平家ノ陣ノ後ナル久里伽羅堂邊廻會フ。久哩伽羅堂前ノ一萬餘騎、籠ノ方立ヲ叩テ、天響キ大地モ動程ニ時ヲ作ル。木曾聞之、大手ヨリ一萬餘騎ニテ時ヲ合ス。松長野、柳原ニ引隠クシタル一萬餘騎、今井四郎カ六千餘騎、日宮林ヨリ一度ニ喚テ馳向フ。前後四萬餘騎カ時ノ聲、山モ川モ只一度ニ崩ル、カトソ覺タル。平家爰ハ山高シ、谷モ深シ、四方巖石ナリ。搦手輒ウヨモ廻ラシトテ、打解タル處ニ、思懸ヌ時ノ聲ニ驚テ、アハテ騒キ若ヤ助ルト喬ノ谷ヘソ落シケル。キタナシヤ返セ〜ト云、族モ多カリケレトモ……。

とある。傍點を付した所は一方流本と異り、百二十句本、平松家本と殆ど同文である。従つてこの章も百二十句本、平松家本と同文と認められよう。篠原合戦、實盛の章も、

鹽坂ヘ押寄テ見給ヘハ、如案十郎藏人ハ射シラマサレ引退キ、馬ノ息ヲ休テ引ヘタル處ニ、木曾二萬餘騎入替テ推寄せ、時ヲ作テ喚テ懸ク。平家暫ソ支ヘタリケル。志保ノ手ヲモ追落サレテ、加賀國篠原ヘ引退ク、同廿三日卯時ニ源氏篠原ヘ推寄せ、午尅マテ戦ケリ。四時ニ破ケル合戦ニ源氏ノ兵モ一千餘人被討ヌ。平家ノ方ニハ高橋判官長綱ヲ始トシテ、二千餘人ソ亡ケル。平家篠原ヲモ終ニ被攻落テ落行ケリ。其中ニ武藏三郎左衛門有國、長井齋藤別當實盛、大勢ニ離テ、二騎ツレテ引返々々戦ヒケル。武藏三郎左衛門有國ハ、

(敵ニ)馬ノ腹ヲ射セテ、頻ニ刎ケレハ弓杖ツヒテ下立タリ。敵ノ中ニ取籠ラレテ散々ニ射ル。矢種射盡シテ打物拔テ戦ヒケルカ、矢七八射立ラレテ、立死ニコソ死ケレ。二騎ツレテ引返シタル武藏三郎左衛門被討後、長井齋藤別當眞盛存スル旨有ケレハ、只一騎殘テソ戦ヒケル。信濃國住人手塚太郎馳寄テ、御方ハ皆落行ニ只一騎殘テ軍スルコソ心惡ケレ、誰ソヤ。無覺東名乗レ聞ント云ケレハ、カウ云和殿ハ誰ソ、先名乗レト云……。

とある。一方流本の篠原合戦の詞章に比して極めて簡略である。右の傍點のある所は一方流本と異りて百二十句本、平松家本と一致する所である。この實盛の章も百二十句本、平松家本に同じく、最後は、

平家去四月北國へ下シ時ハ、十萬餘騎ト聞ヘシカ、今五月ニ歸登ルニハ、(僅ニ其勢)三萬餘騎、差モ花ヤカニ出立テ、都ヲ立シ人々ノ徒ニ名ヲノミ殘シ、越路ノ末ノ塵ト成コソ悲ケレ。入道ノ末子參河守知教モ被討給ヌ。忠綱景高モ不歸。季國長綱モ討レヌ。盡流漁時ハ……少々ハ可被殘物ヲト申人多カリケルトカヤ。飛驒守景家ハ最愛ノ嫡子景高被討ヌト聞ヘシカハ臥沈テ歎キケルカ、頻ニ出家ノ暇申間、大臣殿被許ケリ。馳出家シテ打伏十餘日有テ、遂ニ思死ニソ死ニケル。始之親ハ子ヲ討セ子ハ親ヲ討セ、妻ハ夫ニ後レ、家々ニ喚キ叫聲ヲヒタシ。平家北國ノ軍ニ打負テ都へ歸上リテ後、六月一日藏人右衛門權佐奉仰テ、祭主神祇權少副大中臣親俊ヲ殿上ノ下口へ召レテ……。

とある。これも百二十句本、平松家本と殆ど同文である。還亡の章も、木曾山門牒狀、返牒、平家山門連署の章も同じである。但し平家

連署はなくして、

異口同音作禮祈精如件

壽永二年七月日 前内大臣從一位平朝臣宗盛

謹々上 座主僧正御房

トソ被書タル。山王大師垂憐給へ、三千衆徒合力ヨトナリ……。

とある。平松家本と同文である。百二十句本には連署がある。

主上都落の章でも、例へば、

卽等楯六郎親忠、大夫房覺明六千餘騎天台山ニ責登テ、惣持院ヲ城郭トス。大衆皆同心シテ只今都ニ攻入ト申タリケル故トカヤ。平家はヲ防ン爲ニ勢田ヘハ新中納言知盛、本三位中將重衡三千餘騎ニテ被向ケリ。宇治ヘハ越前三位通盛、能登守教經、三千餘騎ニテ被下ケリ。サル程二十郎藏人行家一萬騎ニテ宇治ヨリ入ト云、足利矢田判官代義清五千餘騎ニテ丹波國經大江山ヲ京ヘ入ル。接津河内ノ源氏共合力ヲテ、淀河尻ヨリ攻入トソ旬ケル。平家はヲ聞テ、コハ如何スヘキ。只一所ニテ何ニモナラントテ、宇治勢田ノ手ヲモ皆呼ソ返サレケル。

とあつて、百二十句本、平松家本と略同一である。傍點のある所は覺一本と異なる所である。更に又、

餘ニアハテ、取落ス物共多カリケル。攝政殿モ供奉セサセ給タリケルカ、東寺門ノ程ニテ、ヒンツラユヒタル童子ノ御車ノ前ヨツト馳過ケルカ、御車ノ内ヲ見入レタルヲ御覽スレハ、左ノ肩ニ春日ト云文字ソ見サセ給ケル。是ハ法相擁護ノ春日權現淡海公ノ御末ヲ守ラセ給カト目出タカリシ事共ナリ。攝政殿ハ大明神ノ御告成ト被思



食ケレハ御供ニ候進藤左衛門信澄ヲ召テ、何トカ被仰タリケン、御牛飼ニキツト目ヲ見合セタレハ、御車ヲ遣返シ奉リ、大宮ヲ上リニ北山邊知足院殿へ入セ給フ。是ヲハ人不奉知。大納言時忠内藏頭信基是二人斗ソ衣冠ニテ被供奉タリケル。其外近衛司モ皆甲冑ヲヨロイ弓箭ヲ帶シテ供奉ス。七條ヲ西へ朱雀ヲ南へ行幸ナル。漢天已ニ開ケ雲(東)嶺聳へ曉ノ月シロク寒テ鷄鳴又劇シ。一年都遷トテ俄ニアハタ、シカリシハ、カ、ルヘカリケル前表トモ、今コソ思合セケレ。薩摩守忠度ハ何クヨリカ引返サレタリケム……(忠度都落)。

となつて、傍點のある所は、覺一本と異りて、百二十句本、平松家本と一致する所であり、傍線の所は覺一本と順序の異なる所で、然も百二十句本平松家本と一致する所である。かくて忠度都落、經正都落、維盛都落と續くのであるが、本書には、經正都落がなく、青山沙汰は拔書に出てゐるので、經正都落のみがないといふ事になるが、同類本の佐々木信綱博士舊藏本(天理大學藏)や平松家本にもこの二章がないのは百二十句本の二章を有するものに比して拔書をしたものと認むべきであらう。忠度都落の章にも、

内ヲ聞ハ落人返登リタリトテヨヒタ、シク騒動ス。門ヲ叩共明ヌ間、是ハ薩摩守忠度ト申ス者ニテ候カ、(今一度)入見參可申事候(テ道ヨリ歸上テ候)。縦門ヲハ不開共……。

とあり、又、

努々疎略ヲ存マシク候。勅撰ノ事ハ人ハ不知。愚身カ承ランニヨイテハ、御疑有ヘカラスト宜ヘハ、忠度今生ノ見參ハ只今限ト申スト

再び屋代本平家物語について

モ、來世ニテハ必一佛土ニ參合候ナントテ被出ケリ。(薩摩守)甲緒ヲシメ馬ノ腹帶ヲ堅メ打乗テ、西ヲ差テソ歩セ行。

とあり、百二十句本、平松家本に一致する。屋代本の誤脱は百二十句本平松家本によつて補つた。傍點の所は覺一本にはない語である。次に維盛都落の章でも、その終のあたりは、

齊藤五齊藤六トテ、兄ハ十九、弟ハ十七ニ成侍有。是ハ去五月ニ篠原ニテ討レシ齊藤別當眞盛カ子共ナリ。是等モ(三位中將ノ)馬ノ左右ノ水付ニ取付テ、何クマテモ御共仕ヘキ由ヲ申ス。三位中將此等ニイタクシタハレテ、多クノ者共ノ中ニ汝等ヲ留ルハ、思様カ有ソトヨ、末マテモ六代カ便トハ汝等コソ成ヘキ者ヨト、見ル所カ有テ留ルナリ。トマリタラムハ共シタランヨリモ、猶ウレシク思ハンスルソナントコマノト宣ヘハ、不及力涙ヲ押テ留ラントス。北方ハ日比ハ是程ニ可無情人トコソ懸テモ思ハカリシカトテ、臥マロヒテソ泣給ケル。若君姫君大床ヘコロヒ出テ、聲ヲハカリニ喚キ叫ヒ給フ。此聲々門外マテ聞エケレハ、三位中將馬ヲモ進メヤリ給ハス。引ヘ々々ソ被泣ケル。誠ニ人ハ今日別テハ、又何レノ日何ノ時ハ必可廻會ト契ルタニ、其期ヲ待ハ久キニ、是ハ今日ヲ限ノ別ナレハ、其期ヲ知ヌコソ悲シケレ。此聲々ノ耳ノ底ニ留テ、西海ノ旅ノ空マテモ、吹風ノ音立浪ノ聲ニ付テモ只今聞ヤウニソ被思ケル。平家都ヲ落行ニ、六波羅、池殿、小松殿、西八條ニ火ヲ懸タレハ、黒煙天ニ滿テ、日ノ光リモ見サリケリ。或ハ聖主臨幸ノ地也……。

とある。これも百二十句本、平松家本と同一といへよう。聖主臨幸の章も、

今ハ壽永ノ秋ノ紅葉トハ落ハテヌ。池大納言頼盛ハ池殿ニ火懸テ被出ケルカ……。

とあつて、順序が覺一本と異り、池大納言頼盛都留の事（一門都落の章）も、

大臣殿方ヲ見遣テヨ、ニモ恨ケニソ思ハレタリケル。誠ニ理ト覺テ哀ナリ。池大納言ハ八條ノ女院仁和寺常葉殿ニ渡ラセ給ケルニソ、参籠ラレケル。兵衛佐大納言殿ヲハ、故池殿尼御前ノ渡ラセ給トコソ思進セ候ヘ。全於頼朝ニ意趣不奉思。八幡大菩薩モ御照覽候ヘト度々以誓言ソ申サレケル。又討手ノ使ノ上ルニモ、相構テ汝等池殿ノ侍共ニ向テ弓ヲ挽ナトソ宣ケル。加様ノ事共ヲ憑テ留給ケルニヤ、怨ニ一門ニハ離レヌ。浪ニモ磯ニモ付ヌ心チソセラレケル。畠山庄司重義、弟小山田別當有重、宇津宮左衛門朝綱、是三人ハ、去治承三年ヨリ被召籠テ有シヲ、大臣殿計ニ、此等カ首ヲ可被刎ト宣ケルヲ、平大納言、新中納言ノ被申ケルハ、此等百人千人切ラセ給テ候共、御運盡サセ給ナン後ハ、世ヲ取セ給ハン事、難カルヘシ。東國ニ候彼等カ妻子共カ、サコソ歎候ラメ。今ヤ下ル々々ト待候覽ニ、切レ進セタリト聞ヘ候ハ、何斗ノ思ニテカ候ハンスラン、只東國ヘ可被返遣トコソ覺ヘ候ヘトヒラニ申サレケレハ、（大臣殿）實モトテ此等三人ヲ召寄給テ、汝等ニ暇タフ。急キ東國ヘ可下ト宣ヘハ、三人共畏テ……。

とあつて、傍點のある所は前々の詞章と同じく覺一本と異つて百二十句本、平松家本と一致する所、傍線のある所は、覺一本の聖主臨幸の後半にあたる所で、順序が百二十句本、平松家本と同一であり、又そ

の詞章も百二十句本、平松家本と同じである。一門都落の章でも、我等都ヘ今一度歸シ入給ヘト、泣々被申ケルコソ哀ナレ。肥後守貞能ハ河尻ニ源氏共カ向タリト聞テ……（中略）

女院二位殿ニ憂目ヲ見セ奉ンモ心苦ケレハ、一マトモヤト思ソカシト宣ヘハ、肥後守サ候ハ、貞能ニハ暇給ハテトテ、手勢三百騎引分テ、都ヘ返入、西八條ノ燒跡ニ大幕引セ、一夜宿シタリケレトモ、還入給平家一人モ御坐サリシカハ、サスカ心細ウヤ思ケン、源氏ノ馬ノ蹄ニ懸シトテ、小松殿ノ墓掘セテ、アタリノ土ヲハ、賀茂河ニ流サセテ、骨ヲハ高野ヘ送り、世中憑シカラスト思ケレハ、思切テ勢ヲハ小松三位中將殿ノ方ヘ奉リ、我身ハ乗替一騎具テ、宇都宮ノ左衛門（尉）朝綱ニ打ツレテ平家ト後合ニ東國ヘコソ落行ケレ。

これも百二十句本、平松家本と殆ど同文である。最後の福原落の章でも、

若モ老タルモ、只後ヲノミ顧テ更ニ前ヘハ進モ不遣ケリ。各都ヲ歸ミレハ、霞メル空ノ心チシテ、煙ノミ心細クソ立登ル。其中ニ修理大夫經盛都ヲ顧給テ、泣々カウソ聞ヘケル。

故郷ヲヤケ野ノ原トカヘリミテ末モ煙ノ浪路ヲソ行

薩摩守忠度、

ハカナシヤ主ハ雲井ニワカルレハ宿ハ煙ト立チノホルカナ

誠ニ古郷ヲハ一片ノ煙塵ニ隔テ前途萬里ノ雲路ニ趣キ給フ人々ノ心ノ中コソ悲ケレ。

習ハヌ磯部ノ波枕、八重鹽路ニ日ヲ暮シ、入江漕行櫓ノシツク、落ル涙ニ諍テ袂モ更ニ不敢干、或ハ駒ニ鞭ウツ人モアリ、或ハ棹船者

モアリ、思々心々ニ落ソ行。

(中略) 半天ノ雲ニサカノホル。修理大夫經盛ノ嫡子、皇后宮亮經正行幸ニ供奉ストテ、泣々カウソノ給ヒケル。

御幸スル末モ都ト思ヘトモ猶ナクサマヌ浪ノ上カナ

平家ハ日數フレハ都ヲハ山河ノ程ニ隔テ、雲居ノヨソニソ成ニケル……。

とある。傍線を付した所は覺一本と順序が異りて、百二十句本、平松家本と同一である所であり、且つ又その詞章も百二十句本、平松家本と略同一である。最後の經正の歌は、鎌倉本以外の八坂流甲類本にはすべて載せてゐる歌で、盛衰記、長門本にこれを有するによつて、これらによる増補と認むべきであらうか。又「ハカナシヤ主ハ」の歌は、長門本は忠度の歌とし、盛衰記は經盛の歌とし、覺一本は教盛の歌としてゐる。従つて、「故郷ヲヤケ野ノ原ト」の歌は、長門本は經盛、盛衰記は忠度、覺一本は經盛の歌としてゐる。よつて八坂流甲類諸本は長門本の影響とも推察せられる。以上卷七の概要を示したのであるが、覺一本と順序の異なる所があつて覺一本よりも古いものより百二十句本、平松家本、屋代本などが成立したのではあるまいかと考察する可能性もある。といふのは、その記事の順序が、百二十句本、平松家本等の順序がやや妥當な所もありはしないかといふ觀もある。が今の處その様な傳本もないので客觀的なもののなき以上、覺一本をより古き形態として認めておきたい。即ち屋代本も、記事順序は、攝政殿沙汰、忠度都落、(經正都落、青山沙汰)維盛都落、聖主臨幸、池大納言都留、東國大名、平家落足の順序である。そして特にこの卷七は、百二

再び屋代本平家物語について

十句本、平松家本と殆ど同文といつてよいであらう。

卷八について述べよう。屋代本の卷頭に、

法皇ハ鞍馬ニ渡セ給ケルカ、コ、ハ猶都近ウシテ惡カリナントテ；とあるが他本と異なるのは改訂省略によるものであらうか。平松家本は覺一本に同一であるといへよう。山門御幸の章でも、

三種神器無事故都へ奉返入ト被仰下タリケレ共、平家用奉ネハ、大臣以下、參入シテ抑何レノ宮カ可付奉位ト議定有ケルトカヤ。高倉院ノ皇子先帝ノ外三所渡ラセ給ケリ。二宮ヲハ平家儲君ニシ奉ントテ、奉具テ、西國ヘ下向ス。

とあつて、傍点を付した所は覺一本と異り、百二十句本に同文である。平松家本は少しく異なる。又最後も、

紀伊守範光ハ四ノ宮ノ御爲ニハ奉公ノ人トソ見ヘタリケル。

同十日木曾冠者義仲、左馬頭ニ成テ越後國ヲ給ル。十郎藏人ハ備後國ヲ給ハル。各國ヲ嫌ヒ申ス。

とある。覺一本にある範光の落書の歌のないのは、八坂流甲類本すべてに共通の性格である。名虎の章では、

平家安樂寺へ參テ、歌讀連歌シテ、奉手向給ケリ。其中ニ本三位中將重衡、

スミナレシ舊キ都ノ戀シサハ神モ昔ヲワスレ給ハシ

ト泣々被申ケレハ、皆人袖ヲソヌラサレケル。八月廿日都ニハ四宮法皇ノ宣命ニテ、閑院殿ニテ御位ニ付セ給フ。無神靈寶劍内侍所踐祚ノ例是始トソ承ル。攝政ハ本ノ攝政近衛殿平家ノ聳ニテ坐々ケレトモ、西國へ御同心ニテ下ラセ給ハヌニヨテナリ。天ニ二ノ日ナ

シ、地ニ二ノ王ナシト申セトモ、平家ノ依憑行コソ、都鄙ニ二人ノ御門ハ坐々ケレ。三宮ノ御乳母ハ、泣悲ミ給ヘ共無甲斐ソ。帝王位ニ付セ給事、凡夫ノ兎角不依思、天照太神正八幡宮ノ御計ヒトソ覺ヘタル。昔シ文德天皇ハ…………。

以上は、殆ど百二十句本と差のない詞章で、傍點の示す如くであるが、平松家本は覺一本に近い詞章を有する。

文德天皇ハ天安二年八月廿三ニ隱サセ給フ。御子ノ宮達アマタ位ニ望ヲ懸テ坐々ケルカ、様々ノ御祈共有ケリ。小藁王子惟高ノ御持僧ニハ柿本紀僧正信濟トテ、東寺ノ一長者、弘法大師ノ御弟子ナリ。

惟仁親王家ノ御祈ノ師ニハ、外祖忠仁公ノ御持僧、惠亮和尚ソ奉ハラセ給ケル。御門隱サセ給シカハ、大臣以下參入シテ、抑何レ宮カ可奉即位ト公卿僉議アリ。所詮遂相撲節、任其勝負、可有即位ト議定畢。カ、シカハ兩方ノ驗者達、何レカ有疎略トソ見シ。而ルヲ惠亮ハ失タリト云披露ヲナス。信濟爰ニタユム心モヤ有ケム、惠亮ハ失タリト云披露ヲナシ肝膽ヲ摧テ被祈ケリ。

とあつて、他の諸本に比して極めて簡略である。この章の終は、

惠亮摧腦シカハ二帝位ニ即給フ。尊意振智劔シカハ、菅丞相收靈給フト傳ケレ。是法力トハ云ナカラ、天照大神、正八幡宮ノ御計ヒトソ覺タル。豊後國ハ刑部卿三位頼輔ノ國成ケレハ、子息頼經ヲ……。

とあつて、覺一本、百二十句本にある語を多く載せない。平松家本は覺一本と殆ど同文である。次に緒環の章は、

豊後國ハ刑部卿三位頼輔ノ國成ケレハ、子息頼經ヲ豊後ノ代官ニ被下タリ。三位頼經ノ許ヘ脚力ヲ下シ給テ、平家ハ宿報盡テ神明ニモ

奉被放…………。(中略)一味同心シテ、可追出平家、是頼輔カ非下知一院ノ勅定ナリトソ宣ケル。頼經朝臣此様ヲ當國住人緒方三郎維義ニ被下知。彼維義ハ…………。

とあつて、詞章は百二十句本に一致する所が多く、又、

女誠ニ肝膽モ身ニ不副、所從共喚キ逃去ヌ。件ノ大蛇ト申ハ、日向國ニ被崇給フ、高千尾大明神也。女歸テ無幾程産シテムケリ。取上テ見ハ、實ニ男子ナリ。是ヲ七歳マテソタテタレハ、早無比大力ニテソ有ケル。未ヲサナキ者ノ普通ノ男ヨリ勢モ大ニ高カリケリ。十歳ト申ス時、母方ノ祖父元服セサセテ、名ヲ大太トソ付タリケル。夏モ冬モ足手ニハ大ナル輝無隙絶サリケリ。人肝大太トソ申ケル。彼緒方三郎、肝大太カ五代ノ孫ナリ。カ、ル怖シキ者ノ末ナリケレハ、九國二嶋ヲモ一人シテ打取ハヤナント常ハヲウケナキ事ヲソ荒猿シケル。緒方三郎ハ國司ノ仰ヲ院宣ト號シテ、院宣ニ隨ハン者ハ、惟能ヲ先トシテ平家ヲ奉追出ト九國二嶋ヲ相催ケレハ、サモ可然者共皆惟義ニ隨付ク。平家今ハ内裏造ヘキ所カ有ト被尋ケル處ニ、此事共ヲ聞テ、如何スヘキトソ被騒ケル。平大納言ノ宣ケルハ…………。

とあつて、次の章、太宰府落に續く。傍點を付した所は覺一本と異りて百二十句本に一致する所である。太宰府落の章も、

故入道大相國保元平治兩度ノ朝敵ヲ平ケシヨリ以來、不次ノ賞ヲ給テ天下ヲ握掌ニ給シ時、其中ニハ鎮西ノ者共ヲハ…………。

とあり、百二十句本に近い詞章を有するのみならず、平家太宰府より柳浦へ逃げ行く條には、

山鹿へモ敵寄ルト聞ヘシカハ、海(士)ノ小舟ニ取乗テ、通夜豊前國柳浦ヘソ渡リ給フ。サル程ニ九月モ十日餘ニ成ニケリ。荻ノ葉向ノ夕嵐、獨マロネノ床ノ上、片敷袖モシヨレツ、深行秋ノ哀サハ、何クモトハ云ヒナカラ、旅の空コソ悲シケレ。十三夜ハ殊ニ名ヲ得タル月ナレ共、其夜ハ都ヲ思出ル涙ニ我カラ曇リツ、サヤカナラス。

薩摩守忠度、

月ヲ見シ去年ノ今夜ノ友ノミヤ都ニ我ヲ思ヒイツ覽

左馬守行盛、

君スメハ是モ雲井ノ月ナレト猶戀數ハ都ナリケリ

小松殿ノ三男左中將清經ハ月ノ夜心ヲスマシツ、船ノ屋形ニ立出テ、何事ニモ思入給ヘル人ニテ、心ヲ澄シヤウチャウ音取朗詠シテ、往方行末ノ事共宣ツ、ケ、都ヲハ爲源氏……閑ニ經讀念佛シテ遂ニ海ヘソ入給フ。男女泣悲メトモ無甲斐ソ。柳浦ニ内裏造ヘキ由議定有シカトモ、無分限ハ造ラス。宇佐ヘ行幸成テ、社頭ハ皇居トナル。廻廊ハ月卿雲客ノ居所トナル。庭上ニハ五位六位之宮人、四

國鎮西ノ兵共……(中略)

世ノ中ノウサニハ神モナキ物ヲ心ツクシニ何祈ル覽

大臣殿打驚キ胸打騒キ、何ニスヘキトモ不覺給。又長門ヨリ敵寄ルト聞シカハ、海ノ小船ニ取乗テ、海ニソ浮ヒ給ケル。長門國ハ新中納言知盛ノ國也ケリ。目代ハ……翠ノ黛亂レツ、其人トモ見給ハス。

とあつて、記事の順序が屋代本のみは異つてゐる。覺一本は、宇佐行

再び屋代本平家物語について

幸、九月十三夜、緒環、太宰府落、柳浦看、清經入水となつて居り、百二十句本、平松家本もこれと同一であるが、屋代本のみが右の如く、緒環、太宰府落、柳浦看、九月十三夜、清經入水、宇佐行幸となつてゐる。これは史實上はともかく多くの一方流本、八坂流甲類本が覺一本と同一である以上は、屋代本の特異な性格と認むべきであらう。又盛衰記によれば、太宰府落、柳浦看、宇佐行幸、清經入水、九月十三夜とあり、長門本では、宇佐行幸、四宮即位、緒環、太宰府落、九月十三夜、柳浦看、清經入水といふ順であつて、盛衰記、長門本等の影響があつたかも知れない。又屋代本には、九月十三夜の歌が、忠度の「月を見しこぞ」の歌のみは共通であるが、覺一本にある經盛や經正の歌がなく、行盛の、「君スメハ是モ」の歌は、覺一本では卷十の藤戸の章にある歌である。征夷將軍院宣の章も、

頼朝ハ都ニ上覽事モ輒カラネハ、乍居征夷將軍蒙宣旨、々々ノ御使ハ左史生中原安貞トソ聞ヘシ。安貞ハ家子二人郎等十人具タリ。壽永二年十月四日安貞鎌倉ヘ下着ス。右兵衛佐宣ケルハ、頼朝流人ノ身成シカ共、長武勇之名譽、仍今ハ乍居蒙征夷將軍之宣旨……

とあつて、これ又覺一本と異り、百二十句本と一致する詞章を有する。平松家本は覺一本と同文である。次の語も同様である。

一門源氏ヲ始テ、大名小名居流レタリ。安貞ヲ此ノ上座ニ被請、良有テ安貞兵衛佐ノ命ニ隨テ、寢殿ニ向フ。……御簾ヲ半ニアケテ對面アリ。布衣ニ立烏帽子ナリ。顔長ク勢ヒキカリケリ。容良優美ニシテ言語分明ナリ。兵衛佐宣ケル、平家頼朝威勢ニ恐テ落都ヲ。其跡ニ木曾冠者十郎藏人、我高名顔ニ責入テ官ヲ成加階ヲシ、剩ヘ國

ヲ嫌申候、ナルコソ、返々奇怪ニ覺へ候へ。サレトモ當時マテハ頼朝  
カ書狀ニハ、十郎藏人、木曾冠者ト申テ候へトモ、返事ハシテコソ  
候へ。奥ノ秀衡カ陸奥守ニ成……………。

傍點を付した所は百二十句本と一致する所である。猫間の章でも、  
都へ上リテ、院御所へ參テ、此様ヲ奏シケレハ、人々トモエツホニ  
入リ、君モ御感不斜。兵衛佐ハカウコソ目出フ坐スルニ、木曾ハ都  
ノ守護シテ有ケルカ、貌ハ吉男ニテ有ケレトモ、立居ノ振舞、物云タ  
ル詞ハ連、陋ナル事無限。

とある如く、百二十句本に一致する語もあるが、又百二十句本と異る  
所もある。

平茸ノ汁ニテ進タリ。木曾取箸食之。中納言モメサテハ惡カリヌヘ  
ケレハ、取箸、中ヲ彫食ス。木曾ハ同躰ニテ居タリケルヲ、殘少責  
成テ、猫殿ハ少食ニ御坐ケルヤ責給ヘトソ進ケル。中納言宣ヒアハ  
スヘキ事共多タ有テ、御坐タリケレ共、此ノ事共ニ細カニモ不宣、  
臆被返ケリ。中納言被返テ後、木曾モ出仕セントテ出立ケリ。官ヲ  
成、加階シタ(ル)者ノ何トナク直垂ニテ出仕センハ不可然トテ、  
始テ布衣取裝束ス。

然し傍點を付した如く基本的には百二十句本と同類と認むべきであ  
る。水嶋合戦の章も大略百二十句本に近い。妹尾最期の章以下は、覺  
一本と百二十句本との間に甚しい相違がある。然し百二十句本と大略  
同文と認むべきであらう。妹尾最後の章の一端を引けば、

倉光三郎不知前後、酔タリケルヲ、指殺テ頸ヲ取、家子郎等廿餘人  
有ケルヲ、一人モ不漏打テケリ、臆テ備前備中ニ脚力ヲ遣テ、兼康

コソ木曾殿之手ヲ免テ、是マテ下タレ。平家志思奉ラシスル殿原  
者、兼康ヲ先トジテ、木曾殿ノ下給フニ行向テ、一矢射ヨトソ觸レ  
タリケル。山陽道ノ兵共、五人持タル子ヲハ三人ハ平家ニ奉リ、馬  
鞍弓矢ニ至マテ奉タレハ郎等モナシ、物具モ無リケレ共兼康ニ被催  
テ、驅武者ナレ共、備前備中ニ二千餘人、備前國福立寺ナハテ、篠  
迫ヲ掘切テ、構城郭待懸タリ。

右の如く傍點のある所は百二十句本と殆ど同文である。次の室山合戦  
の章も、百二十句本と同文で甚だ簡略であり、次の如くである。

木曾ハ攝津國ヲ經テ京ヘイル。平家ハ新中納言知盛、一萬餘騎、千  
餘艘ノ舟ニ乗、播磨國ヘ押渡テ、室山ニ陣ヲ取ル。十郎藏人聞之、  
平家ト軍シテ木曾ニ中直リセントヤ思ケム、二千餘騎ニテ室山ニ推  
寄テ、一日戰暮ス。サレトモ平家ハ多勢、御方ハ無勢ナリケレハ、  
散々ニ打散サレテ引退ク。播磨ヲハ平家ニ恐レ都ヲハ木曾ニ恐テ、  
船ニ乘リ和泉國ヘ推渡テ、河内國長野城ニソ籠ケル。平家ハ室山ノ  
軍ニ勝テコソ彌大勢付ニケレ。

とある。鼓判官、法住寺合戦の章でも、一端を示せば、

十善帝王ニテモ坐セヨ、義仲降人ニハエコソ參ルマシケレ。是ハ鼓  
判官カ凶害ト覺ルソ。相構テ(鼓判官)トラヘテ様ヲ立申セトソ宣ケ  
ル。關々ハ被閉テ絶テ上ル物モナケレハ、冠者原カ無甲斐命イカン  
トテ時々片邊ニ付テ入取リセンハ、何カ避事ナラン。又王城守護シ  
テ有覽スル物カ、馬一疋ツ、飼テ乗サルヘキカ、イクラモアル田共  
少々カラセテ時々マクサニセンハ、強ニ法王ノトカメ給ヘキ様ハ無  
物ヲ。鎌倉右兵衛佐返聞ン處モ有、軍ヨウセヨ者共、今度ハ最後ノ

軍ニテアラムスルソト云ケル。木曾初メハ五萬餘騎ト聞シカ、皆北國へ落下リ、僅ニ三千餘騎ニソ成ニケル。木曾カ軍ノ吉例トテ、勢ハイクラモアレ、先七手ニ分ケテ、三手ニモ二手ニモ成計コトヲシケリ。今度モ三千餘騎ヲ七手ニ分ツ。樋口次郎兼光、五百餘騎ニテ、新熊野方へ搦手ニ廻ル。

とある。傍點のある所は覺一本と異り、百二十句本と一致する所である。又、

天台座主明雲大僧正モ御所ニ被籠タリケルカ、已ニ燃カ、ル。御馬ニ乗給テ、七條ヲ西へ落給カ射落サレテ、御頸取レ給ケリ。寺長吏八條宮モ籠ラセ給タリケルカ、如何カシタリケム被討給テ御頸取レ給ケリ。法皇ハ御輿ニ召レテ出御ナル。兵共御輿ヲ奉射ケレハ、御力者共御輿ヲ捨進セテ散々ニ逃ケリ。

とあつて、豊後國司刑部卿頼輔の事を、信濃次郎仲頼の次に述べるのも、百二十句本と同一である。甚しく覺一本との間に差があるので全文を引くべきであるが省略する。しかしこの巻八が百二十句本と極めて共通な性格と詞章を有し、兩者の關係を無視することが出来ないことは幾多の引用文によつて了解出来るであらう。これに對して平松家本巻八が殆ど覺一本と同文であることは、八坂流甲類本の成立を考へる上に極めて重要であつて、甲類本の成立の基にか、或は同時に覺一本の存在を假定しなければ説明がつかないのである。

巻九は缺であるが、八坂流甲類本の類本として、平松家本を見るならば、平松家本は、覺一本に近い本文を有し、僅に八坂流の語を含むといったものである。例へば、河原合戦の章に、

義仲最後暇申院御所六條殿馳參。御所法皇始進公卿殿上人、世只今失。木曾參候。又如何成惡行仕覺恐給處、東國兵七條河原打入由聞、木曾既門前及參、左門前取返。御所聽門差。六條高倉所見初女房有。

とあつて、覺一本と傍線を付した所が異なる。唯後の増補と認むべきものは、敦盛最後の章の次に、經盛と直實との間の往復の文書のあることで、百二十句本にもある。これは盛衰記、長門本にあるものでこれらの影響と認むべきであらう。従つて平松家本はむしろ八坂流の分出の根源ともいふべき性格を持つてゐると認むべきであらうか。百二十句本こそ八坂流本としては最も差異の甚しい詞章と云へよう。その一端を示せば、小宰相局の章を見るに、

太夫あつもりい上十人のしるし、みやこにいる。ゑつ中のせんしもりとしがくぐもみやこへ入。ほん三おの中將しげひらはいけどりにせられてわたされ給へり。はゝ二位殿これをきゝ給ひて、ゆみやとりのうちじにする事は、つねのならひなり。しげひらはこんどいけどりにせられて、いかばかりの事おもふらんとてなき給へば、きたのかた大なごんのすけも、さまかへんとの給ひけるを、うちの御めのとにてまします。さればとて、いかでか君をばすてまいらせ給ふべきとて、二おどのせいし申給ひければ、ちからをよばすあかしくらし給ふなり。ゑちぜんの三おみち盛のさぶらひにぐんだたきぐちとさきずといふものあり。きたのかたへまいりて、なくく申けるは、どのははやかたき七きかなかにとりこめられて、つみにうちじにせさせまし候ひぬ。かたきはあふみの國のちう人きむらのげん

さうとこそうけ給り候つれ。ときかずもやがてそこにて御ともうちじにをもつかまつるべふ候ひつるが、かねて御事をのみおぼせ候。われはひまなくいくさのにはむかふ。いかにもならんところにて、ごせの御ともつかまつらんとおもふべからず。ただいのちいきて御ゆくゑをも見つきまいらせよともおぼせの候ひしあひだ、かひなくいのちいきてこれまでまいりて候と申もあへずなきにけり。きたのかたきこしめしもあへず、おもひ入給へるきしよくにて、ふしづみてぞなかれける。

とある。この様な甚しい異文が容易に覺一本の如きものに發展改訂せられるであらうか。

卷十を見るに、巻頭の首渡の章も、その一端を示せば、小松三位中將ノ北方ハ、西國へ討手ノ向事ト聞度毎ニ、此度ノ軍ニ三位中將ノ矢ニ當テヤ死ンスラム、何ナル目ニカ合給スランナト、シツ心ナク被思ケルニ、平家ハ一谷ト云所ニテ殘少ク滅ヒテ、三位中將ト云人ノ生虜ニセラレテ上給フト聞シカハ、北方此人ハナレシ物ヲトテソ被泣ケル。

とあつて、傍點のある所は覺一本と異り、百二十句本に一致する所で、傍線を付した所は、屋代本の特異な語である。平松家本は覺一本と殆ど同文である。又一節を示せば、

三位中將モ通フ心ナレハ、都ニサコソ我ヲ無覺束思ラメ、頸共ノ中ニハ見ストモ、水ノ底ニモ沈ミヤシヌラントテコソ歎ラメ。未此世ニ長ラヘタルソト知セハヤトハ思ヘトモ、忍タル棲ヲ人ニ知センモサスカナレハトテ、啼々明シ暮サセ給ケリ。夜ニ成レハ餘三兵衛重

景石童丸ナト云者ヲ喬ニ召シ、都ニハ今我事ヲコソ思出ラメ、少キ者共忘ルトモ、人ハ忘隙アラシ、角獨只イツトナク明シ暮セハ、慰ム方ハ無レトモ、越前三位上ヲ見ニハ、賢クソ少キ者共ヲ都ニ留置タリケルトテ、泣々悦給ケリ。北方ハ商人ノ便ニ文ナトノ自ラ通ニモ、ナト今マテ迎ヘ取セ給ハヌソヤ。疾シテ迎ヘ取セ給ヘ。少キ者共モ不斜戀シカリ奉リ、我モ盡セヌ物思ニ長ラウヘキ様モナシナント細々ト書ツ、ケ給ケレバ、三位中將此御返事見給テモ、何事モ思入給ハス臥沈ミテソ歎カレケル。大臣殿モ二位殿モ聞之給テ、サラハ北方少キ人々ヲ奉迎取、一所ニテ何ニモ成給ヘカシト宣ヘトモ、我身コソアラメ、人ノタメ糸惜ケレハトテ、泣々月日ヲ被送ケルソ、セメテノ志ノ程モ顯レケル。サテモ可有ナラネハ、近フ召仕レケル侍ヘ一人シタテ、都ヘ上セ給ニ、三ノ文ヲソ被書ケル。先ツ北方ヘノ御文ニハ、一日片時絶間ヲタニモワリナフコソ思シニ、空キ日數モ隔リス。都ニハ敵充滿テ、我身一ノ置所タニアラシニ、少キ者共引具テ、サコソ心苦ク御坐ラメ、疾シテ奉迎取、一所ニテ何ニモナラハヤト思ヘ共、御爲心苦シケレハナント細々書テ、奥ニハ一首ノ歌ヲソ被書タル。

イックトモ知ヌアフ瀬ノモシヲ草カキヨク跡ヲ形見トハミヨ

とある。これは殆ど百二十句本と同文である。傍點のある所は覺一本にはない語である。平松家本は覺一本と同文である。この條は盛衰記にはなく、長門本、覺一本共に簡略であつて、百二十句本、屋代本の特異な詞章と認むべき所である。抒情的な性格を強調した點に注目すべきで覺一本よりも後出と認むべきであらう。次に内裏女房の章では、



三種神器ヲタニモ都へ入レ奉セ給ハ、西國へ可被返遣候。此趣ヲ申サセ給ヘト申ケレハ、三位中將、今ハカル身ニ罷リ成テ候ヘハ、一門ニ可面トモ不覺、女性ニテ候ヘハ、母ノ二位尼ナントヤ今一度見トモ思候覺。其外哀ヲカクヘキ者可有トモ不覺候。乍去院宣タニ被下候ハ、申テコソ見候ハメト宣フ。定長此様奏聞ス。法皇聽テ院宣ヲ被下ケリ。御使ニハ壺ノ召次花ヲ被下。三位中將ノ使ニハ古ヘ召仕レシ平三左衛門尉重國ヲソ被下ケル。

とあつて、屋代本は百二十句本と同じく、八島院宣、請文、戒文が先に來て、後に内裏女房の事を述べる。これも覺一本と大に異なる所である。但し、八嶋院宣の文はなく、百二十句本には載せてある。平松家本は覺一本とすべて同文である。請文の章を見るにも、

内侍所ノ御事、大臣殿ニ能々申サセ給ヘトソ被書タル。北方大納言典侍殿ヘモ御文奉ラハヤトハ被思ケレ共、私ノ文ハサノミ免ネハ、詞ニテ軍ハ常ノ事ナレハ、必去七日ヲ限トモ不知シテ、別奉シ事心憂ゴン覺候ヘ。夫妻ハ二世ノ契ト申セハ、後生ニテハ必ス生レ會奉ラント申ヘシトソ宣ケル。御使屋嶋ヘ下テ院宣奉ル。二位殿三位中將ノ文ヲ見給テ、此文推卷、大臣殿御前ニ倒伏テ宣ヒケルハ、何ノ様ヤ有ヘキ。早ク内侍所ヲ都へ入進テ、中將助見セ給ヘ。世ニ有ト思モ、子共ノ爲也。我ヲ助給ハント思給ハ、三位中將ヲ今一度見セ給ヘトソ被泣ケル。人々被申ケルハ、帝皇位ヲ持セ給フハ、偏ニ内侍所ノ御故也。是ヲ都へ還入奉ラハ、君ハ何ヲ憑テ世ニモ渡セ給ヘキ。何ニ君ヲモ捨進セ、多クノ一門ヲモ滅サントハ被思候ヤ覺ト面々ニ恨申サレケレハ、二位殿モ不及力給。平大納言、院宣ノ御使

花方ヲ召寄給テ……………。

とあつて、覺一本に比して極めて簡略であり、又前の詞章と同じく、傍點のある如く、百二十句本と殆ど同文である。平松家本は覺一本と同文である。請文の文は、百二十句本は略覺一本に近い文であるが、屋代本は、簡略である。

平家ノ人々、院宣ノ御請ニ被申ケルハ、抑頼朝者且君被知食候様、既死罪可被行候シヲ、故入道大相國慈悲之餘、流罪所申宥也。而忘其恩猥連凶黨、通盛卿以下貴家數輩一谷被討畢。蓋重衡卿一人其寬宥ヲ可悅哉。夫我君高倉天后腹第一皇子、受御讓給後、御在位四ケ年、雖無其失、東夷北狄成群入洛之間、且幼常母后御情最深、且外戚懷舊御志依不淺、行幸九劔、於無還幸、爭三種神器可致玉鉢給。曩祖平將軍貞盛追討相馬小次郎將門以來、代々禁闕奉守朝家、亡父數度、奉公思食忘者、君恭四國御幸可成敷。然又東國北國四國九國兵共、如雲集如雨起奉隨君、兩度歸舊都、欲濯會稽恥。其尙不叶者、鬼海高麗至天竺震旦者可悲哉。及人王八十一代、我朝御實終空成異國之物トソ被申タル。

平松家本の請文は右の屋代本と全く同文であるのは奇異な現象で、其様御請文被申妙候被申、此儀尤可然候、御請文被申 抑頼朝者：及人王八十一代吾朝御實終爲空異國物被書。二位殿中將御返事泣々書給、淚闌筆立思志指南細々書、重國賜。北方大納言典侍殿涙咽終御返事不宣……………浪形召士歟笑御坐。

とあつて、覺一本と叙述の順序の異なる所がある。次に戒文の章も、

黒谷ノ法然房トソ宣ケル。サテハトテ法然上人ヲ奉請。三位中將上人ニ奉出合被申ケルハ、南都ヲ滅シテ候事、世ニハ皆重衡カ所行ト申候ナレハ、聖人モ定テサソ聞召候覽。全フ重衡カ下知シタル事ハ候ハス。惡黨多ク籠テ候シカハ、何ナル者ノ師態ニテカ候ケン、火ヲ放タル折節風滋シウ吹テ、多クノ伽藍ヲ奉滅。末ノ露本ノシツクト成事ニテ候ナレハ、重衡一人カ罪ニテ、無間ノ底ニ沈ミ、永ク出離ノ其期アラシトコソ存候ヘトモ、皆人ノ生身ノ如來ト奉仰上人ニ生テ二度奉入見參タレハ、今ハ無始罪障悉ク消滅シ候ヌトコソ覺候ヘ。出家ハ免レネハ、不及力、本鳥付ナカラ受戒サセ給ヘウヤ候覽ト申サレケレハ、聖人泣々頂計剃テ、戒ヲ授給ケル。其夜ハ上人留給テ、終夜淨土莊嚴可觀様々ノ法文共ヲソ宣ケル。三位中將、ウレシカリケル善知識哉ト悦テ、年來常ニヲハシテ遊給ケル侍ノ本ニ預置レタリケル御硯ヲ召寄テ、是ハ入道相國ノ宋朝ヨリ渡テ祕藏シテ候シヲ重衡ニタヒテ候。名ヲハ松蔭ト申名譽ノ硯ニテ候也。御目ノ通シ所ニ置セ給テ御覽セン度ニ毎ニ重衡カ物ト思召出テ後生訪ハセ給ヘトテ奉給フ。上人是ヲ請取懷ニ入レ涙ヲ押テ出給フ。八條女院ニ木工右馬允政時ト云侍アリ……(内裏女房)。

とあつて、傍點を付した如く、百二十句本と殆ど同文である。平松家本は覺一本と同文である。屋代本、百二十句本には覺一本の如き、淨土宗の要を述べる專稱名號念佛の義が存しない。そして觀想の事を加へてゐる。この戒文の次に、内裏女房の記事が来るのである。これも、八條女院ニ木工右馬允政時ト云侍アリ。夕方ニ土肥次郎カ許ニ出來テ申ケルハ、此ハ本被召仕候シ木工右馬允ト申者ニテ候カ、八條殿

兼參ノ身ニテ候上、弓矢ノ本末ヲモ知候ハネハ、只汝ハ留レト蒙仰テ、西國ヘノ御共ヲ仕候ハス。何カハ苦ク候ヘキ。被御免候ヘカシ。夕去參テ何トナキ事共申慰メ進候ハント申セハ、土肥次郎、刀ヲタニモ指給ハスハ、苦カルマシト申間、太刀ト刀ヲ預テケリ。政時參タリケレハ、三位中將見給テ、イカニ政時カ、サン候トテ、其夜ハ留リ、終夜昔今ノ事共語連ケテ慰メ奉ル。夜モ既ニ明ケレハ、政時暇申テ歸ントス。

三位中將、サテモ汝ヲシテ見參シタリシ女房ノ行エハ何ニト問給フ。未御渡候カ、當時ハ内裏ニ渡ラセ給候ト承候ト申ス。サレハコソカ、ル身ニ成タレ共、其力事カ常ハ忘テ思出ルソ、如何スヘキト宣ヘハ、政時安キ御事候、御文ヲ給テ參候ハント申ス。三位聽テ文ヲ書テソ給ケル。

以上は百二十句本と殆ど同文である。平松家本は覺一本と同文である。以下屋代本は百二十句本とも異なる。一端を示せば、

古ヘ三位中將殿ノ御使ニ參リ候シ政時コソ參テ候ヘ。御文ノ候ト申セハ、三位中將ノ文ト云カウレシサニ、人シテモ取給ハス、自ラ出テソ取レケル。アケテ見給ヘハ、細々ト書テ、奥ニハ一首ノ歌ヲソ被書タル。

涙河ウキ名ヲ流ス身ナレトモ今一シヲノ逢瀬トモ哉

北方御返事ニハ、

涙河ワレモ憂名ヲナカストモ底ノミクツト友ニ成ナン

政時給之走歸リ中將ニ奉ル。中將二三日ハ只此文ヲ顔ニ當胸ニ當テソ被慰ケル。

百二十句本は略覺一本に近い詞章である。平松家本は百二十句本と殆ど同文である。一章の前半、後半にかうした性格があることは、百二十句本と屋代本、覺一本と平松家本との前後關係を推斷すべき根據の一つとならう。屋代本が特異性が多いのである。

海道下の章では、百二十句本と略同文であるが、屋代本では、

舊里モ戀シクモナシ旅ノ空都ノ終ノ栖家ナラネハ

都ヲ出テ日數經レハ彌生モ半過ナントス。遠山ノ花ハ殘ノ雪カト見ヘテ、浦々嶋々霞渡リ、往方行末思ツ、ケ給ニ、如何宿業ノ口惜サソト悲給ヘトモ無甲斐ソ。薦鷄冠木、木葉茂リ心細キ宇都山、手越ヲ過テ行ハ、北ニ遠サカテ雪白キ山有、アレハ何クヤ覺ト問給フ。甲斐ノ白根トソ申ケル。其時三位中將、

惜カラヌ命ナレトモ今日マテニツレナキカキノ白根ヲモミツ。

とあつて、池田の宿の侍従の歌がなく（百二十句本はある）前々の章と似た性格がある。平松家本はこの章に一部屋代本、百二十句本に似る所がある。千手前の章は、前半は、海道下の次に、頼朝重衡對面が述べられて、

無量罪業ニテコソ候ラメト宣ヘハ、三位中將ノ給ケルハ、一門ノ運盡テ既ニ都ヲ落シ上ハ、骸ヲハ山野ニ曝シ江海ニモ可沈トコソ存セシカト、是マテ下ルヘシトハ思モヨラス、殷王ハ捕ハレ邑代ニ、文王ハ捕虜里トテ、弓矢取ル身ノ敵ノ手ニ捕レテ滅サル、事、昔ヨリ皆有事也。重衡一人ニ限ラネハ、今更可恥ニハアラネトモ、先世ノ宿業コソ口惜ク候ヘ。只芳恩ニハ疾々可被刎首ト斗宣テ、其後ハ物ヲモ不宣。……十王ノ手ヘ渡ル覺モ角ヤト覺テ哀ナリ。

再び屋代本平家物語について

小松三位中將惟盛ハ我身ハ屋嶋ニ在ナカラ……。

とある。百二十句本、平松家本は大略覺一本に近いが、屋代本は極めて簡略である。後半は別冊拔書にある。平松家本は覺一本と同文である。次に横笛の章は、百二十句本は覺一本に比して横笛の素性など増補の語が多いが、屋代本は覺一本に近い所があり、又簡略である。

瀧口入道胸打騒ギ、障子ノ隙ヨリ臨テ見ハ、尋カネタル景氣、誠ニ勞敷、何ナル道心者モ心弱ク思ツヘシ。聽テ心モ亂ヌヘウ思ケレハ、急キ人ヲ出テ、全フ是ニハサル人ナシ、門違ニテソ候覽トテ、心勁ウモ瀧口入道遂ニ出合ハテソ歸シケル。横笛歸テ、聽テ様ヲ替タル由ヲ聞テ、瀧口入道一首歌ヲソ送りケル。

ソルマテハ恨ミシカ共梓弓マコトノ道ニイルソウレシキ

横笛カ返事ニ、

ソルトテモ何カ恨ミシアツサ弓引ト、ムヘキ心ナラネハ

其思ノ積ニヤ、横笛無程死ニケリ。瀧口聞之、主ノ聖ニ向テ申ケルハ、是モヨニ閑ニテ念佛ノ障碍ハ候ハネトモ……。

とある。平松家本は覺一本には近いが、

障子間花見、寝汚髪隙隙涙所堰、今夜寢哉覺覺面疲消息、尋豫氣色、如何成道心者心弱成。

とある中、傍線の示す所は百二十句本に類する所で、この點は平松家本が百二十句本と關係のあると認められる所である。

堂々巡禮シ奥院ヘソ參リ給フ。大師ノ御廟ヲ拜シ給ニ、心モ詞モ不被及。抑延喜御門之御時御夢想ノ告アテ、檜皮色ノ御衣ヲ被送ケルニ……期氏頭春風給覽モ角ヤトソ覺ヘタル。高野山ハ去帝城二百

里、離境里無人聲、瓦ニ松生垣ニ苔ムシテ星霜久ク覺タリ。御入定ハ承和二年三月廿一日寅刻ノ事ナリケレハ…………。

とあつて、傍線のある如く、記事の順序は百二十句本に一致するが、百二十句本には、

大しの御べうをはいし給ふに、心もことばもよばれず。大たうと申は、なんてんのでつたうをへうして、たかさ十六ちやうのたほうなり。こんだうと申は、とそつのまにでんをへうして四十九あんにつくられたり。上には千たいのあみだによらい、中そんはやくしの十二しん、せんじゆの廿八ぶしゆ、みなこれ大しの御さくなり。そもくゝゑんぎのみかどの御とき御むさうのつげあり。ひはだいのぎよいをかか御山へをくらけれに…………かくやとぞおぼえたる。かうやさんと申はていしやうをさつて…………かきにこけむして、せ(い)さうひきしくおぼえたり。せつほうしゆゑのにはもあり、さぜんのうちやうのまどもあり。ねんぶつ三まいのうてなもあり。天おくよりまかかしのわたされて、大しさうでんし給ひし七ぢうのけさもあるとかや。御にうちやうはしうわ二年三月廿一日とらのこの事なれば、

とある。傍線のある所は屋代本にはない。平松家本は覺一本と同文である。

維盛出家の章にも、  
與三兵衛涙ヲ押拭、申ケルハ、親ニテ候、餘三左衛門景康ハ、平治ノ合戰ニ二條堀河ニテ故大臣殿御命ニ代進テ、源氏惡源太力手ニ懸リ被討候ヌ。重景其時二歳、母ニハ七歳ニテ後レテ候。哀無サント申

者モ候ハサリシニ、故大臣殿、アレハ我命ニ代リタル者ノ子ナレハトテ、御不便ニセサセ坐シ、九ノ年君ノ御元服候シニ、同ク本鳥ヲ取擧ラレ進テ、盛ノ家ハ五代ニツク、重ノ家ハ松王ニタフトテ、重景トハ名乗ラセサセ御坐候也。童名ヲ松王ト申候ケル事モ、生テ五十日ト申ニ、父カ懷テ參テ候ケレハ、(此いゑをこまつといへば、なんちがこをばいはひてとて)名ヲ松王ト付テ坐テ候ケル也。御元服ノ後ハ、取分君ノ御方ニ候テ、今年己ニ十九年ニ成候ト覺テコソ候へ。上下ノ隔ナク遊戯進セテ一日片時モ立離進セ候ハス、故大臣殿此世ノ事ヲハ皆思召拾テ、一事モ仰ノ候ハサシカ、重景ヲ近フ召テ……とあつて、傍點にて示す如く一部は百二十句本と一致して覺一本と異なるが、又百二十句本よりは景康討死の條などは簡略で、百二十句本は平治物語などによつて補つたと認むべき所がある。平松家本は、覺一本と殆ど同文であるが、

重景被付進候。又松王被付召候事、忌晴五十日申候、父抱參、家小松云祝付、松王被付進候、親好死、吾身冥伽存候。

とあつて、傍線のある所は百二十句本、屋代本に類する所であるが、その他は一方流本に類する。この點は注目すべきで、若し屋代本が古いとならばその性格がもつと多く平松家本に出現すべきであらう。詳細に見ると百二十句本などと僅かに類似する語が所々に點在するので、むしろ平松家本が屋代本よりも古い形態を示すといふべきであらう。

眞實報恩者ト三度唱テ剃下シ給ニモ、古郷ニ留メ置シ北方ニ、此有様ヲ見ヘモシテ、角ナラハ思事アラシト宣ケルソ糸惜キ。三位中將モ餘三兵衛モ同年ニテ今年廿七、石童丸ハ十八ニ成ケル。三位中

將舍人武里ヲ召テ、汝ハ我終ヲ見ツル物ナラハ、聽テ都へ上レトコソ思ツレトモ、屋嶋へ渡レト思フ。其故ハ都へ行テ、此世ニ無キ者ト申ナラハ、聽様ヲ代形ヲヤツサンスル事モ不便ナリ。少者共カ歎カン事モ無慙也。屋嶋ニ殘居タル侍共カ、無覺束思覺モ心苦シ、抑唐草ト云鎧小鳥ト云太刀ハ當家嫡々相傳テ惟盛マテハ九代ニ當ル。彼鎧ト太刀ハ新三位中將殿ニ預置タリ。若代立直テ平家ノ代ニ成事アラハ、終ニハ六代ニタヘト申ヘシトソ宣ケル。聽瀧口入道モ爲善知識ノ被召具、山臥修行者ノ様ニテ紀伊國三東へ出テ、三東王子ヲ始テ、藤代王子以下王子々々伏拜ミ參給ニ、千里ノ濱ノ北岩代ノ王子ノ邊ニテ狩裝束シタル武士七八騎カ程合タリケリ。

とある。これは一部は傍點のある如く、百二十句本とよく一致するが百二十句本よりも簡略で後の形態であらう。平松家本は覺一本に同じ。次に熊野參詣の章を見るに、百二十句本は卷四、無文と重複する語があるが、屋代本にはなく、又、

アノ殿ノ事ソカシ、安元ノ御賀ニ、其比十八カ九ニテ、櫻ヲカサヒテ青海波ヲ被舞シニ、當家ニモ他家ニモ貞ヨキ殿上人ト撰、垣代ニ立給ヘリ。階下ニハ關白以下ノ大臣公卿多ク著給タル中ニモ、父ノ小松殿ノ大將ニテ被著タリシニハ、又人可立並トモ見サリシ物ヲ、嵐ニ匂フ花ノタクヒ、風ニ翻ル舞ノ袖、照一天ヲ耀地程ナリキ。アハヤ大臣大將只今待懸給ヘル人ヨトコソ、我モ人モ申シニ、移レハ替ル世ノ習コソ悲ケレトテ、涙ニ咽ケレハ、諸ノ僧共モ皆打衣ノ袖ヲ絞リケル。三ノ御山參詣無事故遂給ヌレハ……。

とあるのも、百二十句本と殆ど同文である。覺一本に比して簡略であ

る。然し平松家本は、覺一本と殆ど同文であるが、妄想露不結、何々無不催哀、通夜祈念被申中、古郷留置妻子安穩被申悲。

とある。傍線のある所は屋代本、百二十句本と一致する所で、中の次に脱文がある。又、「濤濯煩惱垢」とか、「此三位中將都能見知奉思」とか、屋代本、百二十句本と本文中に一致する語があるのは、恐らく八坂流の本文の古態を示すもので、この逆は屋代本、百二十句本の本文を改訂する際どうしてこの様な語のみを残したか説明のつき様がない。かうした本文が成立つには一方流の本文が確立してゐて、これによつて平松家本の如き本文が自在に出現出来るといふべきである。

比ハ三月廿八日ノ事也ケレハ、春己ニ暮ナントス。海路遙ニ霞渡テ、哀ヲ催ス類也。奥ノ釣船ノ浮又沈ヌ波ノ底ニ入様ニ見ルモ、我身ノ上トヤ被思ケン、歸鴈ノ雲井ニ音信行ヲ聞給フニモ、舊里ヘ事傳セマホシク、蘇武カ胡國ノ恨マテ思殘セル方ソナキニ、三位中將西ニ向ヒテ手ヲ合せ、高聲ニ念佛唱ヘ給カ、念佛止テ、瀧口入道ニ宣ケルハ……生者必滅會者定離ハ浮世ノ習ニテ候ヘハ、縦遲速コソ候共、送レ先立御別遂ニナウテシモヤハ候ヘキ。第六天ノ魔王ハ欲界ヲ我物ト領シテ……。

とあつて、傍點の如く百二十句本に一致し、覺一本よりも簡略である。平松家本は、殆ど覺一本と同一であるが、

今跡歸鴈雲井音信行聞給古郷事傳爲慾、蘇武胡國恨及思殘限。

とあり、傍線の所のみ屋代本、百二十句本に一致し、又、「後前御別終無可候。第六天魔王……」とあつて、一方流の本文を一部缺くこと

は、屋代本、百二十句本と同一である。これも前の章と同じく、屋代本より覺一本を成立させるとすれば、大きな改訂をして僅かの語のみがそのまま残るのも不可解であらう。

サレトモ一度依發菩提心ヲ、終焉ノ時往生スル事ヲ得タリキ。御先祖平將軍ハ、滅將門ヲハケ國ヲ討隨ヘサセ給シヨリ以來、代々朝家ノ御固ニテ、嫡々九代ニアタラセ給ヘハ、君コソ日本國ノ將軍ニテモ坐マスヘキニ、御運盡キサセ給ヌレハ不及力。サレトモ出家功德ハ莫大ナレハ、先世罪業皆滅シ給ヌラン。百千歳百羅漢ヲ雖供養スト不及出家功德ニハトコソ申候ヘ。縱人有テ建七寶塔婆ヲ事、高サ雖至三十三天ニ、一日出家ノ功德ニハ不可及。一子出家スレハ七世ノ父母皆成佛道トコソ申候ヘ。罪深キ頼義依心勁ニ遂往生素懷、指ル罪業坐マサス。ナトカ君ノ淨土ヘ參ラセ給ハサルヘキ。彌陀如來ハ一念十念ヲモ不擇、十惡五逆ヲモ導ト云悲願坐スマス也。彼願力ニ乗センニ疑ヤハ候ヘキ。廿五菩薩ハ妓樂調詠シテ、排法性御戸ヲ、只今可迎給。今コソ……。

これも同様で百二十句本と一致する所である。平將軍の事は覺一本にはない。三日平氏の章でも、百二十句本と一致して、

武里屋嶋ヘ參テ、新三位中將以下ノ人々ニ此由申セハ、故大臣殿ニ後進セテ後ハ、高山深海トコソ憑ミ奉テ有ツルニ、左様ニ成給ケン事ノ悲サヨトテ、啼歎給ケリ。大臣殿モ二位殿モ是ヲ聞給テ、池大納言ノ様ニ二心アテ都ヘ登リ給ヘルカトコソ思タレハ、サハ無リケリトテ涙ヲ流シアハレケリ。同四月一日鎌倉前右兵衛佐頼朝正二位下ニ叙ス、本ハ從五位下也シカハ、五階ヲ越給コソ目出ケレ。同三

日、崇徳院可奉崇神トテ、昔保元ニ合戰ノ有シ大炊御門ノ末ニ社ヲ造テ、宮遷有。賀茂祭以前ナレ共、法皇ノ御計ニテ内ニハ不披知。其比池大納言頼盛關東ヘコソ被下ケレ。其侍ニ彌平左衛門宗清ト云者有。頻ニ暇申テ留ル。大納言ナト汝ハ遙々ノ旅ニ趣クニ見送ラントハ云ソト宣ヘハ……。

とあり。以下も百二十句本に一致して覺一本とは甚しく相違する。平松家本は崇徳院以下、頼盛關東下向の事は百二十句本、屋代本と同文である。これは極めて重要な性格であらう。

定テ御共ニ下候ハンス覽ト、見度ニ戀敷思候ツルニ、アハレ此者ハ猶意趣ノ候ニコソトソ宣ケル。所知タハントテ、下文共多ク成ヲキ、大名小名馬ヒカントテ用意シタリケレトモ、下ラサリケレハ、人不得心思ヘリ。大納言ハ本知給シ庄園私領一所モ相違有マシキ由被申ケルニ、所領共アマタ奉ラル。六月六日都ヘ歸上リ給ニ、大名小名我劣トラント面々ニモテナシ、鞍置馬タニ及五十足ニ、生テ上給ヘルノミナラス、ユハシカリシ事共ナリ。(以上平松家同文) 大覺寺ニ隱居給ヘル、小松三位中將北方ハ……。 (平松家本、三日平氏はなく維盛北方の事は覺一本に同じ)。

次の藤戸の章も殆ど百二十句本と同文である。

其比平家爲追討ノ荒手ニ萬餘騎ヲ都ヘ被差登。其上自鎮西菊池原田松浦黨五百餘艘ノ舟ニ乗テ、屋嶋ヘ寄ストモ聞ヘケリ。此ヲキキ彼ヲ聞ニ付テモ、心ヲ迷ハシ魂ヲ消スヨリ外ノ事ソナキ。サル程ニ七月廿五日ニモ成ヌ。去年ノ今日ハ都ヲ出シ日ソカシトテ淺猿ウアハタ、シカリシ事共、思出モ語出シテ、泣ヌ咲ヌソセラレケル。

同廿八日都ニハ、新帝有御即位。大極殿ニテ可有カリシヲ、後三條院延久ノ嘉例ニ任スヘシトテ、大政官廳ニテ被行（平松家本同文）。とある。覺一本よりも簡略である。行盛の歌、「君住めば」の歌はな

く、一方本にない詞章として、

平家ノ船へ乗移々々火出程ニシ、戰ケル。源氏ノ兵、上野國住人ワミノ八郎行重ト名乗テ、平家ノ兵讃岐國住人、カベノ源次ニ引組テ上ニ成下ニ成、コロヒアフ處ニ、カベノ源次カ郎等出來テ、ワミノ八郎ヲ三刀指テ頸ヲ取ル。ワミノ八郎カイトコニ、小林カ郎重高ト名乗テ、カベノ源次ニ引組テ驍テ海ヘソ入ニケル。小林カ郎等ニ黒田源太ト云者主ヲ失テ、彼方此方ヲ見廻セハ、水ノ泡立ケル所アリ。

熊手ヲ差入テ振タリケレハ、ムスト取付タリケルヲ、引上テ見レハ、敵也、主ハ敵カ腰ニ懷付テソ上タル。主ヲハ船ニ引乗テ氣ヲツカセ、敵ヲハ驍テ驍ニ推付テ頸ヲカク。辰寇ニ矢合シテ一日戰暮ス。夜ニ入テ平家叶ハシトヤ思ケム、我前ニト船ニ乗押浮ヘ四國ノ地ヘ渡覽トス。源氏連テ攻ヘケレトモ、船ナカリケレハ不及力。兒嶋ノ地ヘ打上テ馬ノ息ヲソ休ケル。昔ヨリ河ヲ渡ス軍ハアレトモ、とある。傍線の所は一方流本にない所で、百二十句本、平松家本と一致する所である。これは盛衰記、長門本にあるもので、これらの影響と認むべき所である。「一日……」以下は平松家本は一方流本に略一致する。以上によりて卷十を概観するに、屋代本は百二十句本と殆ど同文といふべきであるが、百二十句本よりも簡略な所がかなりあつて、それだけ覺一本よりも遠い詞章といふべきである。しかしこれによつても屋代本が百二十句本と密接な關係にあることは明白である。決

して屋代本のみを以て古態であるといふべきでないことが理解せられるであらう。又平松家本の存在によつて、平松家本が百二十本よりも八坂流のより古い形態を示すものであることも注目すべきであらう。卷十一も卷十に劣らず覺一本との差は甚だしい。又各章に就いて顯著な所を引用して、その詞章を明示して行かう。逆櫓の章でも、

屋嶋ニハ……送仰テ三年ニモナリス。然ルヲ又東國兵共攻來ト聞ヘシカハ、男女ノ公達指ツトヒ只泣ヨリ外ノ事ソナキ。同二月十三日都ニハ廿二社ノ官幣アリ。是ハ三種神器無事故都ヘ返リ入給ヘトノ御祈念ノタメトソ覺タル。同十四日參河守範賴、平家追討タメニ七百餘艘ノ舟ニ乗テ、攝津神崎ヨリ山陽道ヘ發向ス。九郎大輔判官義經、二百餘艘ノ船ニ乗テ、東河渡部ヨリ南海道ヘ趣ク。同十六日卯魁渡部神崎兩所ニテ……。

とあるのも覺一本と異り、傍點のある如く百二十句本、平松家本と殆ど同文である。平松家本は脱文がある。勝浦付大坂越の章も、

判官近藤六ヲ召テ、自是屋嶋ヘハ何程ノ道ソ。二日路候。サラハ敵ノ知ヌ前ニ寄ヨヤトテ、懸足ニナツ步セツ打程ニ、其日ハ阿波國坂東坂西打過テ、阿波ト讃岐ノ堺ナル大坂越ト云山ヲ、明レハ讃岐國曳田ト云所ニ打下テ、入野白鳥高松郷打過々々寄給ニ、山中ニ蓑笠背負タル男一人行ツレタリ。判官トコノ者ソト問セラレケレハ、京ノ者テ候ト申ス。トコヘ行ソ、屋嶋ヘ參候。屋嶋ヘハトノ御方ヘ參ルソ、都ヨリ女房ノ御使ニ、大臣殿ノ御方ヘ參リ候。是モ阿波國ノ御家人ニテ有カ、屋嶋ヘ被召テ參ナリ。此路ハ始ニテ無案内ナルニ、和殿案内者セヨカシ。是ヘ度々下テ候シ間、案内ハ知テ候ト申

ス。何事ノ御使ソ。下臈ハ御使仕ル斗ニテコソ候ヘ。爭カ何事トハ知候ヘキト申セハ、實ニモトテ、又暫ク有テ繻クハセナントシテ、去ニテモ何事ノ御使トカ聞ト問ヘハ、別ノ子細ヤ候ヘキ。當時河尻ニ源氏共多ク浮ヒテ候事ヲ被申候コサンメレ。サソ有覽其文トレトテ奪取シヤツ縛レトテ縛ラセテ、路邊ナル木ニ結付テソ被通ケル。判官此文ヲ見給ヘハ、實ニモ女房ノ文ト覺シクテ……。

とあつて百二十句本、平松家本と殆ど同文である。嗣信最期の章も、白錄付タル武者六騎惣門ノ前ニ步セテ出來タリ。眞前ニ進タルハ、大將軍ト見タリ。赤地直垂ニ紅裾紺鎧着テ、金作ノ太刀ヲ佩、切文矢負、塗籠、藤弓眞中取テ、黒馬ノ太逞キニ、金覆輪鞍置テソ乗タリケル。鎧、踏張り立上テ、一院御使、大夫判官義經ソヤ。平家ニ我ト思ン人々ハ進出ヨ。見參セントソ名乗ケル。コハ何ニ大將軍ニテ有ケルソヤ。射取ヤ々トテ、差矢ニ射船モ有、遠矢ニ射ル舟モアリ。連テ名乗ハ、田代冠者信綱、金子十郎家忠……。

とあり、これも傍點の如く、百二十句本、平松家本と殆ど同文といへよう。那須與一の章も、

奥ニハ平家一面ニ船ヲ並テ見物ス。後ヲ見レハ江ニハ御方源氏轡ヲ並テ引ヘタリ。何レモ晴ナラスト云事ナシ。猶モ風鎮ラサレハ、扇座敷ニモ不定。與一何ニスヘキ様モ無クテ、暫ク目ヲ塞キ仰天ニ祈念申ケルハ、歸命頂禮御方ヲ護ラセ御坐ス、正八幡大菩薩、殊ニハ我國ノ神明日光權現、宇都宮大明神、々々々ハ氏子一人ヲハ千金ニモ不可替トコソ御誓候ナレ。是ヲ射損候物ナラハ、弓切折テ海ニ沈メ大龍ノ眷族ト成テ、永ク武士ノアタト成ンスル候。今一度本國ヘ

迎ント被思食候ハ、扇ノマ中射サセ給ヘト心中ニ祈請シテ、目ヲ見開ヒタレハ、風少シ止テ扇射ヨケニ見タリケリ。

とある。これも百二十句本、平松家本と殆ど同文である。傍線のある所は百二十句本にはない所である。弓流の章も、

上總惡七兵衛景清ト名乗捨テソ歸ケル。判官是ヲ見給テ、惡七兵衛ナラハ漏スナ射取レヤトテ、喚テ懸給フ。三百餘騎連テカク。平家方ニモ見之、惡七兵衛討スナトテ、小船百餘艘斗落ヘ寄ス。楯共雖羽ニ築向ヘテ、源氏寄ヨト招懸タリ。源氏三百餘騎馬ノ蹄ヲ立並喚テカク。亂合テ暫シ戰フ。平家ノ兵ハ皆徒立也。楯共散々ニ被懸散テ引退ク。

とある。志度合戰の章も、

夜討ニタニモシタリセハ、源氏其夜皆滅ナマシ。是モ平家ノ運ノ極處ナリ。平家モ屋嶋ヲ引退キ當國ノ内志度道場ニソ被籠ケル。同十九日判官伊勢三郎ヲ召テ、阿波民部カ嫡子田内左衛門教能河野ヲ攻ニ伊與國ヘ越タンナルカ、此ニ軍有ト聞テ、今日ハ定テ馳向覽、大勢入立テハ叶マシ。汝行向テ吉様ニ誘ヘテ召テ參レト宣ヘハ、伊勢三郎サ候ハ御幡ヲ給テ向候ハント申ス。尤モサルヘシトテ白幡ヲコソ給ケレ。其勢十六騎ニテ向カ、皆白裝束ニテ向ケリ。兵共見之ヲ、三千騎カ大將軍ヲ白裝束十六騎ニテ向ヒ、生虜ニセン事難有トソ候ケル。如案田内左衛門屋嶋ニ軍有ト聞テ馳參ル。路ニテ義守ニ行合タリ。白幡サト差舉タリ。アハヤ源氏ヨトテ赤旗指揚タリ。伊勢三郎田内左衛門ニ步マセ近付テ申ケルハ……。

とある如く、傍點の示す如く百二十句本、平松家本に殆ど一致する。



鷄合壇浦合戦の章も、

平家ハ長門國引嶋ニ着ク。源氏モ當國赤間關ニ着トソ聞ヘケル。源氏ノ船ハ三千餘艘、平家ノ船ハ千餘艘、平家ノ船ハ中ニハ唐船モ少々ケルトカヤ。

とあつて、熊野別當堪増河野四郎通信の事は田内左衛門事の次に述べてゐる。百二十句本、平松家本と一致する。詞章も又殆ど同一である。但し平松家本は「引嶋着、源氏勢重……」とあつて脱文がある。遠矢の章も、

和田小太郎義守船ニハ乗ラテ陸ニテ戦ケルカ、三町力中ノ物ヲ射ハツサス、三町餘カ奥ニ浮ヒタル新中納言ノ船ヲ射越テ、白篋ノ大矢ヲ一ツ浪ノ上ニソ射浮タル。和田小太郎扇ヲ揚テ、其矢此方ヘ返給ハラントソ招タル。新中納言此矢ヲ召寄テ見給ヘハ、白篋ニ鵠羽簞タル矢ハ十三束三伏有ケルカ、沓巻ヨリ上ミ一束置テ、三浦和田小太郎平義守ト漆ヲモテソ書タリケル。伊與國ノ住人、新居紀四郎親家ヲ召テ、此矢射返セト宣ヘハ、(異)議モ不申、我弓ニ取テ番射タリケリ。是モ奥ヨリ三町アマリヲツト射渡シ、和田小太郎カ弓手ハ肩ヲ篋打ニウツ繼テ引ヘタル武藏國住人石迫太郎カ小脇ニ沓巻マテコソ射コウタレ。

とあり、覺一本と異り、傍點の示す如く甚しい差があるが、百二十句本、平松家本と殆ど同文である。

阿波民部成能ハ、此三ケ年ノ間平家ニ能ク忠ヲ盡シタリケレ共、嫡子田内左衛門ヲ源氏ノ方ヘ生虜ニセラレテ、恩愛ノ道ノ悲シサハ、今一度見ト思ケレハ、忽心替シテ赤録シ切捨テ、源氏ノ方ヘソ付ニケル。平家ハ唐船ニハ次様ノ者ヲハセ、源氏定テ唐船ヲソ責ンスラ

ム、兵船ニ可然人々乗テ、源氏ヲ中ニ取籠テ討ント支度シタル處ニ、成能返忠シテ唐船ニハ可然人々モ乗給ハス、矢タウナヒニ兵船ヲ責ヨトソ教ケル。其時兵船ヲ指合テ散々ニ射ル。

とあるのも同様である。次の先帝身投の章も、

二位殿ハ是ヲ聞給テ急キ先帝ヲ懷奉リ、帶ニテ御身ニ二所勁ク結付奉リ、後ノ世マテモ君ノ御守成ヘシトテ、實劔ヲ腰ニ指シ、神璽ヲ脇挟ミ、練袴ノソハ高クハサミ、純色ノ(二)衣打カツキ、絃ヘソ出給ケル。我ハ君ノ御共ニ參ルナリ。女也トモ敵ノ手ニハカ、ルマシキノ。御惠ニ隨ハント思人々ハ、急キ御共ニ參給ヘヤト宣ヘハ、國母ヲ始進セテ、北政所、廊御方、帥典侍、大納言典侍以下ハ女房達送奉ラント喚叫給ケリ。先帝ハ今年八歳ニ成セ給フ。御歳ノ程ヨリモ遙ニヲトナシク、御クシ黒クユラ々々ト御背過サセ給ヘリ。アキレサセ給ヘル御様ニテ、此又何チヘソヤニセト仰ラレケル御詞ハ未タ終ニ、二位殿ハ西方淨土ヘトテ、海ニソ沈ミ給ケル。哀哉哉無常春風花姿ヲ誘引奉リ、悲哉分段ノ荒キ浪龍顔ヲ沈メ奉ル。

とあるのも、百二十句本、平松家本と殆ど同文である。覺一本に比して甚だ簡略である。次の能登殿最期の章も、

能登前司ハ矢種皆射盡シ、今ハ最後ト被思ケレハ、赤地錦直垂ニ黒糸威鎧着テ、源氏ノ船ニ乗移リ、白柄大長力莖短カニ取テ、薙給ニ、兵多ク亡ケリ。新中納言是ヲ見給テ、使者ヲ立テ、無全能登殿ノ仕態哉。餘リニ罪ナ作給ソ。サレハトテ可然者共ニテモナシト宣ケレハ、能登前司、サテハ大將軍ニ組トコサンナレトテ、其後ハ武者共ニハ目モカケス、兵共ノ中ヲ突分々々、源氏ノ船ニ乗移々々、九郎

判官ヲ尋給フ。何カシタリケム、判官ノ船ニ乗移ラレタリ……。とあるのも百二十句本に近く、平松家本と同文である。内侍所都入の章も、

同十六日九郎判官大臣殿以下、生虜共相具シテ、播磨國明石ノ浦ニソ着給フ。其夜月(面)白クシテ、秋ノ空ニモ不劣、女房達盡ヌ物思ハ中ニモ思出ハ有ケリ。昔ハ名ニハミ聞シ、明石ノ月ヲ今見事ハ不思議サヨトテ、歌讀連歌シテ慰ミ合ヘケリ。其中ニ平大納言ノ北方、帥典侍古歌思出テ、

詠レハヌル、袂ニヤトリケリ月ヨ雲井ノ物カタリセヨ

泣々口スサミ給ヘハ、九郎判官モ東男ナレ共、優ニ縁アル心チシテ哀ニソ被思ケル。

とある。屋代本、平松家本の「連歌シテ」は、百二十句本には、「なんとして」であつて、屋代本等が鎌倉末の風を帯びてゐる。後出の一端でもあらうか。劔卷は別冊にもあるが、本文中にも劔卷がある。

その前後を示せば、

神靈ハ浪ノ上ニ浮ヒタリシヲ、方岳太郎親經力取上テ判官ニハ奉タリケルトカヤ。神靈ヲハ注ノ御箱トモ申ス。寶劔ハ永ク沈テ見ヘ給ハス。神代ヨリ傳レル三ノ靈劔有。……(劔卷)……海ニ沈ミ給シ

後ハ、カツキスル海人ニ仰テ、是ヲ求サセ、水練ニチャウセル者ヲ召テ尋ネサセラレケレ共、不見ケリ。天神地祇ニ捧幣ヲ被修大法祕法ケレ共、験ナシ。龍神取之ヲ龍宮ニ納メテケルヤ覽、其後ハ未出來。

とあつて、傍點の如く百二十句本、平松家本と殆ど同文である。劔卷は、覺一本の劔卷に比して簡略であつて、

素盞鳥尊出雲國へ被流給タリシニ、其國ノヒノ河上ノ山ニ大蛇有、尾頭共ニハ有ケリ。八谷八峯ニハヒコレリ。背ニハ苔蒸テ諸ノ草木生タリ。眼ハ日月ノ光ノ如シ。年々ニ人ヲ呑ム……。天武天皇朱鳥元年ニ此ヲ召テ内裏ニ置ル。則寶劔ト名付ラル。代ノ代ニテ有シ程ハカウコソ有シニ、今ハ二位殿腰ニ指テ海ニ沈ミ給シ後ハ、カツキスル海人ニ仰テ是ヲ求サセ水練ニチャウセル者ヲ……。

とある。これは屋代本、平松家本の性格として大いに考究すべき所の一つである。次に一門大路渡の章でも、

二宮モ京ヘイラセ給フ。都ニタニモ坐々ハ、此宮コソ位ニ付セ給ヘキニ、是モ只四宮ノ御運ノ目出渡ラセ給ニヨテ也。御心ナラス平家ニトラハレテ、此三年カ間、西海ノ浪ノ上ニ漂ハセ給シカハ、御母儀モ御乳父持明院宰相モ哀終ニ何ナル御有様ニカ聞成進セ候ス、覽トテ、朝夕只泣給フ外ノ事ソ無リケル。去共今ハ無別ノ御事還上ラセ給タレハ、皆悦ハ泪ヲ流シアハレケル。法皇ヨリ御迎ノ御車ヲ進セサセ給フ。御迎ニハ七條侍從延清、紀伊守範光ソ進ラレケル。七條ノ坊城ノ御母儀ハ御所ヘソ入セ給ケル。

とあり、傍點の示す如く全體にわたつて覺一本と甚しい差がある。百二十句本、平松家本とは殆ど同文である。鏡の章では、

内侍所ト申ハ昔天照太神天岩戸ヲ閉テ、天下ヲ闇ニナサセ給シニ、八萬神達集テ、櫛ノ御幣ヲ捧テ御神樂ヲシ給シカハ、天照大神岩戸ヲ小目ニ開テ御覽セラル。其時世中少シ明フ成テ、神達ノ御顔ノ白タトシテ見ケレハ、岩戸ノ内ヨリ御神穴面白トソ宣ケル。

とあつて、平松家本と同じく、覺一本よりは簡略な所がある。又百二

十句本と同一の所もあり差のある所もある。百二十句本は記事の順序が屋代本と異なるので八坂流本の中にも他の語り方があつたものであらう。次に文之沙汰の章は、平松家本と同文であるが百二十句本と少しく異りて、覺一本に近い所がある。次に建禮門院の記事で、灌頂卷の女院出家の章にあたる。覺一本と百二十句本、屋代本、平松家本との間に大差のない所であるが、屋代本、平松家本が覺一本に近い所が二、三ある。百二十句本、屋代本、平松家本は次に、重衡北方の事がある。

仙家ヨリ還テ七世ノ孫ニ逢ケルモ角ヤト覺テ哀ナリ。本三位中將重衡ハ北方ト申ハ、故五條大納言邦綱卿御娘、先帝ノ御乳母、大納言典侍トソ申ケル。重衡卿一谷ニテ生、虜レ給ヌト聞シカハ、西海ノ旅ノ空ニテ歎悲給シカ、先帝ニ後レ奉給テ、舊都ヘ歸リ、姉ノ大夫三位同宿シテ日野ト云所ニソ御坐シケル。三位中將ノ露命草葉ノ末ニスカリテ、未消ヤラント聞ヘシカハ、哀レカハラヌ姿ヲ今一度見モシ見ヘモセハヤト、互ニ被思ケレ共叶ハネハ、只泣斗ニテ明シ暮サセ給ケリ。

とある。覺一本は卷十一の重衡被斬の章の初にある所である。この次は、副將被斬の章である。初は、

平家滅テ後國々モ靜カニテ、人ノ行通フモ煩ナシ。サレハ九郎判官計ノ人コソ無ケレ。鎌倉ノ源二位ハ何事ヲカシ出シ給ヘル。高名アル只判官ノ代ニテ有ヘシト内々人申ト聞ヘシカハ、鎌倉殿是ヲ傳聞給テ、コハ何ニ、頼朝カ作居謀ヲ廻セハコソ平家滅レ、九郎斗ニテハ爭カ代ヲハ可治……。

再び屋代本平家物語について

とあり、傍點の示す如く百二十句本、平松家本と殆ど同文であり、最後は次の如くである。

河越女房共ニ申ケルハ、大臣殿既ニ關東ヘ御下向候、重房モ判官ノ共ニ下候ヘハ、若君ヲハ緒方三郎カ方ヘ入進スヘキニテ候。御車寄テ候。疾々ト申ケレハ、女房共ケニ心得テ、ネイリ給タル若君押驚シ奉リ、イサハセ給ヘ。御迎ニ御車ノ參テ候ト申セハ、若君驚テ昨日ノ様ニ大臣殿ノ御方ニ又參スルカト悦給ソ糸惜キ。若君御車ニ乗奉リ、六條ヲ東ヘヤル。河原ニ車ヲ遣留テ、敷皮シイテ、若君下シ、二人ノ女房共日來ヨリ思歸タル事ナレ共、指當テハ悲クテ、人ノ聞ヲモ不憚、聲ヲモ不惜叶ハレケリ。若君ハアキレ給ヘル様ニテ、二人ノ女房共ハ泣ヲミテ、大臣殿ハ何クニ渡ラセ給ソト宣フ。武士只今是ニ入セ給ハンスルニ、下テ待進セサセ給ヘトテ、敷皮ノ上ニ懷下奉ル。河越カ郎等太刀ヲ拔テ寄ケレハ、若君太刀ノ影ヲ見給テ、泣ヲ、トストヤ思ハレケム、イナヤ啼シトテ、乳人ノ懷ヘ顔ヲ差入給ケルヲ、河越遲シト目ヲ合セケレハ、太刀ニテハ不叶シテ刀ヲ拔テ、乳人ノ懷ニ顔差入給ヘルヲ引放チ、終ニ頸ヲハ取テケリ。頸ハ判官ニ見奉ントテ持セテ行。質ヲハ空ク河原ニ捨テケリ。二人ノ女房共歩赤脚ニテ判官ノ前ニ行テ、若君ノ御頸給テ、後世訪奉候ハント申ケレハ、尤モサルヘシトテ被免ケリ。二人ノ女房若君ノ頸ヲエテ、乳人ノ女房ノ懷ニ入、二人ツレテ泣々歸ルトソ見ヘシ。其後五六日有テ、女房ノ二人桂河ニ身ヲ投タル事アリケリ。一人ノ女房ハ少キ者ノ頸ヲ懷ニ入テ沈ミタリケルソ、若君ノ乳人ノ女房也ケル。乳人カ身ヲナクルハ理ナリ。カヒシヤクノ女房サヘ身ヲ

投ケルコソ難有ケレ。

とある。平松家本も同文である。

以上卷十一を通覽するに、平松家本と同文であり、百二十句本と殆ど同文の章が大部分をしめ、僅かの章が覺一本に近い詞章を有する。これによつて、もし屋代本が基で覺一本が後の成立ならば、極めて甚大な改訂をしなければならないのである。單なる一章のみの差異の問題ではない。又屋代本が最古であるならば、百二十句本は屋代本よりやや覺一本に近い所が多いので、百二十句本はその後の成立とならう。しかし相互に出入があつて、覺一本の如き整つた詞章には容易になり得ないのである。屋代本、平松家本の簡略な叙述は覺一本を簡略にすれば容易に成立するが、屋代本、平松家本を基として増補して行く時に、屋代本、平松家本の特異な詞章と八坂流の詞章を改めて一方流本に統一完成することは一方に一方流本なくしては不可能であらう。

卷十二、卷頭は、八坂流甲類本が宗盛清宗父子の關東下向事で始まる事は既に述べた所であるが、最も注目すべき分割法である。次に各章について見て行かう。腰越の章（覺一本の卷十一）では、卷頭、

元暦二年五月七日ノ卯尅ニ九郎大夫判官大臣殿父子ヲ奉具テ關東ヘソ被下ケル。判官情深キ人ニテ、道程様々ニ勞リ慰メ奉リ給ケリ。

大臣殿、アハレ宗盛父子カ命ヲ申有メサセ給ヘカシト宣ハ、判官、今度義經勳功賞ニハ一向二所ノ御命ヲコソ申有メハヤト存チ候ヘ。

ヨモ奉失マテノ事ハ候ハシ。何様ニモ奥ノ方ヘソ下シ進セ候ハムスラムト被申ケレハ、大臣殿、東ノ奥遠國ノ外、夷力住ナル千嶋ナリ共ト宣ケルソ糸惜キ。昔ハ名ヲノミ聞シ東海ノ宿々名所々々ヲ見給

テ、日數フレハ駿河國浮嶋カ原ニソカ、リ給フ。此ハ浮嶋原ト申ケレハ、大臣殿、

鹽路ヨリタエス思ヲスルカナル名ハ浮嶋ニ身ヲハ富士ノネ右衛門督、

我ナレヤ思ニモユル富士ノ根ノ空キノラノ煙ハカリハサル程ニ人々鎌倉ヘ入給フ。

とある。これは全く百二十句本と同文で、覺一本とは全く異なる所である以下又同文である。然し腰越狀はなく、頼朝と宗盛との對面があつて、六月九日ニ大夫判官大臣殿父子ヲ請取テ都ヘ被還上ケリ。大臣殿ハ是ニテ已ニ何ニモ成ンスルカト思タレハ、二度都ヘ立歸ル事ノウレシサヨト宣ヘハ、右衛門督ハ若フ御坐シケレ共、心得給テ、何カウレシウ候ヘキ。都ニテ切テ渡ンスル料ニテコソ候ラハメトテ、還上ル事ヲ恨シケニソ被思ケル。國々宿々ヲ過行ニ、此ニテモヤ／＼ト被思ケル程ニ尾張國ノマト云所ニソ着給ヒケル。大臣殿ハ是ハ故左馬頭義朝首ヲ刎タ所也。其墓ノ前ニテソ一定切レムスラント被思ケル處ニ、判官大臣殿父子ヲ奉具テ、父ノ墓ノ前ニテ三度臥拜ミ草ノ影ニテモ、亡魂尊靈必是ヲ見給テ、御心ヲヤスメ給ヘトソ被申ケル。サレトモソコニテモ不被切、大臣殿、今ハ無甲斐命斗ハ助ンスルニコソト宣ヘハ、右衛門督、何トテカ可助候。當時熱キ比ナレハ、頸ノ損セヌ様ヲ計ヒテ都近ナリテコソ、切候ハンスラメトテ、無隙念佛ヲソ申サレケル。大臣殿ニモス、メ奉リ給ケリ。日數フレハ六月廿日近江國篠原宿ニソ付給フ。

とある。これも覺一本と全く異り、百二十句本と同文である。

次に重衡被斬の章も、

本三位中將重衡、狩野介ニ被預テ、自去年伊豆ニソ御坐シケル。鎌倉殿南都ノ大衆ハ此人ヲハ定テ見タル覺、此次ニ可渡トテ、源三位入道頼政力孫、伊豆藏人大夫頼兼ニ仰テ、南都ヘソ被渡ケル、都ヘハ不被入山科ヨリ醍醐路ヘコソ被懸ケレ。三位中將守護武士ニ向テ宣ケルハ、我一人ノ子ナケレハ、此世ニ思置事無キカ、年來相ナレタリシ女房ノ日野ト云所ニ在リト聞ヲ、打過様ニ立寄テ、互ニ姿ヲ今一度見モシ、見ヘモセハヤト思ハイカニト宣ヘハ、守護武士安キ御事候トテ、日野ニテ大夫三位ノ宿所ヲ尋テ…………。

とあり、百二十句本と殆ど同文である。「脱カフル衣モ今ハ」の歌の次にも、

三位中將契アラハ後世ニテハ、必生合奉ン、一蓮ニト祈ラセ給ヘトテ、涙ヲ押テ出給フ。北方走モ付テ御坐スヘクハ被思ケレ共、其モサスカナレハ、御簾ノ内ニ倒臥テソ被泣ケル。其聲ノ庭マテ聞エケレハ、三位モ前ヘト急ク由ニテ御坐ケレトモ、馬ヲモ進給ハス、被泣ケルコソ哀ナレ。南都大衆、三位中將ヲ請取テ、東大寺興福寺ノ大垣引廻シテ、僉議シケルハ…………（中略）五色糸ト觀シテ、三位中將ニ引ヘサセ奉ル。中將佛ヲ拜給テ被申ケルハ、我不慮ニ伽藍焼失ノ餘殃ニ纏サレテ、達多力逆心有シモ、還テ天王如來ノ記削ニ預リ、闍王ノ惡逆モ、則善根ノ身ヲ得タリキ。願クハ翻惡業ヲ安養淨土ヘ引導シ給ヘト、念佛高聲ニ唱テ、頸ヲ延テソ被切ケル。日比ノ惡行ノ憎サハサル事ナレトモ、今日ノ有様ヲ見テ、守護ノ武士モ千萬ノ大衆モ皆袖ヲソ絞ケル。

再び屋代本平家物語について

とあるのも、傍點の示す如く、百二十句本と殆ど同文である。大地震の章も、（覺一本は卷十二の卷頭である）、殆ど百二十句本と同文で、建禮門院の記事に及んでゐる。

文德天皇ノ御時……朱雀院ノ御時、天慶二年四月ノ大地震ニハ、主上五文ノアク屋ヲ立テ坐シケルト見ヘタリ。開闢以來カ、ル事可有トモ不覺。平家ノ怨靈ニテ代ノ失ヘキカトソ人申ケル。建禮門院ハ適立宿ラセ給フ吉田ノ御坊モ、此大地震ニ傾破テ、最ト栖セ給ヘキ便モ不見ケリ。何事モ昔ニハ替終タル浮世ナレハ、奉懸情ヲ是ヘト申サルハ、人モ不坐、綠衣監使宮門ヲ守ルタニモナシ…………。

建禮門院の大地震にあふ事は覺一本は灌頂卷にある。次に、源氏六人受領の事がある。八坂流甲類諸本にはすべてあり、乙類諸本（中院本など）にもすべてある。これは盛衰記、長門本などに存するもので、これらの異本の影響と認むべきであらうか。もし屋代本が古くて覺一本が後の成立とすれば、どうして覺一本がこれを省略したか考ふべき點があらう。次に百二十句本は、腰越と紺搔の二章にあたる記事があるが屋代本にはなく、平大納言被流の章につづく。これも屋代本は百二十句本と同文で、覺一本の後に、

愛別離苦ノ悲ヲ古郷ノ雲ニ重ネタリ、日數フレハ大納言能登國ニソ着給フ。彼配所ハ浦近キ所也ケレハ、常ハ浪路遙ニ遠見シテ慰ミ給ケルニ、岩ノ上ニ松之有ケルカ、根アラハニテ浪ニ洗ハレケルヲ見給ニ、大納言、

白波ノ打ヲトロカス岩ノ上ニネイラテ客木ノ幾代經ヌラシ

加様ニ詠明シ暮シ給テ、彼配所ニテ大納言遂ニ無墓成給ケルソ哀ナ

ル。建禮門院ハ秋ノ暮マテ吉田ノ御坊ニ渡ラセ給ケルカ、コ、ハ猶都近フテ……。

とある。これも傍線の示す所は覺一本にはない所である。次の女院の大原入御の章は、覺一本は灌頂卷にあるものであるが、屋代本と百二十句本は殆ど同文で覺一本とはかなりの差がある。次に土佐房被斬の章があり、

其比九郎判官鎌倉ヨリ可被討トソ聞ケル。判宮内々宣ケルハ、弓箭取身ノ親ノ敵ヲ討ツル上ハ、何事カ是ニ過タル思出有ヘキナレトモ、關ヨリ東シハ源二位御坐ヌレハ不及申ニ、西國ハ義經カマ、トコソ思ツルニ、是コソ思外ノ事ナレ。僅ニ伊與國一ヶ國没官領廿餘所給テ、侍十人被付タリシモ、鎌倉殿内々宣フ事有ケレハ、皆鎌倉ヘ逃下テ旗差ノ料トテ被付タル足立新三郎清經斗ソ候ケル。此判官ハ源二位ト兄弟ナル上、殊ニ父子ノ契ヲシテ不淺、去年正月從父兄弟木曾左馬頭ヲ追討セシヨリ以來、度々合戦ヲシテ、終ニ平家ヲ攻落シ四海ヲ澄シ、一天ヲ鎮ム。勳功無比類之處ニ、何ナル子細ニテ、鎌倉源二位加様ニ冤ヲハ存スルヤ覽ト上從一人下至萬民マテ不審ヲナス。是ハ去年ノ春渡部ニテ船揃ノ有シ時、梶原ト判官ト逆櫓ヲ立テ立テシノ論ヲシテ、大ニ睨ハレタリシ事ヲ、梶原無本意事ニシテ、讒言シテ終ニ失ヒケルトソ聞ヘシ。世ヲ靜メ給テ鎌倉殿、今ハ頼朝ヲ可思懸者ハ奥ノ秀衡ソ有覽、其外ハ不覺ト宣ケレハ、梶原申ケルハ、判官殿モ怖シキ人ニテ御渡リ候物ヲ、打解サセ給テハ叶マシキ由ヲ申ケレハ、頼朝モサ思也トソ宣ケル。源二位殿土佐房昌俊ヲ召テ……。

とある所は、百二十句本は源氏受領の事の次に述べ、腰越、紺搔、時忠配流、女院大原入御と續くのである。土佐房被斬の章も、百二十句本と同文であるが覺一本とは甚しい差がある。

伊與守其比シツカト申白拍子ヲ思テ被置タリケルカ、申ケルハ、只今ノ法師ハ起請ハ書テ侍ヘ共、有子細ト覺ヘ候。人ヲ付テ見セ給ハテト申セハ、童ヲ一人ミセニ遣ス。土佐房モ怖シキ者ニテ、判官定メテ人ヲ付テソ見給覽トテ、是モ門ニ人ヲ立テ見程ニケシカル童部ハ一人立栖行ケルヲ捕ヘテ間ヘ共落ネハ、臆打殺。既ニ暗フ成マテ不見ケレハ、シツカ又女ヲ一人見ニ遣ス。女無程走歸テ、土佐房ハ只今物詣トテ打出候。此使ハ打殺サレテ候ト申モ終ネハ、土佐房其勢五十騎斗ニテ伊與守ノ宿所六條堀川ニ推寄テ時ヲトツト作。伊與守ハ折節炙治シテ物具スヘキ様モナクテ御坐シケルカ、時ノ聲ニ驚テ、カハト起テ鏡取テ着、矢カキ負イ弓取テ、御馬進セヨト宣ヘハ、馬ニ鞍置テ挺ノ際ニ引立タリ。打乗テ、天竺震且ハ不知、義顯ナントヲ手込ニシツヘキ者ハ覺ヌ物ヲト名乗テ喚キ懸給フ。次ク兵須々木三郎重經、龜井六郎重家、奥州佐藤四郎兵衛忠信、伊勢三郎義守、源八兵衛弘綱、熊井太郎、江田源三以下究竟兵廿餘騎喚テカク。

とあつて、覺一本とは傍線の示す如く異なる。判官都落、吉田大納言の沙汰の章も、覺一本と差があり、百二十句本と殆ど同文である。次に覺一本は六代、泊瀬六代、行家義憲被斬の順序であるが、屋代本、百二十句本は、先に行家義憲の沙汰がある。一端を示せば、

十郎藏人行家ハ天王寺ニ在ト聞ヘシカハ、北條下討手ヲ。信濃國ノ住人家原九郎、常陸國住人石間五郎二人二百騎計ニテ天王寺ニ下

ル。窪樂頭兼春カ許ニ在リト聞ヘシカハ、ソコヲサカセ共無リケリ。兼春カ娘二人有リ……………。

とある。これも屋代本、百二十句本は殆ど同文である。六代の章では、屋代本と百二十句本とは少し差があるが大略は同文に近い。

源二位都ノ守護ニ被上タル北條カ許ヘ仰上ラレケルハ、平家ハ一門廣カリシカハ、定テ子孫多カルヲ、頼朝カ子供ノ末ノ敵ト成シ給ナ。一人モ有覽ハ尋出シテ失給ヘトソ宣上ラレタリケル。北條尋出テ失ントス。京中ニ平家ノ子孫尋出タラン人ニハ、訴訟モ所望モ請タニヨルヘシト披露シケレハ、京者案内ハ知りタリ。所望ハ多シ、尋求ケルコソウタテケレ。

右ノ傍線のある所は覺一本、百二十句本にはなく、屋代本のみの語である。この章も覺一本とは甚しい差がある。

齊藤五北方ノ御前ニ參リテ申ケルハ、敵坊ノ四方ヲ打圍ミ候。何チヘ漏シ進ラセヘシトモ不覺候。何カ仕候ヘキト申セハ、六代御前聞之給テ、遂ニ遁マシク候ヲ、只疾出サセ給ヘ、暫シモ候ハ定武士共打入テサカス程ナラハ、各ウタテケ成有様共ヲ見サセ給ハン事コソ悲ケレ。命生テ暫モ六波羅ニ候ハ、暇乞テコソ參候ハメト宣ケレハ、乳母ノ女房泣々起上テ髪搔撫結ナントシテ、裝束セサセ奉ル。母御前黒木ノ念珠ノ少キヲ取テ、是ヲ持テ何ニモナラン時マテハ、念佛申テ父ト同所ニ生レヨトテ、六代御前ニマヒラセサセ給ヘハ、只今母御前ニハ別進セ候共、後ニハ父ノ渡ラセ給フ所ヘコソ參リ候ハンスレト、ヨニモヲトナシヤカニ宣ケレハ、母御前聞之給ニ付テモフシマロヒテソ被泣ケル。夜叉御前トテ十二成給フ姫君走出給テ、兄御

前只一人御出有ニ、母御前モ御出アレ、我モ參ントテ泣給ヘハ、乳母泣々取留奉ル。六代御前ハ今年十二成給フカ、餘ノ人ノ十四五ヨリモ猶ヲトナシク貞姿嚴シク御坐ケリ。涙ノスミケルヲ、ヨソニ弱氣ヲミエシトヤ、押ル袖ノ下ヨリソ、コホレケル。

とあつて、屋代本は傍線の如く百二十句本と異なる所もあり、その一部には覺一本と同じ内容を傳へる所もある。傍線の示す如く、屋代本、百二十句本は覺一本とは異なる語を多く有してゐる。又、

若君ノ母ヤ乳人ハ空キ跡ニ留テ、兎角云遣タル方ハナクテ、只何ニセハハトソモタヘ給ケル。人ノ子ハ差シ放テ乳母ナントノ許ヘ遣シテ時々見ナルモ猶網又思ニテアン也。是ハ生レテ後一日片時モ身ヲ不放、二人カ中ニテソタテシ物ヲ。憑ヲ懸シ人ニモ、アカテ別シ後ハ、二人ヲ左右ニ置テコソ慰ツル物ヲ、余ハ獨ハアレ共獨ハナシ。今日ヨリ後ハ何ニセン。命生テ六波羅ニ暫シモアラハ、暇乞テ參ント云テ出テツルナクサメ詞ノヨトナシサヨ。忘レツトコソ覺エネ。年比長谷觀音ヲコソ深ク憑進ラセタリツルニ、定業ヲバ佛モ叶ハセ給ハサリケルヨ。少キヲハ水ニ入レ埋土ニト聞ク。是ハヲトナシケレハ定テ切コソセンスラメ。夕去ヤ切レスラン。曉ヤ切レスラン。怖シウヤ思ンスランナト、長夜スカラ露モマトロミ給ハネハ、其後夢ニタニモ不見給。限アレハ雞人曉唱テ長夜モハヤ明ケリ。

とあつて、屋代本は傍線の示すが如く、百二十句本にない語もある。それは一部覺一本とも共通する所もあるが、傍線の示す如く又一方では覺一本になき語も多く存在する。屋代本に、

尋入テ聖ノ本坊尾崎ノ坊ト云所へ行テ、倒伏テ申ケルハ、御産ノ内

ヨリ參テ取上ソタテ進セテ、今年已ニ十二ニ成給候若君ヲ、昨日武士ニ取レテ候ソトヨ。御貌嚴ク渡ラセ給ニ、哀聖ノ請取セ給テ、御弟子ニシ進セサセ給ヘカシトテ啼ケレハ、文學上人、子細ハ何ナリケル事ソ、誰カ公達カト問給フ。今ハ何ヲカ隠シ進セ候ヘキ。小松三位中將殿ノ公達ニテ渡セ給候。昨日取進テ候カ、今ハ如何成セ給ヌ覽ト申ケレハ、文學、サテ乞請タラハ一定此寺ニ置奉給ランスルカ、ソレハ御命タニモ助給タラハ、兎モ角モ聖ノ御坊ノ計也トソ申ケル。

とあ所を、百二十句本では、

たかをさんへたづねいり、おぎさばうにゆき、こまつの三ぬの中將殿のわかぎみ、こんねんは十二さいになり給ふ。よにいづくしくましませしを、きのふぶしにとられてさぶらふぞ。あまりにいとをしく候へば、こひとり御でしに給へかしと申ければ、もんがく、さて一ぢやう此山にをき給はへり。御いのちだにたすかり給はゞ、ひじりの御ばうの御まゝとぞ申ける。

とある。兩本にも共通な語もあるが、差の甚しい章であらう。泊瀬六代の章も同様であるが、覺一本の六代出家の章の前半を續けて述べる。

但頼朝一期ノ間ハ誰モ争カ可傾ク。子供ノ末ソ知ラヌト宣ヒケルコソ怖シケレ。其比近衛殿御攝錄留ラレサセ給テ、御分國丹波國辭申サセ給ケリ。是ハ暫ナレ共平家ノ聳ニテ渡ラセ給シニ依也。九條殿ハ内覽之宣旨ヲ蒙ラセ給テケリ。是ハ自保元平治以來タ多ク人々ノ滅失ケル事ヲ御歎有ケル。隱徳不空陽報忽翻テ代ヲ知食スコソ目

出ケレ。

右の傍線のある所は百二十句本には存しない。これは長門本によつたものと認むべきであらう。次に大原御幸の章が来る。

中嶋ノ松ニ懸レル藤浪、梢ノ花ノ殘レルニ、山郭公ノ一聲モ今日ノ御幸ヲ待顔也。深山隱ノ習ナレハ、青葉交ル遅櫻、初花ヨリモ珍シク、水ノ面テニ散シキテ、寄來ル波モ白妙ナリ。(ほうわうこれをゑいらんあつて、かくそおほしめしつゞけらる。

いけ水にみぎはのさくらちりしきてなみのはなこそさかりなりけれ)

庭ノ青草露重ク籬ニ倒懸リツ、外面ノ小田ニ水越テ鳴立隙モ無リケリ。女院御庵室ヲ御覽スレバ……。

尼涙ヲ押テ申ケルハ、事新キ申事ニテ候ヘ共、釋迦如來ハ中天竺ノ主、淨飯大王ノ太子、サレトモ伽毗羅城ヲ出テ、檀德山ニ入、高キ峯ニ上テハ瓜木ヲ取、深キ谷ニ下リテハ、水ヲ結ヒ雪ヲ拂イ氷ヲ碎クハミナラス、難行苦行ノ功積テ、遂ニ正覺ト成給フ。前世ノ宿習ヲモ後世ノ宿業ヲモ覺ラセ給テ、捨身ノ行ヲ修シ坐マサンハ、何ノ御憐カ候ヘキトソ申ケル。此尼景氣ヲ御覽スレハ、身ニ着タル物ハ絹布ノ類トモ不見分、淺猿ケ成ル作法也。此有様ニテ加様ノ事申不思議サヨ、汝ハ何ナル者ソト御尋有ケレハ、尼涙ニ咽ヒ、暫シハ物ヲモ不申、良有テ、泪押拭、是ハ小納言入道信西カ娘、阿波内侍候ト申ス。内侍ハ紀伊二位ノ娘也。紀伊ノ二位ハ法皇ノ御乳人也シカハ、サシモ御身近クコソ召仕レシ御事ニ、御覽シ忘レサセ給テ、今更夢カトソ驚カセ給ケル。法王モ御衣ノ御袖ヲ絞リモ敢サセ給ハス、御障子ヲ開テ御覽スレハ、來迎ノ三尊東向ニ御坐ス……。



とある。傍點の示す如く殆ど百二十句本と同文である。中の平假名の所は百二十句本にはあるが屋代本にはなく、脱落と認むべきであらうか。前後の文は同一であるからである。

六道沙汰の章は、覺一本に比して簡略な所があり、是程ニ厭浮世ヲ入菩提道ニ給上ハ、何ノ御憚カ候ヘキ、早々御見參有テ、法王ヲ還御成シ進セサセ坐々ト申ケレハ、女院ケニモトヤ思食サレケン、泣々御前ニ進セ給フ。互ニ御泪ニ咽給テ暫ハ仰出サル事モカシ。良有テ、法王御泪ヲ押ヘ、此御有様トハツヤゝ思進セ候ハス、誰カコト、ヒ進候ト仰ケレハ、女院、冷泉大納言七條修理大夫、此人々ノ内ヨリ時々問レ候ヘ。其昔ハアノ人々ニ可被訪トハ露モ思寄ラス候シ事ヲトテ御涙ニ咽ヒ給ケリ。

とあり、又、

攝錄以下ノ大臣公卿ニモテサレシ有様ハ、四禪六欲ノ雲ノ上、八万ノ諸天ニ圍繞セラレンモ、角ヤトコソ覺テ候シカ。サテモ過ニシ壽永ノ秋ノ初、木曾トカヤ云者ニ被攻テ、遙々ノ浪ノ上ニ漂テ室山水嶋トカヤノ軍ニ勝テ人々少々色直ヒテ有シニ、又一谷トカヤノ軍ニ負テ、一門十人、可然侍三百餘人滅シカハ、日來ノ直衣束帶モ今ハ何ナラス、鐵ヲ延テ身ニ纏ヒ、諸ノ獸ノ皮ヲ足手ニ卷テ、喚叫聲ノ不絶シハ、帝釋羅睺王ノ須彌ノ半ニシテ互ニ威勢ヲ争覽、修羅ノ鬬諍モ角ヤトコソ覺シカ。山野雖廣ト息ヌトスルニ無所。御年貢物モ絶ニシカハ、旅ノ力モ不及。供御ハ適々備レトモ、水不奉。雖浮大海其潮ナレハ不及飲ニ、衆流海ヲ吞ントスレハ、猛火ト成覽餓鬼道ノ衆生モ角ヤト覺テ送年月ヲ程、過ニシ歳ノ春ノ暮、先帝ヲ始進セ

テ一門ノ人共、門司赤間ノ浪ノ底ニ沈シカハ、殘留ル人共ハ喚叫聲、叫喚大叫喚ノ地獄ノ底ニ落タランモ是ニハ過シトコソ聞ヘシカ…………。

とある。覺一本と甚しく相違し、百二十句本とは傍點の示す如く殆ど同文である。女院往生の章も、覺一本に比して簡略であつて、

法王都ヘ還御成、夕陽西ニ傾ハ、寂光院ノ鐘ノ聲、今日モ暮ヌト打鳴ス。女院ハ法王ノ還御ヲ御覽シ送り進セ給テ、御涙ニ咽ヒ立セ給フ處ニ、折節郭公音信テ過ケレハ、女院、

イサ、ラハ泪クラヘム思飯鳥我モ浮世ニ音ヲノミソナク

法皇モ其後ヨリハ常ニ御訪有ケルトカヤ。女院遂ニ建久始ノ比龍女カ正覺ノ跡ヲ追ヒ、常提希夫人ノ往生ノ素懷ヲ遂サセ給ケリ。冷泉大納言隆房卿、七條修理大夫信隆ノ卿、此人々ノ北方ソ最後マテノ御訪ハ被申ケルトソ承ル。サル程ニ六代御前ハ十四五ニモ成給ヘハ…………。

とある。これによれば、女院に對する覺一本にみる如き、詳細なる記述はなく、單なる記録的な叙述に終つてゐる。これは屋代本がもし覺一本より古いとすれば、覺一本の成立には文學的な才腕の優れたものの増補といはざるを得ない。恐らくこれは屋代本にはもはや女院に對する心からの追慕もなくなつて情熱の消失したためではなからうか。

次に六代被斬の章が續くのであるが、

サル程ニ六代御前ハ十四五ニモ成給ヘハ、貌姿彌嚴ク無類見給ヘリ。十六ト申ス文治五年三月ニ、聖ニ暇請給テ、嚴ケナル髮肩廻ヨリ

鉸ミ落シ、柿ノ衣負ナント誘テ出給ケリ。

それより高野熊野に参り、都に歸つて行ひ澄した由を述べ、次に、

伊賀大夫知忠

丹後侍從忠房

土佐守宗實

越中次郎兵衛、惡七兵衛

の事を述べ、覺一本等にある、鎌倉殿上落、大佛供養の事は存しない。百二十句本も同様である。最後は、文覺流罪、六代被斬で終るのである。即ち、

年八十二餘テ隱岐國ヘソ被流ケル。上皇アマリニ毬打ヲ好マセ御坐ケレハ、文學追立ノ打使領送使ニ責ラレテ、都ヲ出シ時、様々ノ惡口共申テ下リケリ。於毬打冠者ニハ我カ流サル、處ヘ遂ニハ迎申ンスル物ヲト云テソ流サレケル。隱岐國ニ下着シテ遂ニ思死ニソ死ケル。其有様怖シナントモ愚カナリ。然ニ承久三年ノ夏比、一院右京權大夫義時ヲ討ントシ給シ程ニ軍ニ負サセ給テ、處コソ多ケレ、隱岐國ヘシモ被遷坐ルケルコソ淺猿ケレ。六代御前ハ三位禪師トテ行澄テ御坐ケルヲ、文學被流テ後、サル人ノ子ナリ、孫也、サル人ノ弟子也。髮ハソリタリトモ心ヲハヨモソラシトテ、官人資兼ニ仰テ、鎌倉ヘ被召下、此度ハ駿河國住人、岳部三郎大夫カ承テ、鎌倉ハ六浦坂ニテ遂ニ被切ケリ。十二ヨリシテ廿六マテ持ケルハ、長谷觀音ノ御利生トソ聞ヘケル。其ヨリシテ平家ノ子孫ハ絶終ケリ。

とある。これも傍點の示す如く、百二十句本と殆ど同文である。

次に「平家拔書七ヶ條」の別冊を見よう。これは、平松家本にも、そ

の目錄に、

一 慈心坊尊慧炎魔驅屈請事 但有別紙

一 流沙葱嶺事 在別紙

一 皇宮宮經正竹生嶋詣之事 但在別紙

とあるのと關係がある。屋代本の内容は、その目錄によれば、

一 義王義女佛問事同出家

一 入道相國爲慈惠大僧正化身事

一 流沙葱嶺事同宗論并高野御幸事

一 皇后宮亮經正竹生嶋參詣事

一 本三位中將重衡狩野介預事付千手前事

一 新院嚴嶋御幸事同御願文事

一 將門序

とある。これらは恐らく獨立性のある章段で、この様な取扱ひをうけたものであらうか。既に本文中にも、小督の章が卷六にあるべきものが、百二十句本の目錄には卷三に入れられてゐる。これを平家物語の成立と關係せしめて、これらの章段を後の成立とするのはやや早計のそしりをうけるであらう。それは覺一本も義王義女の章がなくて、一本（所謂別本、高野辰之博士舊藏本、岩波文庫底本）にのみ存する。その他にも、覺一本には宗論がないのも同じ性格とみるべきであり、小宰相の章も同様である。平家物語と平家説話とは別に考察すべきもので、平家物語はあくまで現存の諸本の詞章の上に立つて考察すべきものである。さてこれらの拔書の各章について述べると、義王義女の章では、百二十句本、

ほとけ御前は、かみすがたよりはじめて、みめかたち、よにすぐれ、こゑよくふしも上手なりければ、なじかはまひもそんずべき。心もをよばずまひすまじたり。

きみがよをも、いろといふうぐひすのこゑのひいきぞはるぬきにける、

とうたひて、ふみめぐりければ、にうだうしやうこく、まひにめで給ひて、ほとけに心をうつされけり。ほとけ御ぜん申けるは、こはさればなに事さぶらふぞや……。

屋代本は、

天性此佛ハ髮姿ヨリ始テ、聲ヨクフシモ上手也ケレハ、何カハ舞モ損スベキ。心モ不及舞タリケリ。見聞ハ人耳目ヲ驚カサスト云事ナシ。

君か代ヲ百色ト云驚ノ聲ノ春メキニケル

トウタイテ、蹈廻リケレハ、入道興ニ入給ヘル氣色ヲ見テ、貞能佛ヲ懷テ障子ノ内ヘ押入タリ。佛ニハ何事ニテ候ヤ覽……。

とあつて、屋代本が覺一本より差が多いと言ふべきである。この邊は大山寺本が異色のある詞章で、屋代本と一部共通するのは、

入道興に入給へるけしきをみて、さだよいいだひてしやうじのうちへおし入。

である。最後に、佛について、

四人ノ尼共遂ニ往生ノ素懷ヲ遂ケルトソ聞ヘシ。入道相國佛御前ヲ失テ手ヲ分テ被尋ケレ共無リケレハ、一定入道カ佛ハ天狗ニ被取タリトソ宣ケル。遙ニ在テ聞出サレタリケレ共、左様ニ思立テ浮世ヲ

再び屋代本平家物語について

厭ハン者ヲ、中々兎角云ニ不及トテ、其後ハ尋モ無リケリ。

といふ後日譚がある。百二十句本にはないが、大山寺本にはこれがある。これによつても、屋代本が最も古いとは速断出来ないことが分るであらう。次に、入道相國爲慈惠大僧正化身事(慈心房)は、卷六の内にあるべきもので、その本文は、百二十句本も覺一本と甚しく差異のあるものであるが、屋代本も殆ど同文で、

此寺院主光陽坊ニ此之由ヲ語申ケレハ、サテハ名殘惜キ事コサンナレ。炎魔ノ廳ニ參ル人ノ二度歸事難有、コハ如何セントテ、院主ヲ始テ寺僧共一同ニ名殘ヲ惜ミテ悲ミアヘリ。様々廿六日ノ既ニ及早旦ニ、其日ニ成シカハ、慈心房尊惠彌精進潔齋ニシテ、此寺ノ佛前ニ參リ、念佛讀經シテ居タリケルカ、睡眠頻成ケル間、チツトマトロムト思タリケルニ、如前ノ淨衣着タル俗二人童子三人迎ニトテ出テ來レリ。慈心房彼等ニ被具テ、須臾ノ間ニ炎魔王宮ノ大極殿ヘソ參リケル。十萬人ノ僧衆參集リ、歷々トシテ各讀經ス。法會ノ儀式誠ニ心詞不被及。法會終シカハ諸僧共暇マ給テ歸モ有リ、留ル僧モ有、中ニモ慈心房ハ炎魔法王ノ御前ニ被召テ參リ、先ツ庭上ニ畏テ候ケレハ……、信不信ニヨルトソ宣ケル。炎魔法王重テ曰ク、和僧

カ本國大日本國ニ平大相國ト云人有。今日我十萬僧會ノ如クニ……。

とある。覺一本とは傍點の示す如く異なるのである。これらが覺一本になるのには多くの改訂増補が必要といはねばならない。次に、流沙葱嶺事、同宗論事并高野御幸事は、卷六の内とあるが、百二十句本等も皆、卷六にあるがこれは本來は卷十にあつてこそ意義あるもので、卷六に來ると、清盛の説話の一として、高野大塔を修理したといふ點が

清盛の死去と關係があるに過ぎない。瀧口入道の高野山入、維盛の高野山詣と關連してこそ高野山の深祕性が高められるのである。その詞章は、前述の如く覺一本にはなく、一方流本の古い詞章は不明であるが、これも百二十句本と殆ど同文である。その一端を示せば、

寛治二年正月十五日臣下卿上仙洞ニテ御遊宴ノ砌ニ種々ノ御談議共  
有ケル中ニ、或人抑當時天竺ニ如來出世坐々テ、說法利生シ給ト聞  
及ニ、參テ聽聞シテンヤト云一言出タリケルニ、大臣公卿皆可參ト  
ソ被申ケル。其中ニ江帥匡房未タ右大辨ノ三位ニテ末座ニ候ハレケ  
ルカ……。

とある。岩波古典大系本卷十の増補文と比して差のあるものである。次に皇后宮亮經正竹生鳴詣事は、卷七の内にあるものであるが、百二十句本は卷五、富士河に載せてある。これは誤つてかうしたもので前後に矛盾がある。その詞章は、覺一本と大差はないが、百二十句本に近く、

奉法施片時ノ程トハ、被思ケレ共、日モ漸暮ニケリ。……誠ニ貴  
トカリケリ。サ夜モ無程深行ケハ、常住ノ僧侶、御琵琶ヲ取出シ御  
前ニ差置タリ。

とある。覺一本とは傍點の示す如き差がある。本三位中將重衡狩野介預事付千手前事は、卷十一とあるが、卷十にあるべき章である。百二十句本、屋代本共に覺一本とは甚しい差のある章である。

此詩ノ心ハ昔シ漢高祖ト楚ノ項羽ト合戦スル事七十餘度、軍毎ニ高  
祖負給フ。サレ共遂ニハ項羽打負給テ落行時、虞氏ト云最愛ノ后ニ  
名殘ヲ惜ントシ給ニ、折節燈サヘ消テ、互ニ姿ヲ相見事ナクテ、泣

別レケル心也ト承ル。三位中將心ヲ澄シ給テ、ヤ御前餘ニ面白キニ  
何事ニモ今一ト宣ヘハ、千手モ心ヲスマシツ、一樹ノ陰ニヤト  
リ、一河ノ流ヲ渡ルモ皆是前世ノ宿縁ナリト云白拍子ヲカスエスマ  
シタリケレハ、三位中將モ枕ヲ西ヘ傾ケラル。

屋代本は大體百二十句本と同文である。次に新院嚴嶋御幸事同御願文事は千手前の章に續いて書き續けてあるが、覺一本の卷五、富士河の章の中に載せてあり、百二十句本も卷五にあるもので、屋代本も卷五の本文中に、その所在を示してゐる。本文は、百二十句本と殆ど同文であつて、一端を示せば、

同廿二日新院嚴嶋へ御幸成。御共ニハ前右大將宗盛、五條大納言邦綱、藤大納言實國、六角右兵衛督家通、殿上人ニハ頭中將重衡、宮内少輔棟範、安藝守有綱トソ聞ヘシ。去三月ニモ御幸有キ。其故ニヤ一兩月ノ程ハ世中靜テ、法皇モ鳥羽殿ヨリ還御ナト有シカ、去ル五月高倉宮ノ御事ニヨテ打次キ靜リヤラス、逆亂ノ前表崩シ、地妖常ニ有テ朝廷鎮ナラサツシカハ、殊ニハ天下靜謐ノ御祈念……。

とある。傍點は覺一本と異なる所である。最後の將門之序は何故にかういつたかは不明であるが、所謂延喜聖代ともいふべき祕事で、覺一本には存しない。もと卷五の朝敵揃より發展したものである。拙著・平家物語諸本の研究三九五頁参照。

#### 四

以上によつて屋代本の主要な性格と認むべき詞章や特異なる所は引用したつもりである。これを更に概観するに、覺一本と甚しい差異の

ある所は、百二十句本や他の八坂流甲類本と共通する所がある上、屋

代本独自の詞章もある。更にその中には盛衰記、長門本によると認むべき點がある。これらの多くの異文や詞章を急に、覺一本に接近せしめる事は、到底凡慮の及ぶ所ではない。又覺一本も覺一によつて成立せられたものでもない。かくして屋代本は八坂流甲類の一本として、百二十句本、平松家本と兄弟關係による傳本と認むべきであらう。これは既に拙著の明らかにした所である。従つて平家物語異本としての性質上から單に論及する場合はともかく、屋代本を覺一本成立以前のものとして論ずることは、大いなる誤としなければ、前に引用した多數の詞章の複雑な性格は説明のつかないものである。これは最初に述べた如く山田孝雄博士が灌頂卷のある一方流本が新しく、灌頂卷のない八坂流本が古いといふ論をしたのを信憑して、その上に強ひて平家物語の異本を整理しようとしたもので、現實の詞章の流動を無視した論である。岩波古典大系の解説における渥美博士の論や富倉博士の研究を私のとらない所以である。私の八坂流流動の鐵則、一方流覺一本の如きものより徐々に八坂流本が生じて、甲類本より乙類本が展開したといふ原理が否定されない以上は、屋代本は斷じて覺一本より古態を傳へるものではなく、屋代本の多くの記事が簡略であるのは、さうした詳細を傳へる情熱が次第に減じつつあつたものと考ふべきであらう。餘りに長くなつたので、この屋代本と八坂流乙類本との比較を詳かにすれば、この八坂流本流動の跡が明白になるが、變動の跡を更に辿ることはこの場合は省略したいと思ふ。平家物語研究者は先人の言に迷ふことなく、自ら比較して平家物語全體の性格を把握して立論

せられんことを望むこと切である。

(四三、五、五)

#### 付記

覺一本が最古の形態を示すといふ筆者の見解に立つても、現在の覺一本が完全なものではない。例へば、卷十一、鏡の章に、頼朝が從二位に叙せられる條がある。

越階とて二階をすることありがたき朝恩なるに、是はすでに三階なり。三位をこそし給ふべかりしかども、平家のし給ひたりしをいまうてなり。

とある。これは源三位頼政のことを嫌つて三位を避けたのであつて、覺一本以下すべての平家の傳本が誤つてゐるのである。又卷一、清盛の出家を、仁安三年十一月十一日としてゐるが、二月十一日が正しく、二月を十一月と見誤つたらしく、屋代本は、二月廿一日としてゐる。廿一日は根據が不明である。この様な點は極めて多いので、八坂流甲類本と比較してより正確な本文を設定する必要がある。

